

書き下ろし文芸マガジン

NONSTOP

vol.2 友情

☆「クローバー」

入江棗

☆「響け、私たちの歌声」

広野未紗

☆「Dear My Life」

貴水玲

☆「平行線シンドローム」

水島朱音

☆「やろうぜ！」

土本強

☆「あたりまえのこと。」

水面浮月

☆「From・N」

番棚葵

☆「ターニング・ポイント」

諸星崇

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「NONSTOP」の第二号をここにお届けする。

本マガジンは二つの全体的なテーマを設定している。ひとつは、北陸地方の海沿いをイメージした架空の地方都市「N市」を共通の舞台としたシェアードワールドノベルズであること。そしてもうひとつは、「青春」をテーマとすることだ。

これに加えて、毎号の統一テーマも設定した。こちらも表と裏の二つがあり、表としてはキーワードを用意した。第二号の今回は「友情」である。一方、裏としては季節をテーマとさせていただいた。今回は「初夏」だ。このような事情から、先行する弊事務所発行の電子マガジン「signal」掲載の諸作品と比べ、本マガジンに掲載している作品は続き物としての性質が強めになっている。それでもなるべくどこから読んでも楽しめるようにはなっているが、できれば第一号より順繰りに追いかけて行っていただきたい。損はさせない出来のつもりである。

本マガジンには、私、榎本秋と関係ある作家および作家の卵たち、計八名（うち一名は今回急病により休載）が参加している。さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を表紙あるいは口絵として収録するという試みもさせていただいている。カバーイラストについては、これとは別に創刊時にコンペを行って選ばせていただいた。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。それでは、楽しんでいただけると幸いである。感想やご意見など、コメント機能などご利用の上でいただけると大変うれしい。

榎本秋

目次

はじめに	2
目次	3
口絵	4
イラスト	
Snow	
仔樺 (掲載順)	
舞台設定	6
へタイトルクリックで該当のページに飛びます	
クローバー	
イラスト	
入江爽	7
伊藤由希	
Dear My Life	
イラスト	
貴水玲	43
ヒトエ	
やろうぜ!	
イラスト	
土本強	77
U35	
From・N	
イラスト	
番棚葵	107
伊藤由希	
響け、私たちの歌声	
イラスト	
広野未沙	141
うらら	
平行線シンδροーム	
イラスト	
水島朱音	175
正午あきら	
あたりまえのこと。	
イラスト	
水面浮月	205
新月竜	
(※作者急病のため休載。イラストのみ掲載させていただきます)	
ターニング・ポイント	
イラスト	
諸星崇	207
橘ぼん	
解説	233





舞台：N市

☆海に面した盆地上の小都市

○海 → 山でいきなり切り立っており、海に面していない周りは山で囲まれてる

☆高速道路開通の賛成・反対でもめている

○大きな都市（県庁所在地）と都市を繋げるための道路で、市の活性化を見込んでいる

☆市内に男子校（昇星学院）、女子校（優華女学院）、共学がそれぞれ存在する

☆駅前大きめのショッピングモールができたばかり

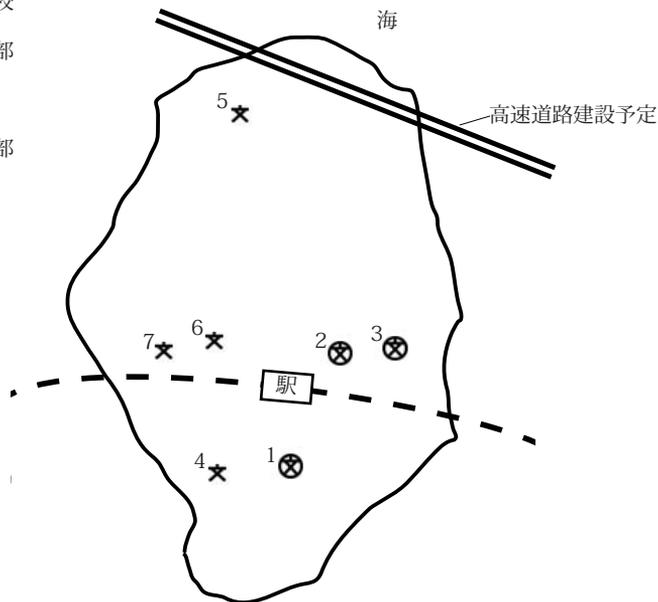
☆地主＝旧家がある

○「塚本家」という地主が存在する

○本家・分家があり市内に家が散らばっている

○高速道路問題では一族で揉めている

- 1 → 市立中央高等学校
- 2 → 昇星学院高等部
- 3 → 優華女学院高等部
- 4 → 市立第一中学校
- 5 → 市立第二中学校
- 6 → 昇星学院中等部
- 7 → 優華女学院中等部



An anime-style illustration featuring three characters against a vibrant green background with a pattern of white polka dots and scattered multi-colored stars (yellow, blue, pink, orange, white). In the center, a young woman with short black hair and large, expressive eyes is shown from the waist up, wearing a dark blue school uniform jacket with a red collar and a dark blue pleated skirt. She has her hands clasped near her chest and a joyful, open-mouthed expression. To her left, a young man with short black hair, wearing a black zip-up jacket and black pants, stands looking towards the viewer with a slight smile. To her right, another young man with short brown hair, wearing a black turtleneck sweater and black pants, stands looking upwards and to the right, holding a black smartphone in his hand. The overall mood is bright and celebratory.

クローバー

入江棗

Illustration: 伊藤由希

あらすじ

中学三年生のクラス替えで地主の次男・塚本楓と同じクラスになった千伽。周りから恐れられている楓と隣の席になった上に、図書委員を強制された。はじめ楓に怯えていた千伽だったけれど、彼と話をしている内にだんだん慣れていき、二人は友達になる。

佐々口孝士



中学三年生。千伽の幼馴染。千伽のことをよく気にかける。

高橋千伽



中学三年生。本屋の娘。本が好きで大人しい性格。

塚本楓



中学三年生。地主の分家の次男。一匹狼で少しわがまま。

第二話 初夏の晴天

塚本くんに借りた傘をよくよく見ると、私でも名前を聞いたことのある有名ブランドのものでものすごく焦った。雨が上がった翌日、一日きっちり日干ししてお返しした。

傘の貸し借りから一ヶ月ほどが経ち、GW明けの今日。休みの最中は一日めぐみと遊んだけど、残りの日はほとんど店番に徹していた。

お母さん達が居なかつたわけじゃない。二日くらい高速道路問題の集会に行っていたけど、それも数時間だけ。店番はその数時間だけじゃ済まなかつた。

「万引き？」

「そう」

塚本くんと関わるようになってからクラスの女子に距離を置かれているので、昼食は先生に内緒で図書室に行つて食べることにしている。別にそこまでいうほど親しい友達がいちたわけじゃないから一人なのは構わなかつた。昔から人とテンポがずれているのか、いじめられないまでも仲間はずれになることが多かつたし。

それでも一人よりは誰かのご飯を食べた方がいい。最近は毎日孝士と一緒に食べてくれ

ている。孝士にはちゃんと友達がいるのに、悪いと思いつつ甘えてしまう。

今日の話題はあまり明るいものではなかった。

うちで高速道路の次に重大な問題の話。

「今までもなかったことはないけど、ここ二週間くらいが酷くて。店番を二人体制にしたの」

私はまだご飯が半分くらいとおかずが少し残っていたけど、孝士はすでに食べ終わっている。男の子ってなんで食べるの早いんだろう。

「それでどうにかなったのか？」

「二人の時はね。でも一人になると駄目。隙を見て盗られちゃう。ジロジロ見てたらお客さんへの印象悪くなっちゃうからそれもできないし」

私とお父さんかお母さんで店番をしていたGWは被害ゼロで済んだ。でも私が学校で店に出られない平日はどうしようもない。お父さんとお母さんは集会以外でも道路反対派の人と会っているみたいだから、店番は一人になってしまう。特に、おばあちゃん一人だったら特に危ない。

「道路関係で出かけるの止めればいいじゃんか。目先のことが大事だろうに」

「そうなんだけど、付き合いたいなものもあるし、ね」

「なあ、それって塚本が関係してねえよな？」

痛いところを突かれた。

原因は分かっている。私が高速道路に賛成している地主の息子・塚本くんに媚を売っているという噂が流れたからだ。塚本くんの弁明（というか軽い脅しというか）もあって

子どもの付き合いには口を出さないといいことで落ち着いたらしいけど、それでもお父さん達の居心地は悪いに違いない。それを払拭すべく積極的に顔を出しているんだろう。

「そんなこと」

「ないわけねえよな。母さんが言ってた、くだらねえ噂が流れたって」

孝士のお母さんも反対派だから集会に出ている。孝士にも筒抜けだった。

「千伽は大丈夫っていうけど、実際大丈夫じゃないじゃねえか。あいつの所為で春から振り回されっぱなしだろ」

孝士の機嫌が悪くなってきた。お弁当を食べる手が止まってしまふ。初めてのことでないのだけど。

この一ヶ月、塚本くんにも少しでも関係する話題に触れるとこうなる。実際に塚本くんにも言いかけたこともあり、その度に止めていた。

悪い人じゃないと何回言っても分かってくれない。

食欲が失せてしまった。お母さんに悪いと思いつつお弁当箱の蓋を閉める。

それとほぼ同時に引き戸が引かれる音がした。図書室はこの時間原則鍵が開いていないことになっている。びつくりして入り口の方を見た。

「やっぱここだったか」

孝士と同じくらい不機嫌そうな顔をしている塚本くんだった。私と孝士を一瞥して中に入ってくる。

「日直だかで理科の用具用意しろって言われたから千伽も手伝え」

有無を言わさないのでお願いではなく命令。

最悪なタイミングだ。思わず背中が伸びてしまう。向かいに座っている孝士が不良顔負けレベルの目つきで塚本くんを睨みつけている。

「千伽は日直でもなんでもねえ。お前一人でやれよ。つーか日直もう一人いるだろうが」

「そいつが使えねえから千伽に言ってるんだよ。てかお前こそ関係ねえだろ。お前は千伽の保護者かつつーの」

今までになく険悪なムードだった。止めようにも口を出せない雰囲気は二人から発せられている。

「幼馴染がパシリみたく使われてたら止めたくもなるに決まってるんだろ。お前こそなんだよ、地主の息子だからって王様気取りか？ 調子乗るのも大抵にしろよ」

「家のことをそれ以上言うな。それこそ関係ねえよ。どいつもこいつも同じようなことしか言わねえで腹立つ」

「言われたくなかったら言われねえ振る舞いしろって言ってるんだよ。これ以上千伽を振り回すな」

孝士が立ち上がり、今にも殴り合いが始まりそうな気がして寒気がした。口が出せないとか言っただけじゃない。

「や、やめよ。昼休み終わっちゃう。用具一人で準備するの大変だし、手伝うよ」

「千伽、そんな奴の言うこと聞くなって」

「そんな奴じゃないよ」

自分でもびっくりするくらい低い声が出た。だって、塚本くんは「そんな奴」なんかじゃない。

孝士が目を丸くして私を見下ろした。「お前誰？」って言われているような気がする。「喧嘩はだめだよ。別に手伝いくらいなことないから。塚本くん、行こう」
急いでお弁当を鞆の中にしまつて席を立つた。孝士は未だに呆けた顔で私を見ている。五時間目まであと十五分もない。塚本くと急いで図書室を出た。

学校であまり浮かないことがあったのに、家ではもつと悲惨なことになっていた。家に帰ると店が閉まつていて、裏口から家に入るとお父さん、お母さん、おばあちゃんの三人が居間でテーブルを囲んでいる。テーブルを囲んでるなんて言い方をしたら平和に聞こえるかもしれないけど寧ろ逆。三人ともこれから夜逃げでもするのかつてくらい深刻な表情を浮かべている。

その輪の中に入るのはかなりの勇気が必要だったけど、ただいまを言わずに二階の部屋に行くのはよくない。

「ただいま。なんで店閉まつてるの？」

三人は私の声に反応して一斉にこちらを見た。暗い瞳が六つも私を射抜いて、怖くなる。お父さんが大きなため息を吐きながら答えた。

「万引きだよ。しかも一度に一万円分近く」
「え」

思わず声が出てしまった。今までは一回に一冊や二冊くらいだったのに。

「五千円近くする辞典を持って行かれた。そんなの現行犯で気付きそうなものだけど、ちょうど店番が一人になった短い時間を狙われた」

お父さんは気遣って言わないけど、きつとおばあちゃんが一人になった時だろう。もちろんおばあちゃんもただレジデ座っているわけじゃないけど、どうしても注意力は劣ってしまう。

「もう監視カメラ置くしか」

「万引きの所為で赤字なのにカメラなんか設置する余裕があるか」

「でも、このままじゃ」

「子どもが心配することじゃない！ 大体お前が」

怒鳴りかけたお父さんは言葉を止めた。けれどその先に続く言葉は想像ができる。

やっぱり、私の。

「それはもう関係ないでしょ！ 千伽に当たらないで！」

「人のこと言えるのか？ 初めにヒステリーを起こしたのはお前じゃないか！」

お父さんとお母さんの喧嘩に発展してしまった。おばあちゃんは慣れているのか目もくれない。淡々と電卓でなにか計算をしている。

目と耳を塞ぎたかった。一日で二回も喧嘩を目の当たりにしないといけないなんて。

しかもどちらも私のせい。

謝りそうになつたけどその口を押さえた。謝っちゃいけない。

謝つたら、道路とはなにも関係ない塚本くんが悪者になってしまう。

その場に居づらくて居間を出た。階段を駆け上がって自分の部屋に駆け込む。

電気をつけて鞆を投げ捨て制服から私服に着替え、机の上に置いてあった読みかけの本に手を伸ばす。電子辞書も一緒に取ってベッドに転がりうつ伏せになった。しおりが挟ん

であるページを開いて英文だけの本文を読み始める。いきなり覚えのない単語が出てきて電子辞書を開こうとしたけど、止めた。
本を閉じて枕に顔をつつ込む。言葉にできない遣る瀬無さが全身を支配していた。

翌日の朝、自転車を引いて家の裏口から表の道路に出ると、店の前に孝士が立っていた。
「はよ」

孝士と学校に行く約束はしていない。朝練がある孝士とは家を出る時間に差があるから。

「あれ、孝士、部活は？」

「今日はサボり。普段真面目に出てるからたまにはいいだろ」

サボりなんて信じられない。体調でも悪くない限り休むことなんてありえなかったのに。

「なんで」

「昨日あんんで千伽と別れて、そのままとか嫌だったんだよ。昨日の放課後の部活も気が逸れて全然練習にならなかったし」

孝士は後頭部を掻きながらあさつての方向を見ていた。

小さいころの孝士の姿とダブる。私が泣いてしまった時、今と同じような顔をして励ましてくれた。

照れているんだなあと気付いたのはいつだったか。

思い出せないくらい昔なのか、思い当たる節がいくつもあるのか。

どっちでも孝士と過ごした日々は私の中でも大きいことに変わりはない。

「気にしてないよ。私こそ変な言い方してごめんね」

「千伽は悪くねえよ。元をただせば塚本の所為なんだし」

塚本くんのこととは未だ認めてくれないようだ。

「行こうぜ」と言われて自転車に跨ぐ。誰かと学校に行くのは本当に久し振りだった。

嬉しいけど喜んでいる場合じゃない。この間に少しでも塚本くんの誤解を解かないと。

もうこれ以上喧嘩を見たくない。

「孝士、昨日も言っただけど塚本くんは悪い人じゃないよ。確かにいろいろ手伝ってつて言ってくるけど、雨の日に送ってくれたりしたし」

「それ前も聞いたけど、車だったんだろ？ 千伽が居ても居なくても同じじゃんか」

二人とも基本は前を見て、時折横を向いて話を続ける。道があまり装備されていないおかげで信号は少ない。

「それはそうだけど、でもあの噂でお母さんに怒られそうになった時、助けてくれた」

「だから、元はといえればあいつが原因じゃねえか。あいつが千伽を図書委員に指名して、パシリの如く使わなきゃそもそもあんな噂流れねえよ」

孝士は頑なで分かってくれようとしなかった。学校までの道のりはそれなりに長いのにあつという間にタイムオーバーになってしまう。

自転車を置いて下足場まで並んで歩く。歩幅が不自然に合っていた。

この優しさがあるのに、なんで塚本くんには敵意しか持たないんだろう。

「孝士は、塚本くんが嫌いなのか？」

あと数メートルで教室というところで、嫌だったけどその言葉を口にした。

「嫌いだし腹立つし、いいと思うところなんて一つも思いつかねえな」

合っていた歩幅が崩れた。私は立ち止まり、孝士はそのまま教室に入っていく。

もう一つ言いたいことがあったのに口は開かなかった。

塚本くんと私、友達だよ。

そう言ったら孝士はどんな顔をするだろう。私のことも嫌いになるかもしれない。

それでも『友達』を撤回する気にはなれなかつた。自分でも不思議だった。

「なに辛気臭い顔してんだよ」

一ヶ月に一、二回の割合で回ってくる図書当番の日だった。今日で三回目。塚本くんは初回のように様子をみることなく、当番開始と同時に本を見繕って読書に耽っていた。私も今読んでいる洋書を読もうと思っただけど、とてもそんな気分になれなかつた。本を閉じた音で塚本くんはこちらに気付き、怪訝そうに聞いてきた。

幼馴染があなたをものすごく嫌っているんです、とは口が裂けても言えない。

返事に少し困ったけど、もう一つの悩みを正直に話すことにした。

「万引きだあ？ そんなもん怪しい奴片っ端から声かければいいじゃねえか」

「やっている所を見て確実に盗られたって分かかってないとそれはできないよ。もしもなにも取っていないかつたら大変なことになるもの」

「信頼だだ下がりつてか？ めんどくせえなあ。誰がやったかも分かんねえの？」

最もな質問に心臓が軽くはねた。

目星が、ついていないわけじゃない。

「この人達かな、つていうのはある」

「常習犯なのかよ。けど現行犯で捕まえられねえと。もしも冤罪だったら最悪な噂流されそうだしな。」

あれ付けばいいんじゃないか？ ショッピングモールの本屋にあるセンサーみたいなやつ」

塚本くんが言いたいのは恐らく入口に設置されてるゲートのような防犯センサーのことだろう。会計が済んでいない本がそのゲートを通るとブザーが鳴る仕組みのものだ。

「そんなのうちみたいないな小さい本屋は付けられないよ」

「それもそうか。あれ高そうだしな」

塚本くんは読んでいた本を閉じてなにか考え込み始めてしまった。地主の息子にそんなことをさせるつもりはなかったのに。

「と、とりあえず店番をできるだけ二人体制にするようにしてるんだ。一人がレジに居てもう一人が店内掃除しながら回ってたりしたら流石に盗れないから」

「けどそれが徹底できねえからなくならねえんだろ？ あんなちつせえ本屋だったらバイトを雇うほどのものでもねえし」

この人賢いんだった。多く説明しないで現状を把握してしまう。

本当になんで昇星の中等部行かなかったんだらう……。

「うし、分かった」

学年内で一度は囁かれた塚本くんへの疑問について考えている内に、塚本くんは自分の中でなにか完結させたようだった。

「千伽、当番終わったからお前の家行くぞ。どうせ帰ったらお前が店番するんだろ？」

「へ？」

突然の提案に、変な声が出てしまう。

「なんで塚本くんがうちに来るの？」

「社会勉強でもしてやろうかになって。俺も店番手伝ってやるよ」

地主の次男がとんでもないことをのたまった。

家族の反応は予想の域を全く超えなかった。

三人とも目を丸くしたり口をあんだりしている。

「え、と、塚本くんが店番手伝ってくれるって」

「うちがまとめてる地域で万引きがあるなんて由々しき事態です。あ、俺のことはただの中坊だと思ってくださって結構です」

無茶なことをいう。それでなくてもうちと塚本くんの家とは現在一色触発とも言える関係だというのに。

家長であるお父さんでさえなんと言ったらいいのか分からない様子だった。言ってしまう

えば敵の子ども、追い出したいけど娘の友人だし地主の子どもとなるとそうもいかない。「塚本くん、万引きのことほんと心配してくれて！お母さんとおばあちゃんはこれから夕飯の支度とかしなくちゃでしょ？お父さんも最近忙しくて疲れてるだろうし、店番は私と塚本くんでするから大丈夫だよ」

ななが大丈夫なのか自分でもよく分からなかったけど、とりあえずはこの場をまとめることが先決なわけで。お父さん達は複雑そうな顔をしつつも住居スペースに戻っていった。

「まだ一分も働いてねえのになにげっそりしてんだよ」

あなたが唐突なことをするからです、とは言えない。

塚本くんは店をもの珍しそうに見渡した。

「ちっせえ店だけだよっばこんだけ本あるといいな。好きな本読み放題じゃん」

「商品を読むわけにはいかないよ。あとうちは立ち読み禁止」

「なんだよつまんねえ」

開きかけていた本をつまらなさそうに棚に戻した塚本くんは再びこちらに戻ってきた。

「で、俺は本にハタキでもかけてりゃいいわけ？」

レジの脇に置いてあった羽でできているハタキを手にとって適当なところを叩く。

「誰かお客さんが来た時でいいよ。長い時間滞在してたりひたすら同じ棚見てたりしたらちょっと見に行くとか」

「なんだよそれ。基本暇ってことじゃねえかよ」

お父さん達はお客さんの居ない内に伝票整理や入荷商品を決めたりするけど、中学生に

そんなことができるわけもない。だから今までは店番をしつつ本を読めたりしていた。

「ここまで来てもらって申し訳ないけど、社会勉強にはならないかも……」

「まあいいよ。元々の目的は万引き犯半殺しだしな」

とんでもなく物騒な言葉が飛び出してきた。冗談だと信じたい。

「目星の奴っていつも何時ごろ来るの？」

「夕方ごろが多いみたい。たまにお昼過ぎにも来るみたいだけど」

ふと入口の方を見ると、何度か見たことのあるお客さんが四、五人立っていた。けど入っては来ない。視線は塚本くんの方を向いている。

塚本くんも彼らに気付き、怪訝そうな顔を向ける。彼らは塚本くと目が合うとそそくさと店から離れていった。

「なんだあ？」

「塚本くん、彼らだからいいけどお客さん睨まないと助かる」

「なんであいつらはいいんだよ」

もう姿は見えないのに入口を見つめ続けた。目をつむっても顔は思い出せる。

「目星を付けてる人、あの人達だから」

なるべく冷静に言おうと、塚本くんは突然店の外に出て行った。彼らの姿を見つけたのか追いかけてようとしたので慌てて止めに出る。

「だめだよ、今日は店にすら入ってないんだから」

「そうやって受身だからいつまでも被害こうむるんだろうが！ つ、くそ」

腕を思い切り掴んで走り出そうとする塚本くんを抑える。少しすると落ち着いてくれた

のか、私の手を払って店の中に戻った。中では騒ぎに気付いたお父さんが居住スペースから顔を出している。私もすぐに店の中に入った。

「ごめんね、うるさかった？ なんでもないから」

「俺、明日も来るんで。被害なくなるまで時間のある日は手伝わせてください」

私の声に塚本くんの表明が被った。元来あまり大きくない私の声など簡単にかき消されてしまう。

そしてその表明に、お父さんは再び豆鉄砲を食らった鳩のような顔をした。

「や、これはうちの問題だし、今日だけで十分ありがたかったですから。これ以上は塚本くんに迷惑が」

子ども相手に敬語のお父さん。私はお父さん似だったのか。

「全然迷惑じゃないので。このままじゃ気分もさっぱりしないですし。さっきも言いましたけど、俺のことは塚本の人間なんて思わないでください。ただ千伽の家を心配している千伽の友人だと思っただけじゃ」

塚本くんは今まで見せたことのない満面の笑みをお父さんにぶつけ、この場を支配してしまっただ。こう言われてしまったてはお父さんも私もなにも言えない。

そうこうしている間に閉店の時間になり、塚本くんは後片付けまで手伝ってくれた。

お父さんはすまなそうにしているし、お母さんはなにをどうしたらいいのか分からないという顔をするし、おばあちゃんに至っては店に顔を出そうともしない。

わずか二時間ちよつとのできごと。

塚本くんは嵐みたいだった。

「親父まで敬語だから思わず笑っちゃまいそうになったよ。お前んちカカア天下か？」

片づけを手伝って貰ったので、塚本くんが店を出たのは辺りがすっかり暗くなった八時前になった。電灯の下に立っただけでも相手の顔がかるうじて見える程度。この辺りは家も少ないから夜になると本当に暗い。

塚本くんはiPhoneで車を呼び店の外で待っていたので私も付き合うことにした。

うちはカカア天下なのだろうか……確かにお父さんは基本お母さんに頭が上がらない。

「そうだ、お前携帯持ってねえんだよな。パソコンは？」

カカア天下だと思ふ、と答える前に全然違う話題が昇ってきた。

「あるけど、私はほとんど触らない」

「触れ。YahooでもHotmailでもGmailでもなんでもいいからフリーアドレス取れ。で、そのアドレス俺に教えろ」

Yahooはかろうじて聞いたことがあったけど、「ほつとめーる」だの「じーめーる」だの聞きなれない言葉を連発されてなにがなんだか分からない。パソコンは店の売り上げ管理に使うのが主で、私はなにかあったらネットで調べものにするくらいだ。

「……今言ったこと分かってねえだろ」

断言されて目が泳いでしまった。言われた通り全然分かっていない。

「ったく」

塚本くんiPhoneをいじりだした。横からではなにをしているかさっぱり分からないけど、覗き見る勇氣もない。

「これ今すぐメモしろ」

気になっていた携帯画面を塚本くんから見せてくれた。メールアドレスとパスワードと書かれた欄の横に英数字が並んでいる。メモと言ってもなにも持っていない。すると塚本くんが学校の鞆からメモ帳とシャーペンを貸してくれた。急いでメモする。

「ネットでGmailって検索してログイン画面でそれ打ち込め。そしたら受信ボックスに入るから。後で適当にメール送っておくからそのアドレス登録しておけ。メールは一日一回見る。あ、ログオフ忘れんなよ。親に見られるからな」

ログオフの意味もよく分からなかったけど聞いたら怒られそうだったのでなにも言わなかった。調べればなんとかなると思う。

メモした単語でもないんでもない英数字の羅列をじつと見る。けれどなんでいきなり私はメールアドレスを取得することになったのだろうか。

「塚本くん、これはなんで？」

「平日は学校があるからともかく、土日は連絡取れねえだろうが。家に電話して「千伽いますか？」とか中学にもなってやりたくねえよ」

携帯を持っているめぐみも同じようなことを言っていた。家に電話をかけてくる度に携帯を持ってと言われる。

「え、えと、ありがとう」

なにをそんなに連絡してくることがあるんだろうと若干疑問に思ったりもしたけど、手間をかけてくれたことは事実なのでお礼を言う。塚本くんは「別に」とつれない返事をするだけだった。

「お迎えこないね。また来るなら今度は自転車で来たら？　自転車だったらここから塚本くんの家までそう時間もかからないし」

なにか自分からも話題提供を、と思い適当に思いついたことを喋る。するととんでもない答えが返ってきた。

「自転車持つてねえ」

「え？」

「だから、持つてねえんだって」

まさかこんなところで地主の力を見せ付けられるとは思わなかった。塚本くんの家から学校までは徒歩圏内だし、なにかあればこうやって車で迎えに来るなら確かに自転車なんて要らないだろう。

「そ、そっか」

「なんだよ、持つてねえのがそんなにおかしいってか？」

「そんなことないよ」

声のトーンが少し低くなったので手を振って否定する。怒らせちゃっただろうか。

「でも確かに不便だな。こうやって待つのだいいし」

「買ってくれないかお願いしたら？　車より経済的な気もするし」

「あいつらとは話したくねえ」

更にトーンが低くなった。両親と仲が悪いのだろうか。確かに私達の年齢って思春期真っ盛りな時期だったりするけど。

この時間になると人通りがほとんどなくなる道だけど、向こうから小さな電灯がこちら

に向かってきた。自転車だ。だんだん近付いてきて、自転車の輪郭が見えるくらいまでに近くなると乗っている人物が誰だか分かった。

「千伽？」

よく見る背格好の人だと思ったら、孝士だった。確かに孝士は学校と家の往復でこの道を通る。今日はいつもより遅い。部活が長引いたのだろうか。

孝士は私に気付くとブレーキを押して自転車を止め、そして私の横に居る塚本くんにも気付いた。

「なんでお前が千伽と居るんだよ」

すぐさま臨戦態勢に入ってしまう。一方の塚本くんは心底面倒そうな顔をしている。

「お前こそ人を親の仇を見るような目で見るの止めるよ。俺、お前になにかしたか？」

「俺にしないで千伽にしてるじゃねえか」

孝士は自転車から降りてスタンドを立て、塚本くんにも掴みかかりそうな勢いで詰め寄った。面倒そうな表情は変わらない塚本くんは溜息を吐いてiPhoneを制服のポケットに仕舞う。

「佐々口だったな、千伽が俺になにかされてるとかお前に言ったことあんの？　今まではうっとおしいから適当にあしらったけど、いい加減しつこくてうぜえんだよ」

孝士の方が塚本くんより身長が高い。自然と塚本くんは孝士を見上げる。

「お前が千伽に必要以上近付かなきゃなにも言わねえよ。千伽を勝手に図書委員に決めた時から腹立ってんだよ俺は。お前何様なんだってな」

「何様って、千伽のダチだけど？　ダチとしてこいつん家の万引き撲滅に協力してんの」

「はあ？」

塚本くんを睨んでいた孝士がいきなりこちらに顔を寄越した。

「どういうことだよ、千伽」

「え、えと」

急に聞かれてもきちんと説明ができない。

「簡単な話だよ。店番を二人体制にしたら万引き防止になるっていうから頭数になるだけ。んで万引きを撲滅させるまで続けると」

孝士が目で「ほんとか？」と聞いている。私としては頷くしかない。孝士は急激に顔色を変えた。

「待って。お前ん家、高速道路の賛成派だろ？ 千伽ん家はもちろん、この辺の人達がこぞって反対してるのは分かってるよなあ？」

「それと万引き撲滅とは関係ねえだろ？ お前まで頭の堅いおっさんおばさんと同じこと言うのかよ」

「違うかもしれねえけど、賛成派の人間が反対派の家に出入りしてるってだけで大問題なんだよ。千伽の家に迷惑だし、お前がこの辺りをうろついていると目障りだつての！」

「それが本音なんじゃねえか。道路問題とか正論振りかざして正義ぶってんじゃねえよ」
互いに手が出そうな空気にまで発展してしまった。

やだ、止めなきや。喧嘩なんか見たくない。

「二人ともやめ」

「じゃあうげえからうろちよろすんって言ったらすんなり大人しくしてくれんのかよ」

「するわけねえだろ。お前に指図される謂れはねえよ」

二人とも私の声なんて全然聞こえていない。涙が目元に滲む。

その時後ろから強烈な光が私達を照らした。驚いて後ろを向くと車が減速してこちらに近付いている。ライト部分しか見えないから色はきつと暗い色。

先月うちまで送ってくれた塚本くんの家の車を思い出す。私達の前で止まった車は思った通り塚本くんの家のものだった。運転席から、会うのは二度目になる運転手さんが出て来る。

「遅くなりましたして申し訳ございません」

「やっと来たか」

塚本くんは孝士の存在などなかったことのように横をすり抜け、車の後部座席の方へ寄って行く。

「じゃあな千伽。パソコンちゃんに見ろよ」

塚本くんは運転手さんがドアを開けてくれるのを待っていたが、運転手さんは運転席から降りたきりその場から動かない。なぜか私を見ていた。

目が数秒合うと運転手さんはおもむろに塚本くんの方を向く。

「楓さま」

「あ？」

「こんな往来で女性を泣かせるものではありませんよ。……その貴方も」

淡々とした口調に三人とも黙ってしまった。私は急に恥ずかしくなって顔を隠したくなる。両手で頬を押さえた。

塚本くんは運転手さんをじつと見た後、私を一瞥したかと思えば舌打ちをし、自分で車のドアを開けて車内へ。それを確認した運転手さんは私と孝士に深々とお辞儀をして運転席に戻った。私もつられて頭を下げる。

ほどなく車は発進していった。その場には私と孝士と孝士の自転車が残される。

「悪い。泣かすとか最低だな」

孝士は髪をぐしゃぐしゃに掻き回した。その手のせいでよく表情が見えない。

「孝士」

「もう家ん中入れ。俺も帰るから。また明日な」

一度も目が合うことなく、孝士は自転車に乗って行ってしまった。今度こそ残ったのは私だけ。

目尻をこすると指が少しだけ湿った。

言われた通りネットを開き、メモしたメールのサイトにログインした。

二通メールが入っていて、一通は登録したら自動で送られるメール、もう一通は「登録しとけ」と一言書かれているだけ。名前はなかったけど塚本くんからだと分かった。

アドレス登録のリンクを見つけて登録をする。一応「登録しました」とだけ書いた返信メールを送っておいた。一通り作業を終えると大きな溜息が出てしまう。

塚本くんはどんな気持ちでこのメールを送ったんだろう。私は塚本くんのアドレスが腫

れ物のように見えてしまった。

どうしてあそこで泣いてしまったのか。我慢したらあんなことにはならなかったのに。さつきから明日のことばかり考えている。どんな顔をして二人に顔を合わせればいいのか。

明日、会うのが怖い。

怖い、なんていう私の心配や腰の引けは翌日さっぱりと払拭されてしまった。

「国語の教科書忘れたから見せろ」

朝、登校すると早々に命令が下った。

昨日のことなどまるでなかったことのような態度。

始業のチャイムが鳴り、孝士が息を荒げながら駆け込んで来た。一瞬だけ目があったけどお互いにすぐ逸らしてしまった。

いつもは少し離れている机をぴったりとくっつけ、真ん中に国語の教科書を置く。すぐ隣に塚本くんが居る。いつものように授業に集中できない。

不意に塚本くんが教科書になにか書き込み始めた。先生からそんな指示があっただろうか。黒板の方を見るけどそんな気配はない。教科書に目を移すと、授業とは全く関係ないことが書かれていた。

“今日も行くからな”

走り書きなのに整った字。横を向くと塚本くんもこちらを見ており、「見てんじゃねーよ」

口パクで怒られた。そしてすぐ顔を正面に戻す。

塚本くんも少し後ろめたい部分があったのか。運転手さんになにか言われたのかも知れない。どちらにしても、わだかまりみたいなのは消えた。

私も授業とは関係ないことを教科書に書き込んだ。

“よろしくお願いします”と。

「暇」

塚本くんはハタキを持ってあましながらレジの椅子に座り込んだ。

「全然客こねえじゃねえかよ。三日も居るのに」

「この時間はこれが普通だよ。学校帰りの小中学生が来てるじゃない」

正直な話、塚本くんが居るからお客さんはもっと減るかと思った。お父さん達も私が盗み聞きをしているのに気付かず、どうしたものかと頭を抱えていたし。

けれど実際にはお客さんは殆ど減ることなかった。小学生は塚本くんが地主の子だと知らないから見知らぬ人が居ると不思議そうな目で見るだけ（一回レジをお願いしたら怖がられたのでそれつきりにした。塚本くんは不服そうにしたけど客商売なのでそこはシビアにしないといけない）。中学生は同じ学校に通っているし、私立に行っている人でも顔は

知っていたみたいだけど、買うものは買っていてくれた。この辺りはここしか本が買える場所がないから。

塚本くんには言えないけど、吠えられたらすごく怖い番犬みたいなことになっている。

「もともとたくさんの方が来るような立地じゃないからね」

「じゃあどうやって生計立ててんだよ」

「昔からの常連さんとか。雑誌を年間購読してくれる人がそこそこ居るから。あとお父さんがパソコンでなにかやってるみたい」

お父さんがパソコンでなにをやっているのかはよく知らない。お母さんもおばあちゃんもなにも言わないから怪しい仕事ではないと思うんだけど。

「これ本でも読んでなきややってらんねえよ」

「万引きが酷くなるまでは私もそうしてたよ……。今日は家族全員居るし、塚本くん帰っても大丈夫だよ？」

「言いだしつぺが帰るわけにはいかねえだろうが。それにここで帰ったらあいつの高笑いが聞こえそうで腹立つ」

あいつとは多分孝士のことだろう。この間までは面倒そうに対応していたのに。

「今日この後孝士来るよ。取り置きしてる本あるから」

「げ」

昨日の休み時間に頼まれていた。今月出た文庫本で、普段なら買わないジャンルのもの。親に頼まれたと言っていたけどそれだったらおばさん達が買いにくるはずだから多分嘘。孝士なりのきっかけ作りだったのかもしれない。

「うぜえなあ」

「だったら帰る？」

喧嘩するんだったら正直会ってほしくないのが本音。和解するのが一番だけれど。

「帰んねえよ。なんで俺があいつに遠慮しなくちゃいけないんだ」

予想していた答えだったので驚きも落胆もしない。今度なにかあったら泣いてばかりじゃなくて、それこそ一喝する気持ちで止めないと。

心の中で拳を握っていると店に誰か入ってきた。塚本くんがあからさまに嫌な顔をす
る。

「孝士。部活お疲れさま」

「おう」

孝士は真つすぐレジに向かい私の前に立った。隣に居る塚本くんには目もくれない。

「頼んでた本取りにきた」

「うん、ちよっと待ってね」

本は取り置き棚の一番上に置いていたのですぐに分かった。取って伝票を抜く。

レジをしている最中、塚本くんはひたすら孝士を睨みつけていた。孝士はそれを軽やかに無視。なんだろうこれ、冷戦っていうやつかな……。

「カバーつける？」

「つけて」

「今日は随分大人しいな。この間はキャンキャン吠えてたくせに」

痺れを切らした塚本くんは挑発ととれる言葉をぶつけた。この間と逆。

カバーを付ける手が止まってしまった。窺うように孝士の顔を見上げると、「どうした？」と言っているような微笑を浮かべている。

とにかくこの状態はよくないと思い、カバーを急いでつけた。袋に入れて孝士に渡す。

「サンキュ」

孝士は受け取った本を鞆に入れると、今まで一度も見なかつた塚本くんを目線を向けた。

二人の目が合う。その間の空気が刺すように痛い。

「お前、千伽の友達なんだろう？ だつたら千伽の迷惑になるようなことだけはすんな。お前がどう思ってるかは知らねえけど、『塚本家』は俺らにとって大きな存在なんだよ。ましてや今は高速道路で揺れてるし」

塚本くんはしばらく黙っていたけど、顔を逸らして「んなこと分かってるっての」と小さく呟いた。

それを聞いた孝士は「じゃあな」と言つて店を出ていく。

今のは和解なのか、ただ喧嘩にならなかつただけなのか。

男の子って分からない。

学校が休みの土曜日。今日は朝から道路反対派の集会があつた。家は私一人になる。お父さんとお母さんから何度も何度も注意するようにと言われた。

さすがに土曜日まで塚本くん到店番をお願いするわけにもいかない。それに、塚本くんが来るようになってから目星をつけてる人が来なくなってる。塚本くんの顔を知っていて警戒したんだろう。

そういえば昨日は塚本くんからメールが来なかった。毎日なにかしら来ていたのに。どうしたんだろう。土日に連絡が取れるようにするためのツールなはずなのに。

お父さん達を見送り、意を決するように店を開けた。いい天気なのに気分は曇っている。レジの椅子に腰かけ、店の入り口を凝視してしまふ。

朝はおばあちゃんが若いころから付き合ひのあるお客さんやお母さん世代の人が何人かきた。特にこれといった問題もなく時間が過ぎていく。

お昼休みを挟んだ二時過ぎ、うちにとっては団体客といえる人数のお客さんが入ってきた。「いらつしやいませ」と言いかけた瞬間、血の気が失せたような感覚に陥る。

目星の人達。

入って来た彼らはバラバラの場所へ。内一人がこちらに寄ってきた。

「すみません、本の予約ってできますか？」

「え、ええと、なんの本ですか？」

口がうまく回らない。

「来月に出る予定の……あれ、タイトルなんだったけな」

どうしよう、この人の応対をしていたら他の人達がなにをしているのか全然分からない。

目の前の人はやたらと笑っているし、絶対確信犯だ。

「タイトルが分からないと検索できないので、また来ていただけますか？ それか電話でも承っていますので」

「いや、ちょっと待って。もう少しで思い出せそう」

「それでも動かない気らしい。彼の脇から店の様子を窺おうとしたけど、皆ここから見えない棚に居るようで誰がどこにいるかも分からない。」

「文庫ですか？ それとも漫画？」

「漫画なんだけど……」

「出版社とか分かりますか？ 作者名でも」

「ちょっと黙ってもらっていいですか？ もう少しで思い出せそうなんで」

「なにも言えなくなってしまう。早く、早く。」

「見えなかったはずのほかの人達が視界に入ってきた。レジに向かうことなく店から出ようとする。みんな大きなトートバッグを持っていた。中にたくさん物が入っているようにも、見える。」

「レジの前の彼は店から出ようとする彼らを脇目で確認すると、わざらしく手を頭に当て、

「あーやっぱ思い出せないや。一回出直します。思い出したら電話するんで」

先に店から出ようとしてた彼らに続いて行ってしまおう。思わず立ち上がってしまったけど、なににも言えない。彼らが出て行った瞬間店の在庫をチェックしないといけないけど、それをする勇氣も湧かない。

お父さん達になんと言えいいのか。拳を強く握ったところでなんにもならない。

笑いながら話す彼らが店を出る。そのまま右か左に消えて行くかと思っただけ、彼らはその場で立ち止まっていた。

「はい、アウトー」

外から二重の声が聞こえる。

「店から出たな。ちよっと鞆の中見せてもらっていい？」

「なんもなかったら俺が土下座してやるよ。お前ら俺の顔知ってんだろ？ 写メでも撮ってバラ撒け」

店から出た彼らのせいで二人の姿が見えない。でも、声で誰かすぐ分かった。レジから出て店の入口へ駆ける。

「お前ら加減つてのを知らねえのかよ。漫画に小説、囲碁の解説書？ 節操ねえなあ。あ、新刊か。古本屋で高く売れるもんな」

「千伽、この本の在庫が合ってるか確認して」

彼らの鞆から本がどさどさと出てくる。驚いているのはそこじゃない。

考えられない組み合わせ。

「孝士、塚本くん、なんで」

「説明は後。まずはこいつらを半殺しの刑にしてからな」

塚本くんは彼らの中の一人の首に腕を回し、ヒールみたいな悪い笑みを浮かべた。

「昇星の二年かよ。俺らとそう代わりない歳なのにどうりで見覚えはないと思った」

塚本くんは彼らから没収した生徒手帳をそこらに投げ捨てた。休日にまで生徒手帳を持

ち歩くあたり、真面目かと思えるのにこんなことをするなんて。

「千伽、こいつらどうする？」

脱力するように座りこんでいる私に、孝士は目線の高さを合わせて聞いてきた。

「聞くまでもなく半殺しだったの」

「お前に聞いているんじゃないって。それに考えてみる、こんな奴らのために傷害罪で摘発されたくねえだろ」

「あ。それもそうだな」

状況が未だによく分かっていなかった。なんで二人は彼らが万引きしたと確信したのか。そもそも一緒に居て普通に会話しているのか。

「とりあえず警察に電話すつか。どうみても常習犯だし」

「それは、それは勘弁してください！ 今まで盗ったやつは全部返しますから！」

漫画の予約を装った彼が悲痛な声を上げた。名門校の生徒だ、警察沙汰になったら退学は確実だろう。

「うわー、こいつ殴りてえ。やっぱ半殺しにすつか」

彼の首根っこを掴んで拳を振り上げた。それを見て反射で立ち上がる。

殴ろうとする塚本くんの腕を掴んだ

「殴るのはだめ！ 絶対だめ！」

塚本くんが警察のお世話になるのは絶対にいけない。

両腕で抱きつくように腕を押さえた。

「はいはいはい。千伽離して大丈夫だから。塚本は殴るなって」

マジックテープを剥がすかのごとく、孝士は私と塚本くんを引き離した。

「冷静に考えてさ、警察はなしにしても親は呼ばねえと。返せばいいってもんじゃねえつて。弁償だ弁償。で、中坊にそんな金があるわけないから親呼び出し。千伽、おじさんでもおばさんでもどっちでもいいから呼び戻しな。万引き犯捕まったって言ったら流石に戻ってくるだろ」

孝士がその場をとりまどめてしまう。塚本くんは舌打ちをしたけど大人しくなった。

その後、言われた通りお父さんに電話をして戻ってきてもらった。ここからは大人の領域。私は解放され、孝士達と外に出ることにした。

「次やったら家族揃って街中歩けないと思えよ。塚本家なめんな」

塚本くんの本気で危ない脅しを置き土産にして。

「お邪魔してすみませんでした」

孝士はなぜか道を挟んでお向かいの家に挨拶へ出向いた。

全く事情を飲み込めていない私に、塚本くんは鞆から望遠鏡を出して見せる。

「単純な話、その家の二階から見張ってたんだよ。俺が居ない日を狙ってくるだろうなって踏んで。したら案の定店に入る前に一人が偵察に来てぞろぞろお仲間連れてきやがった。で、これで店の中を監視して本を鞆に入れたの確認したらゴー」

それは犯罪まがいではないのか……結果的に解決したからいいけれど。

「メールで教えてくれたらよかったのに」

「敵をあざむくにはまず味方からって言うだろうが」

なんかちよつと違うような気がしないでもない。
けどそれよりも。

「塚本くん、なんで孝士と。それに孝士は部活もあるはずなのに」

挨拶を終えた孝士がこちらに戻って来た。塚本くんと顔を合わせるなり、少し気まずそうな顔をする。

「お互い言い過ぎた感があったからな。それに、万引き犯をどうにかしたいってのは共通していたし。部活は今日休み」

「こいつが電話で謝ってきたから寛大な俺は許してやったってわけ」

次の瞬間、孝士の手が塚本くんの頭をぎりぎりとは掴んでいた。

「離せ馬鹿力！」

「なにが寛大だ、電話でどんだけやり合ったと思ってるんだよ」

仲が良さそうには見えないけど、険悪そうでもない。

「お前が一方的に言ってきたからだろうが」

「当たり前だ。あれでも抑えたほうだっての」

お互い今まであった「こいつ嫌い」っていうオーラが消えていた。

やっぱり、仲、いい？

「俺にここまで言ってくる奴は初めてだったからな。面白いし気に入ったからダチになってやることにしたんだよ」

「こいつを止められそうなのは俺くらいだろうから、なってやることにしただけだ」

お互いの胸倉を掴んでにらみ合う。この間だったらすぐにでも止めなきゃと思っただけ

ど、今はそんな気にならなかつた。

きっと二人は気が合う。

今日の青空みたいに清々しい気持ちになつた。

NONSTOP



Dear My Life

Illustration: ヒトエ

貴水玲

あらすじ

母の勧めでN市の優華女学院高等部に入学した花。内気な自分を変えようと思った矢先、自分とそっくりな顔をした旧家の娘・ありさと出会い、実は亡くなった父がその旧家の跡取りだったと知る。母に真意を聞けぬまま学校生活が始まるが、「隠し子」の噂で花は孤立。ありさからも嫌がらせを受けるが、そんな花にある男の子が手を差し伸べてくれて……。



十河 星流
(そごう すばる)

高二。政治家一族の息子で女子に人気が高い。



西野 花
(にしのはな)

高一。何事にも一生懸命な、素直で心優しい少女。



塚本 ありさ
(つかもと ありさ)

高一。プライドが高く利己的な旧家の娘。

第二話 すこしの勇氣

『……負けちゃだめだよ』

彼の声が、引き上げてくれた手の温かさが、胸にずっと残ってる。たったそれだけの言葉が、目に映る景色を一瞬で全部変えた。

「あつっ！！」

フライパンの上で飛び跳ねた油が手の甲をかすめて、花は思わず耳に当てていた携帯電話を取り落としそうになった。

『なに！？ 大丈夫、花？』

電話口から聞こえる咲の声に「だ、大丈夫」と返事をして、花はコンロの火を止めた。『どうしたの、平気？ ていうか、何やってるの？』

「う、うん、平気。ちよつとお弁当用のソーセージがはねただけだから」

フライパンに転がる焦げたソーセージから、白い煙が立ち昇っている。携帯を肩で挟むと、花は顔をしかめながら両手で必死に煙を払った。

『わざわざお弁当作ってるの？ 学校に食堂あるでしょ？ 仕送り足りない？』

「ううん、そうじゃなくて……」

怪訝そうな咲の声に口ごもりながら、花は煙から逃れるために部屋の方へ移動した。

—— 学食に行くのが怖いなんて……言えない。

“隠し子”の噂のせいで、入学から一ヶ月たった今でも花はクラスで孤立している。校内のどこにいても誰かの視線を感じ、ヒソヒソと悪口を囁かれる。全校生徒が集まる食堂なんてとても行けない。軽蔑と嘲笑の中で一人でごはんを食べるなんて……耐えられない。だから花はお昼になると人気がない裏庭へ行って一人で食べている。

「い、一緒に食べてる子がお弁当なの。だから私もそうしようと思つて。ほらお料理は家でやってたから別に大丈夫だし、安上がりだし」

『そうなの。相変わらず堅実ねえ、花は。お金のことなら気にしなくていいのに。せっかく一人暮らしなんだし好き勝手にやってもいいのよ？』

「う、うん……でもいいの」

『ふーん、食堂に付き合ってもらえばいいのに……。でもまあ、いいか。皆とうまくやってるのね。よかった。花ったら全然 学校のこと話さないからちよつと心配してたのよね』その言葉にどきりとして、花は思わず唾を飲み込んだ。

咲は毎日夕方出勤前に電話をかけてきて、その日あったことや学校のことを聞きたがる。ありさや父親のことについて、花はまだ咲に切り出すことができていない。もちろん友達どころかみんなに避けられているという事実も。心配はかけたくない——だから花は頭をフル回転させ、苦手な嘘をつき続けている。

『あたしは花の母親だけど、友達のもりでもいるの。だから文句でも愚痴でもわがままでも何でも聞いてあげたい。ちよつとくらい秘密があったつていいのよ。でもたつた二人の家族だから……いろいろ分けあつていきたいんだ。だから遠慮しなくたつていいんだからね！ ……あつ、そうだ！ そういえば昇星学院との合同歓迎会はどうだったの？ 入学式の頃にあつたでしょ？ すつかり聞くの忘れてたわ』

「えっ」

その問いかけに花の鼓動が跳ねた。

『どうだった？ 誰かと話した？ カッコイイ子いた？』

「あ……うん、えつと」

ぱつと浮かんだのは星流の顔だった。優しい笑顔、穏やかな声。あの時のことが花の脳裏に甦り、胸がどきどきし始める。

ジュースまみれになつて床に座りこんでいた花に、十河星流はためらいもなくすつと手を差し伸べてくれた。そして立ち上がらせてくれた後、お手洗いに案内してくれ、タオルも持つてきてくれた。彼のおかげで、花はみじめな状況から救われたのだ。

——あの後ちゃんとお礼も言えないまま、呼ばれて行つちやつたんだよね……。

花がトイレから出てくるまで、星流は廊下で待つていてくれた。でもその後生徒会の関係者に呼ばれて講堂に戻つてしまい、結局それきり。歓迎会の時以来昇星学院の生徒と接する機会はないから、あの時以来星流とは会つていない。

『なに、なに？ いたの、気になる子！』

咲のテンションが一気に上がった。今日は休みで一日中寝ていたと言つていたから元気

があり余っているのだろう。花は「うーん……」と小さく唸った。

気になる、と言われれば……確かにそう。ここへ来て初めての週末は星流のことばかり考えていた。大半はアパートの整理や授業の予習をして過ごしていたけれど、頭から離れなかった。

今でも授業中やふとした時に思い出す。ついさつきソーセージを焦がした時だ。

一ヶ月も前のことなのに、まるで昨日のことにように記憶は鮮明だ。星流のことが頭に浮かぶと、他のことは全部どこかに飛んでいってしまつて、その瞬間だけ記憶喪失みたいになる。そわそわして落ち着かない感じになる。どうしてだかわからないけれど。

「……気になるっていうか、親切にしてくれた男の子なら一人いたよ」

『えっ！ マジ？ ほんと？ その子かっこいい？ 親切って何があつたの！？』

「え、えーと……こ、転んだところを助けてもらっただけ。話とかは全然してないんだけど……うん、かっこいい人だったよ」

『きゃーっ、キタ？ 王子様、来た！？ 花に恋の予感が……！ やるじゃない、花！』

「だからね、ママ。別にそういうんじゃないよ……」

お祝い、赤飯、と咲が電話の向こうではしゃいでいる。全然聞いていない。ため息をついて、花はロフトに昇るための階段に座った。

『いいのよ。始まりの時はよくわからなくても、出会いってというのは必ず意味があるんだから。あー楽しみね、また会えるのが。そうしたら報告しなさいよ！ あー、きつとお父さんも生きてたら喜んだわよ。ん、違うかな。娘をとられるって怒るかも？』

楽しそうな咲の笑い声を聞きながら、花の表情はじよじよに暗くなった。

ありさや自分の祖母だという塚本家の老婦人の顔が、言葉が、次々と頭の中を過った。なんとか堪えていた不安がどつと押し寄せてくる。

「ねえ、ママ。あのさ……お父さんて……」

『え？ なーに？』

「……ううん、なんでもない」

出かけた言葉を花は飲み込んだ。

やっぱりダメだ、勇気が出ない——。臆病な自分に花はそつとため息をついた。

携帯電話の目覚ましの音で花は目を覚ました。

閉めたカーテンの隙間から、朝日がもれている。唯一何も考えず安らげる眠りの時間が終わってしまったことに、布団の中で花は心底がっかりした。

——学校……行きたくないな。

また今日も憂鬱な一日が始まる。そう思うとどんどん気分が沈んでくる。

でも頑張らなきゃ。なんとか耐えなきゃ——そんな心の葛藤を花は毎朝目を覚ますたびに繰り返していた。

——早く今日が終わればいいのに。

ずっとここにいたい。永遠に眠りについてすべてから逃げてしまいたい。

でもそんなことは不可能だとわかっているから、花はのろのろと布団から起き上がった。

水で顔を洗って歯を磨き、学校指定の白いブラウスと青いスカートを身につける。身支度が終わるとドライヤーを手に洗面台に戻り、ぼさぼさになった天然パーマの髪と格闘しなんとかセツトする。それが終わるとブレザーを着てカバンを持ち、花は部屋を出てアパートの隣の敷地にある大家さんの家へ向かった。

有川家で朝食をとって学校へ行くのが花の日課だ。大家である百合子が一人暮らしの花を心配して、食事の世話を買って出してくれたのだ。だから毎日朝と夜、花は有川家へ行って食事をいただくことになっている。

いつものように玄関先にいるマメ柴のロクに挨拶して、花は有川家のドアを開けた。「お邪魔します」と小さく言ってお上がった時、廊下の奥から百合子の声が聞こえてきた。

「ちよつと、十夢！ ちゃんと食べてから行きなさいっ」

その声から逃げるようにキツチンから百合子の息子・十夢が出てきた。

ちよつと鉢合わせした花に、十夢は「……おう」とぶつきらぼうな挨拶をよこした。百八十を超える長身に見下ろされて花は委縮する。だらしなくネクタイを締めた制服姿もなんだか怖くて「お、お」とどもっている百合子が追いかけてきた。

「こらっ、朝ごはん食べてから行きなさいって言うてるでしょ！」

「いてっ！ 叩くなよ。いらねーよ、急いでんだよ。バスケ部の朝練に遅れる！」

「だったら余計食べなさい。力でないわよ。それに朝ごはん抜くと早死にするって看護師の友達も言ってたわ。さっと済ませればいいでしょ。ほら戻る！ あ、花ちゃんおはよう」
強引に十夢が百合子にキツチンに押し戻されていく。「お、おはようございます」と小さく言って花もその後続いた。

「ごめんね朝から騒がしくて。用意してあるから食べて。急いでるんで簡単なんだけど」

自分用の席になったダイニングテーブルの一角に花は座った。目玉焼きののったトーストが一枚皿に置かれている。いただきます、と手を合わせて花はパンに手を伸ばした。

「今日は公民館で集まりがあるの。新しい高速道路建設のことで。つくるのつくらないのつて地主さん一族が揉めててね。推進委員会の役員が話をしに来るんですつて」

もう面倒くさいつたら、と百合子がため息を吐く。

「高速つて海の方にできるつてやつ？ 別に作ればいいじゃん。便利になるし。なんで反対してんの？」

「公害とか騒音とか、土地の問題とか……色々あるのよ。はい牛乳、自分で注いで。洗濯物干してくるから。花ちゃん、気をつけて行ってね」

バタバタと百合子は浴室の方へ向かった。仏頂面で十夢は花の向かいの席に座り、コップになみなみと牛乳を注いだ。

「……飲むか？」

牛乳パックの口が差し出される。

「あ、ううん。大丈夫……です」

そう断つて、花は俯いてパンをかじった。「そ」と呟いて十夢も食事を始める。

キッチンに沈黙が流れた。だがしばらくした後、十夢がぽつりと言った。

「……なんか、暗くねえ？」

「……え？」

「あんだ。日に日に元気がなくなってる気がすんだけど、なんで？」

「え……そ、そんなことないです」

戸惑いながらも花は即座に否定した。ふーんと十夢がかすかに眉根を寄せる。

「なら別にいいけど。なんかいじめられてんのかと思った」

その鋭さに、どきりとして花は息をのんだ。何か言わなくてはと慌てて言葉を見つける。

「違います。その……まだ色々と不安なことが多くて。まだ……友達もいない、し……」

「はあ？ まだ出来ねえの？ まあ、あんたトロそうだもんな。なんかいつも下向いても

ごもごしてるし、声も小さいし、背もちっちゃいし」

「う」

最後のは関係ない気がする。ぐさつと突き刺さる言い方に花はシヨックを受けたが、なんとかこらえて目玉焼きパンをネズミのように小さくかじり続けた。

——十夢は苦手だ。別にいじめているつもりではないのだろうけれど、彼の一言一言は率直すぎてへこまされる。しかも心身ともに弱っている状態だと……余計にこたえる。

「ていうか、そんなに委縮してないでもう少し顔上げたら？」

二杯めの牛乳を飲みほして十夢は一枚目のトーストをたいらげた。

「下向いて考えてたって友達はできねーぞ。——ごちそうさん」

二枚目のパンを口に押し込むと、十夢は席を立った。スポーツバッグを肩に担いで「いつきます」と颯爽と出ていく。

——わかってるもん……そんなの。

取り残された食卓で、いっこうに減らないトーストを花はまたちいさくかじった。そして噛んでも噛んでも減らないぱさついた感触を、無理やり飲み込んだ。

「……おはよう」

教室の扉を開けて、花は一人言ほどのボリュームで言った。

返事はない。口にした小さな勇氣は、たちまち教室のざわめきに飲み込まれて消えた。

——やっぱり、だめか。

いい加減あきらめた方がいいのかもしれないけれど。花は毎朝一縷の望みを掛けてクラスメイトたち呼びかける。……一度も挨拶が返ってきたためしはないけれど。

初めの頃は、花が教室に入ると一瞬おしゃべりが止むなど冷たいながらも反応があったのだが、今ではそれすらない。

まるで透明人間になったみたいだ。ちゃんといえるのに誰にも見えていない。

こんな状態になったのは、“隠し子”のことだけが原因ではない。詳しいことはわからないが、どうやら他にも根も葉もない噂がそれに付いて回っているようなのだ。

もしかしたら今日は話してくれるかも——そんな期待はことごとく裏切られてきた。でも人間とは奇妙なもので、何度失敗してもまだ可能性を捨てきれない。いつになったら本当に絶望してなくなるのだろう——そう自問するけど……答えは見付からない。

しょんぼりと席へ向かいかけた時、窓際にいた二人の少女たちと目が合った。

——あ……。

入学式の日、話しかけてくれた子たち。確か吉田さんと紺野さんだ。でもそれは一瞬で、彼女たちはささっと窓辺を離れておしゃべりをしているグループの方へ行ってしまった。

しょんぼりと席につき、花はカバンを掛けて椅子に座った。チャイムがなるまで予習で

もしていようと机の引き出しを開ける。だが取り出そうとしたノートは破られてらくがきがされていた。

表紙に赤字で書かれた大きな『いなくなれ ばか』が血文字のように見えて、一瞬ぎくりとする。そのまま引きだしを閉めて、花は呼吸を落ち着かせた。

やったのは……たぶん、ありさだ。

こんな風に持ち物を壊されたり、捨てられたり、子供じみたらくがきされたりすることは頻繁にある。取り巻きたちに命じてやらせているのだ。顔を合わせればものすごい目つきで睨まれるし、すれ違いざまに暴言を吐かれたりもする。

父の母親、つまりありさと自分の祖母であるらしいあの老婦人はあれきり訪ねてこない。何か大きな問題が起きるのではと危惧していたが、今のところ塚本家が乗り込んでくることもない。

だがありさの嫌がらせは日に日にひどくなっている。きつと噂を流しているのも彼女なのだろう。花のことを好き勝手悪く言いふらしているに違いない。

でもどうしてここまで毛嫌いされるのか、花には少し疑問だった。

生まれる前にいなくなった伯父が、実は結婚して子供がいたことがそんなにショックだったのだろうか。冴えない花と自分が同じ顔をしているのが気に食わないから？ なんだかそれだけが理由じゃない気がする。合同歓迎会のあった次の週あたりから急激に加速したような気がするのだが……。

——またノートを買わなきゃ。

とりあえず持っている別のノートで代用しようと、花はカバンを開けた。

窓の外は眩しい五月の青空。その下で、花の憂鬱な一日がまた始まった。

今日の二限目は選択授業だった。

花嫁学校、と言われるだけあって優華は『女性らしさを身につける』ための授業が多く設けられている。裁縫や調理はもちろん、選択授業では、美術や音楽の他にお茶やお花、着付けなどバラエティ豊かだ。

花は無難に音楽を選択した。今日はモーツアルトの映画の鑑賞だった。授業が終わって教室に戻ると、何やら中央に生徒たちが集まりざわついているのが目に入った。

「やっぱりない！あたしの定期入れ」

その中心から、切羽詰まった声が上がった。

「なんで？朝見た時はあつたのに——絶対おかしいよ！」

机の上にカバンの中身をぶちまけ、少女がほら、と示す。周りにいる生徒たちは顔を見合せながら「ポケットじゃないの？」とか「机の中は？」と一緒に確認している。

どうやら定期券がなくなったらしい。だがカバンや机、ロッカーまでくまなく探しても見つからず少女は途方に暮れていた。

「どうしよう……親に怒られる。でも絶対にカバンに入れたの。教室移動する前に教科書を取り出した時にも見たもん。誰かが盗んだのかも——」

ざわめきが大きくなる。

——大変だな……大丈夫かな。

盗まれたなんて——。でも自分の置かれた立場では皆の会話に入ることには出来ず、花は

そのまま自分の席へ戻った。

だがその後一週間のうちに、似たような騒ぎがぼつぼつ起きた。

定期にペンケースにノート。立て続けに起きると教師たちもさすが問題にしないわけにもいかないと思つたらしく、帰りのホームルームでも取り上げられた。

「何かこの件について知っていることがある人がいたら、手を上げて下さい」

生徒たちが全員机に伏せた状態で教壇から担任の佐原美佐子が言った。「犯人は誰だ」と言うよりは名乗り出やすいと思つたのだろう。だが誰も手を上げることはなく、美佐子も「わかつた。私はみんなを信じるからね」と話はそこで終わりになった。

——本当に誰かが盗んだのかな……。

帰り支度をしながら花は考えた。

泥棒が生徒たちの中にいるなんて。でも何のために？

嫌な出来事だ。誰かを疑つたり誰かが疑われたり。でもこのまま続けば生徒たちの間でもいがみ合いが起きるだろう。

——早く解決するといいな……。

そして生徒の誰かではないといい。白い目で見られる辛さを花は知っている。たとえちよつとした出来心だつたとしても、周りの目は変わってしまう。

純粹に花はそう願つた。まさか事件が自分の身に降りかかってくるとは知らずに——。

翌日。お昼前から急に空は曇り始め、午後にはぼつぼつと雨が降りだした。

そのため五限目の体育は体育館でバレーボールになり、花は天気が乗り移つたかのよう

などんよりとした気持ちで更衣室に向かっていた。

花は昔から運動が大の苦手だ。特に球技はもつとも自信がない。マラソンや水泳など一人でやる種目ならまだましだが、団体競技になると皆の動きについていけず迷惑ばかりかけてしまう。特にバレエなんてサーブは出来ないしトスはあさつての方向へ飛ばし、参加するのが申し訳ないと思うくらいの実力なのだ。

体育館が近付くにつれ、心臓がどきどきしてきた。たかが体育、されど体育。花には緊張の五十分間なのだ。

――せめて皆に迷惑がかからないようにしなきゃ……。

失敗をして皆にこれ以上嫌われるのは避けたい。深呼吸して花は更衣室のドアを開けた。

今日の体育は他クラスと合同のため、更衣室は混んでいた。自分の名前の書かれたロッカーへ行き、花は体育着を入れてきたバッグの中から鍵を取り出そうとした。

「あれ？」

ポケットに入れてあったはずなのに、ない。底の方やポーチの中を見てみるけどやっぱりない。どこかへ落としたのだろうか。

ロッカーの上にバッグを置き、きよろきよろと足元を見回しながら花は来た道に戻った。だが何も見つからないまま入口ところへ来た時、

「ちよつと邪魔なだけだ」

顔を上げると、目の前にありさとその取り巻きたちがいた。

「道ふさがないでくれる？　すごい迷惑なだけだ」

嫌悪しか読み取れないその顔は、何度見ても花とよく似ている。まるでもう一人の自分を見ているよう。でも同じなのは顔の作りだけで、表情や雰囲気はまるで別物だ。

花を押しつけてありさは更衣室の奥へと向かった。友人たちもそれに続いて行く。

——そっか、塚本さんのクラスと一緒にやるんだ……。

それを思うと急に不安が積み重なっていく。

目立たないようにしよう。これ以上何か言われるのは嫌だ。

そう対策を決め、花は鍵探しに戻った。でも廊下に出てみたが見付からず、あきらめて更衣室に戻った。

着替えを終えた生徒たちが体育館の方へぞろぞろと移動していく。もうすぐチャイムが鳴ってしまう。花は慌ててロッカーに戻ったが、

「あ……」

花のロッカーを囲むようにして立つありさたちの姿に、足が後ろに下がりそうになる。でも体育着の入ったバッグはロッカーの上だ。思い切って花は声をかけた。

「あ、あの、何か用ですか？　そこ私のロッカーなんですけど……」

取り巻きたちの視線が一斉にこちらを向く。ロッカーに寄りかかっていたありさが身を起こした。

「あんたに訊きたいことがあるの。ちょっといい？」

嫌とは言わせない強い口調に花は押し黙った。取り巻きたちの前にありさが進み出る。

「うちのおばあちゃんがね、あんたの母親に会いたいですって。東京にいるんですしょ？　どこにいるか教えて」

「え……？ どうしてママに？」

「決まってるじゃない。圭祐おじさんのことよ。それにあなたのことも。はつきり言っておきたいんですよ。今さら出てきたってあなたは塚本家とは何の関係もないって。だからくれてやるものも何もないって」

「どういうこと……？ それ」

「あなたが圭祐おじさんの子供でも、うちは何の援助もしないってこと。だからさっさとここから消えて、もう一生姿を見せないでって言いたいの」

「マ、ママがお金目当てだって言うの？ そんなわけない！」

とんでもない言いがかりに、花は愕然とした。ありさがフンと鼻を鳴らす。

「どうだか。あなたの母親って水商売やってるんですよ？ お金に困ってあなたをよこしたんじゃないの？ そうじゃなきゃこんな偶然ありえないわよ。借金でも作ったの？ それとも男に騙されたとか？」

ありさたちが大きな声で笑う。顔がかっと熱くなるのを花は感じた。はずかしいんじゃない——怒りだ。結んだ唇が震えて、涙が浮かび上がってくる。

「おばあちゃんが言ってた。『昔から節操のない女だった』んだって。知ってる？ あなたの母親の母親も水商売してたんだって。でも男に捨てられてアルコール依存症になって、あなたの母親は施設で育ったの。だから母親と同じインランなんだって。おじさんと駆け落ちしたのだから地主だから騙したんですよ。今回だって同じよ。あなたをうちの子だって認めさせてお金をせびるつもりで」

「違う！ やめて、やめてよ！」耳を塞いで花は叫んだ。

「何も知らないくせに、ママのこと悪く言わないで！ そんな人じゃない！」
悔しさと怒りで頭が真っ白になった。気付けば花はありさに掴みかかり、手を振り上げていた。

「何してるの、やめなさい！ もうチャイムはとづくに鳴ったわよ」

騒ぎを聞きつけた体育教師が飛び込んできた。はっと我に返り花は手を放した。
「どうしてケンカになったの。理由を言いなさい！」

教師の叱責に、花は自分でも何をしたのかわからずに呆然と立ち尽くした。ありさは下向き、取り巻きたちも顔を見合わせて目を逸らした。

握りしめた手が、震えた。悲しさと、悔しさと寂しさで胸がいつぱいだった。

結局花はバレーボールに参加しなかった。

チャイムを無視したこととケンカをした罰として、教師から体育館の二階の通路を二十周するようにと言われたのだ。ありさも同じペナルティを課せられたが、ずるをして皆のところへ戻ってしまった。

花は歩くようなペースだが、まじめにひたすら走り続けた。ありさに掴みかかったことを花は後悔していなかった。いつもの内気な自分からは信じられない行動だったが、彼女を許せなかった。

咲は昔の自分のことを多く語らない。ありさが言ったことも初めて聞いた。でも花は咲のことを疑ったりしない。あの話が本当だとも思わない。

他人の言葉なんかより、ずっと確かなものがある。花と咲はずっと一緒に暮らしてきた

のだ。二人で一人みたいに、助け合って分けあって。この目で見た咲の姿とこの耳で聞いた咲の言葉が花のすべてだ。噂話なんかなんとも思わない。

でも咲のことをバカにされたのは許せなかった。殴ってやりたいとも思った。だけどそれ以上に――悲しかった。大切な人を悪く言われて。自分のことのように、いや自分のこと以上に傷ついた。

――あんなこと、もう言わせない……。

上がる息の下、苦い涙を花は飲み込んだ。

今まで咲はたった一人で花を守ってきてくれた。だから今度は自分が咲を守らなくては。

負けちゃだめだ。

疲れて重くなる足に力を込め、花は最後の一周を走り終えた。

皆より少し遅れて花は更衣室へ戻った。

息もまだ上がっているし、ふらふらする。でも六時間目に遅れるわけにはいかないので、ロッカーの上から制服を入れたバッグを下した。だがその時、あることに気がついた。

ロッカーに鍵がささっている。

――どうして……。

誰かが拾ってくれたのだろうか。きよろきよると辺りを見回してから、花はおそろのおそろ鍵を回した。

カチリと音がしてロッカーが開く。花はほっと胸を撫で下ろした。だがハンガー掛けの

上にある棚に覚えのない黒いショッピングバッグが置かれているのに気付いた。なんだろう——花は背伸びびして手を伸ばした。

「あれっ？ サイフがない！」

近くで誰かの声があった。

ちょうどその時、ずり落ちたバッグの中身が花の上になだれ落ちてきた。

——え……？

ピータイルの床に散らばったものを見て花は固まった。

財布が二つに、定期入れ、そしてペンやノート……更衣室内の生徒の視線が一気に床の上に集まった。なんでこんなものが——混乱していると、「あっ」と小さく声が上がった。

「それ……あたしのサイフ」

おずおずと床に落ちている財布を指差したのは、花と同じクラスの少女だった。さらに別の声が次々に上がる。

「その定期、あたしの！」

「それも私がなくしたペンだよ。うそー……」

不穏なざわめきが広がっていく。言葉をなくして花は呆然と立ち尽くした。

——皆がなくなったものがなんで私のロッカーに？ なんで？ なんで？

こんなの知らない。心臓の音がドクドクと激しく胸を打つ。足ががくがく震え、息をしているかどうかともわからなくなってくる。

「あんたが盗んでたんだ。……サイテー」

追い打ちをかけるようにありさが言った。

違う、そうじゃない。私じゃない。

声が出ない。花は助けを求めるように周囲を見回した。

だがそこにいる全員が同じ表情で花を見ていた。疑いと、軽蔑のまなざしで——
「違う……」息苦しさをそう呟くのが精いっぱいだった。

その空気に耐えきれず花はその場から逃げ出した。

いったいどのくらい走り続けただろう。

気付けば花は学校の門を抜けて駅前広場の植え込みに膝を抱えて座っていた。

無我夢中だった。もうあれ以上あそこにいられなくて——逃げてしまった。膝に顔を埋め花はぎゅっと目を閉じた。

——もう帰りたい。やさしい皆のところへ。

咲や彼女の店のホステスたち、花を受け入れてくれる人たちの顔が浮かぶ。

このまま電車に乗れば東京に帰れる。きつとその方がいい。ここにいってもいいことなんか一つもない——。鼻の奥がツーンとして目頭が熱くなる。思わず声をあげて泣き出しそうになった時、すぐそばで自転車の車輪が止まる音がした。

「……何してるの？」

その声に花は顔を上げた。自転車に乗った男の子が不思議そうに花の方を見ている。茶系のブレザーにチェックのズボンの制服には見覚えがあった。そして少年の顔にも。

「やっぱり。君、あの時のオレンジジュースの子だよね？ 覚えてる？ オレのこと」

にっこりと少年、十河星流が笑った。合同歓迎会で花を助けてくれた昇星学院の王子

様——もう一度会えたらいいと思っていたその微笑みに花の心臓がひっくり返りそうなほど跳びあがった。

「何してるの？　こんなところで。しかもそんな恰好で」

首を傾げた星流に花ははっと自分の姿を見下ろした。学校指定のジャージに体育館履き。制服に着替えないまま飛びだしてきてしまったことに、ようやく花は気がついた。

「あ……これは、その……」

恥ずかしい、こんな恰好で。花は俯いた。

しかもひどい顔をしているに違いない。せつかくまた会えたのに最悪だ。穴があつたら入りたい——自己嫌悪に陥っていると星流がくすりと笑った。

「乗って」

「え？」

唐突な誘いにメガネの奥で花は目を瞠った。斜めになっていた自転車をまっすぐに起こし、星流は後ろの荷台を指差した。

「いいところに連れて行ってあげるよ」

——信じられない。

自転車をこぐ星流の背中を見つめながら、花はほっぺたをつねりたい衝動に駆られた。

でも今手を放したら確実に道路に落ちてケガをする。荷台の端をぎゅっと握り直し、花はもう一度繰り返した。

——信じられない。

自分を覚えていてくれただけでもすごいのに、彼の自転車の後ろに乗っているなんて。もう二十分ほど、星流は自転車をこぎ続けている。市街地を抜けてゆるやかな長い坂道昇りて行くと高台の住宅地が見えてきた。その手前で星流は自転車を止めた。

「降りて。ここからは歩き」

自転車を道路わきに止めると、星流は外壁と外壁の間にある小さな隙間に身を滑らせた。

薄暗いその路地の先には、上に向かって細い石段がまっすぐに伸びている。星流の後に続いて花も階段を昇り始めた。

「どこへ行くんだらう。」

意外と急な階段を花は息を切らせながら昇り続けた。そして十分ほどたった頃ようやく出口が現れた。

「ここ、オレの好きな場所」

そこは高台のてっぺんにある小さな公園だった。すべり台の先にある丸太を組んだ見晴らし台へ星流は昇って行く。花も後を追いついて、そして昇り切った先で感嘆の声をもらした。

「うわあ……」

眼下にN市の街並みが広がっている。家もビルも畑もすべてが一望でき、その先には海も見えた。

「いい景色でしょ。最近見つけたんだ。夕方になると夕陽もきれいだよ」

かすかな潮の香りに乗せた風が正面から吹きつけた。雨上がりのせいかな、少し湿っている。手すりにへばりついて、花は広大な風景に釘付けになった。

「すごい、気持ちいい……。よく来るんですか？」

隣にある整った横顔を見上げ、花は訊いた。

「うん、たまに。本当は海まで行きたいけど、ちよつと自転車じゃ遠いから。でもこうやって街を上から見下ろすのって贅沢じゃない？」

「あの……学校は？」

「サボリサボリ。時々息抜きしないとだめなんだよね、オレ。だから時々抜け出すんだ」

「えっ。い、いいんですか？ あの……生徒会の副会長なんですよね？」

確か彼を見て騒いでいた女の子たちがそんな話をしていて。意外な言葉に花が驚いてみると、星流がこちらを向いた。

「ちゃんと優等生はしてるよ、普段はね。だから自分へのご褒美なんだ、これは」

悪戯っぽい笑顔にどきつとする。あんまり見ていると顔が赤くなりそうだ。慌てて目を逸らすと「そういえば」と星流が話題を変えた。

「まだ名前知らなかった。オレは十河星流、昇星の高等部二年。よろしく」

「あ……えっと、西野花です。よろしくお願いします」

「そう、花……。ね。じゃあ、花ちゃん。なんであんなところにいたの？」

突然名前で呼ばれて花は戸惑った。視線を泳がせて「え、えっと……」と口ごもる。

「何かあったんでしょ？ よかったら聞くとよ。話しくいなら無理には言わないけど……なんか辛そうだったから」

優しいその声音が花の中にすうっと染み込んだ。

いいのだろうか、話しても。迷惑じゃないだろうか。少しの間迷って、花は切り出した。

今日のこと、これまでのこと。不思議なことに、話し始めたら止まらなくなった。時々涙が込み上げて詰まりながらも、「焦らなくていいよ」という声に助けられて、花はありのままを星流に話した。

「……私、皆に不快感を与える存在なのかな」鼻をすすりながら花は涙を拭いた。

「すぐ緊張して人とうまく話せないし、頑張ろうと思っても失敗ばかりだし。こんなんじや皆嫌になるよね。だから友達もできないし、疑われる。……誰も必要としてないんだ」

口からこぼれた弱気な言葉に、再び涙が出てくる。ジャージの袖で目頭を押さえていると隣で黙って聞いていた星流が口を開いた。

「……花ちゃんはさ、自分が嫌い？」

その質問に、花は頷いた。好きなわけではない、こんな自分。明るくもないし、面白くもないし、いてもいなくても誰も気付かない存在。劣等感ばかり感じてきた。

「でも、自分は悪いことや間違ったことはしてはいないと思う？」

涙をぬぐい、花は髪をぶんぶんと顔を横に振った。それを見て星流が小さく微笑んだ。

「だったらそう皆に言えればいい」

「……え？」

「自分は何もしていないって自分を信じられるなら、堂々としてればいいんだ。それが正しいことなんだから、逃げ出す必要なんてない」

きつぱりと言い放たれたその言葉に、「でも……」と花は顔を上げた。

「きつと誰も信じてくれない……私の言葉なんて。誰も……聞いてくれないよ」

何を話したってきつと無駄。皆自分が犯人だって思っている。そんな場所に戻るのは怖

い。これ以上傷つくのは——怖い。

「じゃあいいの？ このままで。ここで逃げ出したら、きつとずっと……このままでよ。この先もそうやって我慢して怯えていくの？」

ずっとこのまま——星流の言葉が胸に突き刺さる。胸が痛い。苦しくて、悲しい。ぬぐつてもぬぐつても涙腺が壊れたように涙が止まらない。

「……いや」震える声を花は押し出した。

「このままじゃ……いや……一人は……もうやだあ」

今まで押し殺していた感情が一気に溢れだした。

——こんな風に逃げ出すために、この街へやってきたんじゃない。

自分を変えるために、新しい場所へ行こうと決意したのだ。自分をもっと好きになれるように、もつと誇れる人間になるために——

「……一人じゃないよ」

星流の手がそつと、花の頭を撫でた。

「オレが君の友達になる。そして君を信じるよ」

「……え？」

しゃくりあげながら、花は星流を見上げた。

「だから、負けないでほしい。色んなものに触れて関わっていくと、傷つくことも多いよね。だから時々すべてから逃げ出して一人になりたいって思うこともある。でもそれじゃ、いつまでたっても幸せって来ないんだ。時には勇気を出して立ち向かわないと。自分を変えたいって言ってたよね。そのためにここへ来たんだろ？ だったら、今逃げちゃだめだ」

力強い言葉が、花の中に響いた。真剣なまなざしがまっすぐに見つめてくる。

「オレは友達には笑顔でいてもらいたいし、自分を好きでいてもらいたい。だから……が
んばれ。辛くなったらすぐに駆けつけて、こうやってなぐさめてやる」

ぽんぽん、と軽く花の頭を叩いて星流がにこつと笑った。だが花は素直に喜べなかった。
「どうして……？ 私と友達になんかなくても……いいことないのに」

同情なら、はじめすぎる。星流なら、友達はたくさんいるだろう。頭もよくてお金持ち
で恵まれている。そんな人に自分なんて必要ない存在だ。

「同情なんかじゃないよ」

花の心を見透かしたように星流が言った。

「オレは純粹に花ちゃんに頑張ってほしいと思ってる。応援してあげたいって。だから友
達になりたいって思った。それじゃいけない？」

「べ、別にそういうわけじゃないの。ただ……その」

「それにいいことはあるよ」

え？と首を傾げる花の視界で、こげ茶色の双眸がふんわりと微笑んだ。

「花ちゃんが笑顔になれば、オレもうれしい。それがいいこと。友達ってそういう気持ち
を分けあえる存在だろ？ 損とか得とかそんなの関係なく」

通り抜けた風に星流のこげ茶の髪がさらさらと揺れた。

「成立？ なら握手」

星流がすつと手を差し出した。トクトクと花の鼓動の速度が速まっていく。もしかした
ら夢かもしれない、そんな心地で花はその手を握った。

「よし、じゃあ戻ろう。後悔しないために。誰が何て言うかわからないけど、オレは花を信じる。それだけは忘れないで。……負けちゃだめだよ」

あの日花の世界を一瞬で変えた言葉を、星流が囁いた。

つないだ手が、温かい。心の中にある曇り空がゆっくりと晴れ渡っていく。その魔法の響きは再び花の心にそっと舞い降り、小さな勇気を与えた。

——大丈夫、大丈夫。

教室の扉の前で花は深呼吸した。

人気がない廊下に教室内のざわめきが聞こえてくる。

星流に送ってもらい、花は学校に戻って来た。六時間目は終わり、今はどのクラスもホームルームの時間だ。

足と手が震える。心臓がドクドクと鼓膜を打ち、自分の息遣いさえも聞こえない。

——大丈夫、大丈夫……。

ゴクリと花は唾を飲み込んだ。

この扉を開けたら、皆がいる。何を言われるだろう。どんな顔をされるだろう。怖い、逃げ出したい。でも——

顔を上げ、花は覚悟を決めた。そして取っ手に手をかけ、扉を開いた。

教室内のざわめきがぴたりと止んだ。クラスの全員が教室の後ろの入り口を振り返った。

担任の美佐子はまだ来ていなかった。張り詰めた沈黙が花に押し寄せる。逃げ出しそう

な気持ちを引き戻し、花は教室内へ足を踏み入れた。

一歩一歩、踏みしめながら自分の席へと向かう。皆の視線が全身に針のように突き刺さる。椅子にすわり、花は目を瞑った。大丈夫、大丈夫……きつとできる。膝の上で手を握りしめ、さあ顔を上げると自分に呼びかける。

「……泥棒」

その時誰かがぼつりと言った。はっと花は目を開ける。するとそれを皮切りに、あちこちから同じ言葉が飛んできた。

「泥棒」

「泥棒」

やがてそこに手拍子も加わり、クラス中で大合唱が始まった。再び目を閉じ花はぎゅつと手を握りしめた。もう嫌だ——心が悲鳴を上げる。だけどここで逃げたら……今までと同じだ。震える息を花は大きく吸った。

「違う、私じゃない！」

かすれた声を懸命に押し出し、花は立ち上がった。

拍手と合唱がびたりと止んだ。

「私は皆のものを取ったりなんてしてない。私がやったんじゃない！」

「——はあ？ 何言ってるの？」真ん中の席に座っていた少女が立ち上がった。

「あなたのロッカーから出てきたじゃない、あたしの定期入れ！ 時計とかペンケースも。なのに言い訳すんの？ 誰がそんなの信じるのよ！」

花に向かって少女が定期を投げつけた。肩に当たったその感触にびくりと体がすくん

だ。

「そうだよ、あんた以外に誰がいんだよ。ふさげんな！」

「人の物盗むなんて、サイテー」

「絶対許せないよねー」

飛び交う罵倒の数々を花はただ受け止めていた。

——やっぱり誰も、信じてくれない。

どの顔にもどの声にも花への怒りと嫌悪が満ちている。この学校に入る前、パンフレットを眺めながら花が描いていた笑顔はどこにも——ない。

こんな風に皆から憎まれたかったわけじゃない。皆を怒らせたかったわけじゃない。ただ、毎日を笑顔で過ごしたかった。新しい自分と、友達に囲まれて——。でも高望みだったのかもしれない。結局自分どころか誰も笑顔になんか出来ない。そう思ったら、メガネを通して見える世界が急にかすんでぼやけた。

「ごめん……なさい」 涙声で花は呟いた。

こんな風に謝ったら罪を認めたとと思われるだろう。でも花には他に切り出すべき言葉が見つからなかった。

「……私は、やってない。それは……本当なの。私が犯人だと名乗り出て、それで皆の気が済むならそうするのが一番いいと思うけど……でも出来ない。そこまで私は人のためにやさしくなれない。だから……ごめんなさい」

顔を上げ、花はまっすぐに皆と向かい合った。

教室内が再び静まり返った。懸命に花は言葉を続けた。

「私は昔からいじめられっ子で、どこへ行ってもそれは同じで、嫌だっただけ……仕方のないことだっただけであきらめてきた。皆と仲良くしたいし、遊びたかったけど……こんな自分じゃしようがないって思ってた。うまく気持ちも話せないし、笑われるのも怖いし、だから何も言わないで我慢ばかりしてきた。しようがない、しようがないって」

いつもあきらめてきた。そうやって自分を守ってきた。ちっぽけな自分にはそのくらいしか出来なかったから。弱音を吐いても辛くなるだけだから。

「でもこんな自分大嫌いで……本当はもっと変わりたいかった。だけど怖くてずっと逃げてきた。そんなんじゃ変わるはずなのに。もっと自分が嫌いになるだけなのに」

何度もしゃくりあげ、詰まりながら花はしゃべり続けた。いくつものしずくが足元を濡らしていく。涙でもう皆の顔は見えなかった。

「本当はここに戻って来るのも怖かった。皆と会うのが怖かった。何度も心が折れそうになつて立ち止まって……でもそれじゃいけないと思ったの。逃げ続けていたら、私はずっとこのままだから。もっと自分が嫌いになってしまうから……。そんなんじやきつと誰も好きになつてくれない。だからまず自分を好きになりたい。ちゃんと自分と向き合えるようになりたい。そして……みんなと友達になりたい」

新しい自分を始めるためにここへ来た。毎日を好きになれるように。だから声に出して言おう。自分の言葉で、自分の声で。

「だから……皆に言わなきゃって思ってたの。信じてもらえなくても、私じゃないって『がんばれ』

繰り返し聞こえる星流の聲が花の背中を押す。

大丈夫、私は一人じゃない。自分を信じてくれる友達がいる——彼のためにも、花は絶対に逃げないと汗ばむ手をぎゅっと握りしめ、耐えた。崩れ落ちてしまいうような足に力をこめ、懸命に懸命に涙でぐちゃぐちゃになった顔を上げて立っていた。

がんばれ、がんばれ。

これで少しは自分を好きになれるかな。たとえ誰も信じてくれなかったとしても。

逃げないで戦った、その真実が花をきつと少しだけ強くしてくれる。

「……それだけ言いたかったの。ありがとう、聞いてくれて」

ぺこりと頭を下げ、花は教室を出て行こうとした。その時、誰かが立ち上がる音がした。

「……私、信じるよ」

振り返った花の目に一人のクラスメイトの姿が映った。それは入学式の時に話した少女、吉田亜樹だった。

「西野さんは……あんなことする子じゃないと思う。私……信じるよ」

すると、少し離れた席からもう一人の少女、紺野絵里が立ち上がった。

「わたしも……そう思う。本当は疑ってたけど……でもさっきの言葉、嘘じゃないと思う」

花は小さく目を瞠った。思いもよらない出来事だった。

「私も……違うと思う」

「私も——」

一人また一人、まるで引き寄せられたように手が上がっていく。唇を噛みしめ、花は込み上がる衝動を飲み込んだ。

「……ごめんね。ずっと、何も言ってあげられなくて」

花に向かって亜樹が言った。少し潤んだその瞳に、自分の姿が映っている。その瞬間、今まで遠く離れて見えなかった亜樹や絵里の心と、まっすぐに繋がった気がした。

『がんばれ』

星流の手の温かさを花は思い出した。

今度ははつきりと言える、もう逃げないって。ここでまだ頑張れるって。

一番に報告してもいいかな？ 喜んで……くれるかな？

「……ありがとう」

小さく呟いて、花は笑った。初めて心から笑った。

ずっと進まなかった時計の針は、こうしてゆっくりと動き出し、

ようやく花は新しい人生を踏み出した。

NONSTOP



やるうぜ!

土本強

Illustration:U35

あらすじ

田尻すなおと中村ひかるは高校一年生。ふとしたきっかけからゲームを作ることになった。次々と巻き起こる難問、社会からの軋轢、そして恋。二人は努力、友情の果てに勝利をつかむことが出来るのか……！（内容には若干の誇張があります。申し訳ありません）



横井ひろこ

今年の春大学を卒業したばかりのびちびち女教師。22歳独身。



田尻すなお

自称「どこにでもいる平凡な高校生」。昔ゲームをやっていたことはあったが最近は無沙汰。



中村ひかる

孤高の眼鏡。古いコンピュータを未だに愛用する不思議なコンピュータマニア。ただし勉強はいまいち。

第二話 腐り姫

六月。試験前の市立中央高校はにわかに勉強欲が渦巻いていた。教室にいても試験の話ばかり。中学から高校に入って初めての定期試験で危機感を覚えたものが多かったらしい。

危機感からほど遠い田尻すなお、中村ひかるの二人は、昼休みの教室の喧噪を抜けて屋上へと来ていた。屋上には数人の生徒がシートを広げて食事をしたり、風景を眺めたり。遠くに海が見える。今日も天気はいい。

「努力、友情、と来たらほんとは勝利だよなあ」

田尻は柵に手をかけぼんやりとぶつやいた。

「うん。あれはちよつと勝利とは遠いな」

中村は両手を下げ、足を肩幅に開いて田尻と同じ方向を見ていた。視線の先には駅。とはいえ、駅に何かがあるわけではない。

☆

結果から言うと、二人の初めての即売会は惨敗だった。

そもそも同人活動というものの存在を知らなかった二人は周りの熱気に圧倒されながらぼけっと店番をしていた。同人誌を売っている人はそれなりにいるが、ソフトを売っている人はほとんどいない。どちらかという女性の方が多い。そして、大変に皆絵がうまい。

二人は控えめに50枚ほど持って行ったCDに手書きのジャケットをコピーしたものを入れ、ディスクにはマジックでゲーム名を書いた。「侵略！ モーニング☆スター娘。」田尻がノリノリでタイトルを提案したとき、中村は一瞬眉をしかめたが何もコメントはしなかった。

昼に一端休憩が入ったときまでには（そもそも、即売会に休憩があるということすらも二人は知らなかった）売れたのはたった一枚。それも、様子を見に来た顧問の横井ひろこが買っていったものだけ。

「あなたたち、ポップとかスケブとか用意しなさいよ」
二人には単語の意味がそもそもわからない。

その日一日が終わって、売れたのはわずか二枚。実質的には買ってくれた客はただ一人だった。

☆

「やっぱさー、タイトルダメだったかなあ」

「いや……それは、どうだろう」

中村は言葉を濁した。

「ゲームの内容的にマニアックだったのかもしれない」

「マニアックかなあ」

やろうぜ！

「ああ」中村は画面を思い出しながら続ける。グラデーションと半透明を多用した画面のこので美しいといえば美しいと言えないこともない。「攻撃がボタンでは行われないうのは直感的ではないのかもしれない」

「だってさ」田尻は両手を握って胸の前に折った。「やっぱりあの重さこそが重要なわけじゃん。単にボタンを押せば攻撃！ なんてのじゃなくて、こう、振り回したときに引張られるとか、あの重みで攻撃力が増すとか……」

「ああ、そうだな。判ってる」

田尻の話の途中で遮って中村はため息をついた。

「大衆に阿っても良いことはない。あのゲームの一番の特徴はあそこだ。苦労したところもそうだし、何よりもそれは成功していることは俺たちが一番判ってる」

「え？ なに？」

田尻は独白し始めた中村に突っ込んだ。全く聞き覚えのない言葉。

「どうした？」

「おも……なんだって？」

「たいしゅうにおもねる。いかにも人が好きそうな所に突っ込む、というような意味だ」

「へえ」田尻は口を半開きにして中村を見つめた。「よくそんな言葉知ってるねえ」

風が二人の間を通りすぎた。中村は何も答えず、田尻は沈黙に頭をかいた。

「そういえば、さ」沈黙を破ったのは田尻だった。「きょう、横井先生変じゃなかった？」

「やっぱり気づいたか」

中村はうなずいた。

「うん。どこがどう、とは言えないんだけど」

昼休み前の数学の時間を思い返す。横井の数学はおおむねたどたどしいので生徒には不評だ。大学受験を意識しているものは露骨に横井の数学を無視して独自に勉強をしていると聞く。

「今日はひどかった。そもそも間違ったことを教えてた」

「え？」 田尻は聞き返した。「僕がわかんなかったんじゃないかって？」

「いや、俺もはじめはそう思った。明らかに意味が通じない部分がいくつもあって調べているうちに気づいた。横井先生、何か別のことを考えてたんだと思う」

「うわぁ……」

田尻は横井の姿を思い出した。授業中と同好会をやっている最中の露骨な態度の違いは気になるが、授業中はおおむね暗く自信なさげ。その上意味のわからないことを言い出してはますますまずまずい。

「何かあったのかなあ？」

「そこまでは判らないが」 中村は首を振った。「どうせ試験前だし同好会も活動停止だ。詳しく話を聞く機会はなさそうだ」

「そうだね」 田尻はため息をついた。「勉強しなくちゃ」

☆

二人とも、一学期の期末試験は中間試験に比べるとだいぶ埋めることが出来た。正答率は多分相変わらず余り高くない。とはいえ、中学校時代はそれなりに書いていたことを思うと田尻はやっと高校が「自分の学校」のような気がしてくる。

やろうぜ！

期末試験の終わったその日、テストの採点を行うために職員室に入れない二人は横井を呼び出して同好会の為に視聴覚室の鍵を出してもらった。

「やっぱさ、思ったただけど」視聴覚教室へ行く道すがら、田尻は中村に話しかけた。「大衆に阿るかどうかはともかく、ちよつとはわかりやすいものにしないとダメなんじゃないかって気がするよ」

「そうか……」中村は目を伏せ、眉をひそめた。この表情をしているときに機嫌が悪いわけではないことには田尻は慣れた。考え込むと険しくなるらしい。「次、どうするんだ？」
「もうちよつとわかりやすい、こう、流行ってるところから手を出そうかと思つて」
「大衆に阿るって……ジャンル効果？」

横井は歩きながら顔だけを二人に向けた。まもなく視聴覚教室に着く。

「なんですか、それ」

田尻は聞いたことのない言葉に首をかしげた。

「んーとね」横井は一瞬空中を見上げてから答えた。「即売会に来る人たちって、だいたい趣味が偏ってるわよね」

「そうですね」

田尻はこの間のコミックマルシェ・ローカルを思い返した。どことなく似たような絵がたくさんあった気がする。書いている人によってアレンジされていたが、元になったキャラクターはおそらく週刊漫画雑誌に出ていた気がする。

「自分が好きな作品について書いている人いたら、おもわず欲しくなるじゃない。あの場では、作り手もお客さんだし」

「でも」中村が口を挟んだ。「そうだとすると俺たちみたいなのは絶対に売れないんですか？」

「うーん、そうじゃないのよ」横井は立ち止まって振り返った。まだ視聴覚教室までは少しある。二人もそれにあわせて立ち止まる。「ジャンル効果って、売り上げには確かに見込めるんだけど、そのうち何となく義務になって来ちゃうのよ」

「好きで書いてるんですよ？」

田尻はあの場にいた、主に少女達を思い返した。男性キャラの扮装をした女の子がたくさんいた気がする。

「そ、はじめはね」横井はため息をついた。「そのうち、書いてることじゃなくて、同人誌が売れることが嬉しくなっちゃうの。売れるから次の会はもっと作る、それが売れ残るのが怖いからますますジャンルに特化する……ってやってると、好きでやっていたはずのものが好きじゃなくなる瞬間が来るのよ」

「嫌いになるんですか？」

「嫌いじゃないわよ。もちろん好きよ。ただ」横井は遠い目をして廊下の窓の外を見た。「好きなのはものから離れたくなることって、あるじゃない？」

「あるん……ですか？」

田尻もその視線の先を見た。相変わらず何も無い。

☆

「大量の敵をさばけるようにしないと」

「プログラムのには簡単だが、大味にならないか？」

やろうぜ！

「でも、やっぱちまちましてたらだめじゃない？」

☆

「グラフィック欲しいよね」

「そうだな。何か書けるか？」

「書けない。けど、コピーしたり、色塗ったりしてもばれないんじゃないかな？」

「いやそれは……さすがにばれるだろう」

☆

「今回は効果音どうする？」

「声入れようよ、声」

「ああ。だれがやる？」

「女の子でも連れてくるかなあ。中村、頼れる当てない？」

「馬鹿いうな」

☆

「だいぶ形になってきたね」

田尻はキーボードに手を置いてゲームオーバーの画面を見てから中村の方へと向いた。

中村はキーをたたく手を休める。

「今回は速かったな」

「だいたいどういうゲームにするか決まってたしね」

「そうだな」

中村はそういつてから再びソースを見た。しばらく押し黙ってから続ける。

「ほんとにこれでよかったのか？　これが、作りたかったのか？」

「え？」

田尻は中村の表情を読み取ろうとした。中村はうつむいてどこを見ているのか判らない。

「確かにゲームになつてはいる。どう見たってゲームのジャンルを間違えることはないだろう」

「そこまで言うってから中村は続きをひねり出すのに時間をかけた。首をもたげ、田尻を見つめる。」

「これが、田尻の作りたかったものなのか？」

「この間、中村も聞いたじゃん」田尻はためいき混じりに答える。「ジャンル効果。今は弾幕系はやってるって話だし、弾幕ならいけるかな……」

「そうじゃない」中村は田尻の言葉を遮った。「弾幕はいい。ゲームとして楽しいものもあるだろう。それは認める」

中村は語気を強めた。

「それを、本当に田尻はおもしろいと思ってるのか？」

「いや、それは……」

田尻は答えに困った。中村と駅前ショッピングモールに入っているゲームセンターに行ったときに見たゲームを思い出した。隣のゲームに比べて明らかに古い画面のシューティングゲームに未だに人がついてるのが印象的だった。だが、田尻には手も足も出なかった。

やろうぜ！

「この間、調べたじゃん。このジャンルだけで一大勢力なんだって」

「そうじゃない」中村は首を振った。「これが、おもしろいのか？」

田尻は心に何か刺さるものを感じた。でも、それは無視して笑って答えた。
「おもしろいに決まってるじゃん」

中村は何も答えなかった。

☆

「ようは、死にそうで死なないというのを演出できればいいんだな」
「できる？」

「いろいろ考えられる…：あ、いや、ちよつと待ってくれ。もう少し考える」

☆

「キャラクターがセリフ言わないと変じゃない？」

「そうか？ セリフはゲームに関係ないぞ。むしろ邪魔だ」

「いいんだよ。一端そこでゲーム止まるし、ルールは邪魔しないよ」

「一端止まるのならなおさらない方がいいんじゃないのか？」

☆

「テクノだよね、テクノ！」

「音楽はよくわからん。鳴らすだけならすぐだが、用意できるか？」

「流行だからたくさんあるって」

☆

「だからさ！」

珍しく田尻は叫んだ。放課後の視聴覚教室。相変わらず広い教室でついているパソコンは二台だけ。二人は並んだパソコンの前におり、田尻は立ち上がり、中村を見下ろしていた。

「もつとこう、エフェクトとか入れて、派手な感じに」

「十分やつてる」中村は椅子に座ったまま答えた。田尻を見上げながら眉をひそめる。「そもそも、ゲームのルールとして不必要なエフェクトはあっても邪魔なだけだ」

「良いんだよ、それで！ 見たじゃん、この間、ゲームセンターで」

中村はゲームセンター見たゲームを思い出した。子供向けのゲームが多い中、少し古いゲームが数台置かれていた。全体的に演出が多く、ルールとして必要かどうか判らない部分にまで表示が入っていた。

「確かに既存のゲームはそうだった。だが、それが良いとは思えない」

「いいんだよ！」田尻はさらに叫んだ。「遊ばないとゲームの中身なんか見てもらえないんだから。見てもらうにはゲームと無関係なエフェクトとかたくさん入ってないと」

「中身なんか、じゃないだろう」中村は眉間のしわを深めた。「判ってるんじゃないのか。これ続けると中身がないゲームになるってことが。そんなものが作りたいのか？」

「違うよ！」

田尻は顔を真っ赤にした。

「僕が作りたいたいの楽しいゲームで」

言葉が続かない。何を言っても伝わらない。これだけ言っても判ってもらえない。

「もういいよ！ 中村なんか」

やろうぜ！

田尻は中村に背を向けた。

「いい。自分で作る」

長い沈黙が流れた。

中村は静かに席を立った。パソコンをシャットダウンすることもなく鞆を持って立ち上がる。そのまま視聴覚教室の扉を開け、最後に振り返って田尻を見た。

その目には怒りの色はなく、ただ泣きそうな、哀れむような、悔しいような複雑なものだけ。

音もなく、中村は視聴覚教室の扉を閉めた。

☆

翌日、教室でも中村は田尻に話しかけては来なかった。

田尻はそのときになって気づいた。中村が話しかけてくることなど、今までだってほんとはなかったのだ。いつだって田尻が中村にあれこれ話を持ちかけ、中村がそれを考え込むということをしていた。

当の田尻が話しかけないということは、中村も田尻に触れることはない。

同好会のために視聴覚教室に行くのも一人。はじめ一、二日は中村の所在を聞いていた横井もじき聞かなくなった。

視聴覚教室でパソコンをつけてもやることはあまりない。中村が残っていたソースは今となっては中身が高度すぎて意味がわからない。昔作った一本目のゲームのソースを持ち出しては手を加えてすぐに破棄する。これを作ったときの自分の高揚や、中村と気持ちや、ゲームの内容や、空腹感までもを共有していたのが嘘のような気がする。

そうしたまま数日が過ぎたある日、視聴覚教室に一人の教師が入ってきた。

「おまえか？ ゲーム制作同好会の会長は」

「あ、はい」

田尻は慌てて立ち上がって振り返った。夏近いとはいえ、夕方は薄暗い。電灯もつけずにいたので、教師の姿はよく見えないが、見覚えがある気がする。

「校則は知ってるな？」

「えっと」田尻は慌てて生徒手帳を探した。校則のページを開いてから、何を聞かれているのか判らないことにやっと気づく。「どれ、でしょうか？」

教師は田尻に近づいた。近づくことによってその顔がやっと判る。田尻のクラスの現代社会を担当している老教師、中山はやとだった。厳つい顔に、常に怒っているかのような威厳を浮かべている。

「同好会は最低二人以上だ」

「あ、はい」

設立当時に聞いた気がする。

「名前貸しは許されない。ルールとして意味が無くなるからだ。社会は法の網をくぐるものを容赦しない」

何か難しいことを言われている気がするが、田尻には全く意味がわからなかった。中山は答えも求めずに続ける。

「おまえがここについて良い意味はない」

「……え？」

やろうぜ！

田尻は慌てて聞き返した。

「そうだろう？ 同好会の活動時間にもかかわらず一人しかいない。帳簿上は存在する人物が来た形跡はない」

「いえ、それは」

「そこまで言って田尻は何も続けられないことに気づいた。今のまま中村が戻ってくることは考えづらい。」

中山は田尻をにらみつけた。実際にはにらみつけてはいないのかもしれない。でも、田尻にはにらまれていているようにしか思えなかった。

「顧問と解散の相談をしろ」

「……はい」

田尻にはそう答えることしかできなかった。

夕焼けの赤がやけにまぶしい。

☆

「そう……」

夕陽の差し込む職員室にやってきた田尻は、事の経緯を横井に伝えた。視聴覚教室のパソコンはつけっぱなし、鍵も開いたままだが、あそこに長くいることは出来なかった。

「どうするの？」

「もう、やめようかと思って」

「中村君いないと作れない？ 他にプログラムできる人だっているかもしれないわよ？」

確かに授業にはコンピュータを使ったものもある。中村の手際が良いのは当然のものと

しても、授業について行っている生徒は多くいた。

「いや、中村じゃなくちゃダメなんです。僕はもう、ダメなんです」

「そう……」

横井は田尻のうつむいた顔を見てから指を折ってあごに当てた。

田尻はそのまま涙をこぼすかと自分で思った。様々な思いが渦巻くが、それがなんなのかは判らない。

「ちよつと、昔話をしようかしら」

横井は相変わらず何も無い壁を見つめながら話し始めた。田尻は一応その視線の先を追いかけたが、横井はそれを意に介さずに続ける。

「私、昔漫画書いてたの」

「漫画家だったんですか？」

田尻は慌てて横井の顔を見た。

「ちよつと」横井はため息をついた。「その、やってることを全部職業に結びつける癖、考え直した方良いわよ」

横井は机から鉛筆を取り出して、書きかけのプリントの裏に何か絵を描き始めた。

「仲間がいたのよ。一緒に漫画書いたり、即売会で売ったり、お泊まりで馬鹿話をしたり」
みるみるうちに絵はできあがっていく。見覚えのある漫画のキャラのような気もするが、やけに目が切れ長になっている。

「知り合ったのはいろんな場所。歳もばらばらだし、仕事もばらばら。私はたまたま最初に知り合った友達と一緒に巻き込んでいったのでいつの間にか私の周りに人が集まってる

やろうぜ！

感じになつてたの」

「部長、みたいな？」

「そこまで凄いものじゃないわよ。好きで集まつてるだけだし。ただ、サークル参加の申し込みは私がやってたわね」

話しながらイラストができあがった。横井は満足げに一息つくともう一人書き始める。「割といいメンバー集まつてたし、書いてる漫画がちょうどブレイクしてたのもあって、ジャンル効果でとんとん拍子に部数が増えていって。気がついたら壁際にいたの」

「なんですか？ 壁って」

「ほら、この間即売会行ったじゃない？」その言葉の裏にかすかな自嘲を感じる。「あのとき、売れてるサークルって長い列が出来ちゃうから、会場の真ん中には置けないのよ。だから、壁に寄せておくの」

「僕たちは会場の真ん中でしたね」

「そ、島」

田尻の目には頭に絶海の孤島が浮かんだ。なるほど人は来ない。

「売れなさそうなサークルは真ん中に置いて問題ないし、列を乱すこともなければ、列に邪魔されて困るものでもないしね」

二人目のイラストはもう少し目が大きかった。相変わらず、元のキャラとは何か違和感がある。

「ただね、あるとき判らなくなつたのよ。私、漫画が書きたかつたのか、彼女たちと一緒にいたかつただけなのか」

二人目のキャラができあがりかけたところで、おもむろにひげを書き始める。美少年にちよびひげが生え、頬には渦巻き。

「そんなこんなで就職が決まって、同人活動もやりづらくなつたし、売れ線を追いかけるのもいやになつちやうてね。あるときぱたつと連絡取らなくなったのよ」

「え？ いいんですか？」

「ダメでしょうね」横井は口の端をゆがめた。「はじめは来ていたメールや電話もやがて来なくなつて、私もオンラインイベントとか行かなくなつて」

「オンライン？」

「ああ、この間みたいな即売会。いろんなものがあるのよ。あるキャラが好きな人だけ、とかが集まつて」

「集まるんですか？」

「割とね。ほら、ジャンル効果あるし」

二人目のキャラは見る影もなくなつていた。美少年というよりは、小学生の教科書の落書きレベル。元になる絵を自分で描いているだけに痛々しい。

「この間ね、たまたま昔の仲間が集まつてるところ見ちゃつたのよ」

「ファミレスかどこかで……」

「違う違う、サークルカット。今度あなたたちが出るのとは別の即売会のカタログ」

確かに昔カタログのための絵を描いたような気もする。結局まともなイラストは描けず、とげのついたウオーハンマーを書いて誤魔化した。

「サークル名は違つてたけど、絵を見てすぐに判つたの。ああ、彼女達だつて。私が彼女

やろうぜ！

たちを捨てたんだから当然なんだけど、私なんかなくても代わりはいくらでもあるんだな、って」

横井は鉛筆を机に置いた。

「私は、自分が可愛くて逃げちゃっただけ。漫画は好きだけど、そこまでじゃなかったし」「だって、先生、無茶無茶うまいですよ、これ」

「あら嬉しい」プリントをつまみ上げた。端正なキャラクターと、教科書の落書きの載ったわら半紙。「あなたにあげるわ」

「それはどうも……」

田尻は両手で受け取った。手持ちぶさたに胸の前で抱える。

「あなたはどうか？ ゲームが好きなの？ 中村君が好きなの？」

「……」

中村にこだわっている自分には気づいていた。なぜこだわっているのかは自分でも判らない。

「カップリング的には萌えるわよね。熱血系とクールなナンバー2。どっちが受けか考えただけでぞくぞくするわ」

田尻は横井の話を聞いていなかった。自分に出来ることは何か。少なくとも、今投げ出すことではないような気がする。

「なんてね。私みたいなのが人生語っちゃダメよね」

「あの」田尻は顔を上げた。横井を見つめる。「もう少しだけ、活動続けても良いですか？」

「いいわよ。中山先生にはうまく誤魔化しとく」

「ありがとうございます」

田尻は頭を下げた。

「あと、先生の書いてた漫画見せてもらえますか？」

「それはダメ」

☆

翌日からやるべき事はたくさんあった。

元々JavaとNetBeansは二人で覚えた。たまたまプログラムの才能は明らかに中村の方が上だったが、知識としては同時に始めたようなものだ。

まずは前作のソースを元にプログラムの骨格を作った。作りたいゲームは決まっている。見かけにこだわったのは中身があるからだ。中身を作る分には今の知識でもまだ何とかなる。幸い、前作のソースは一度作り直したときにかなり見通しがよくなっていたので何をすると何が起きるのかがすぐに判った。

ゲームに必要な素材はありものを使うことにした。自分で書いたものではどうがんばっても綺麗なものにはならない。横井が持ってきた素材集や、家でインターネット経由で見つけたイラストなどをたくさん使った。二次使用を禁じた素材や市販のゲームからの引用など、このままではまずそうなものの気にせず使った。どうせ見るのは中村一人だ。中村以外に見せるつもりはない。

壁はたくさんあった。

数学的な知識は特に壊滅的だった。前作を作ったときに何となく知った数学だけでは目指しているゲームを作るには足りなかった。教科書を読んでも判らないことばかり。あり

やろうぜ！

ものの知識で、似たような結果になるものを何でも使った。足し算と引き算だけあれば結構様々なことが出来ることも判った。

プログラムの知識も足りなかった。なぜ動いているかわからないもの、動くはずなのに全く反応しないもの。プログラムの途中でいきなり落ちることも多い。そのうち、動くプログラムと動かないプログラムの見分けがつくようになってきた。理屈は判らないが、見た瞬間にこれはダメだと思ったものはほぼ高確率に動かない。ただ、例えそれがわかっても「どうやれば動くのか」は試行錯誤するほか無かった。

田尻は視聴覚教室でも一人、家でも一人でなにやらぶつぶつぶやくようになった。前作の制作中、中村がつぶやきながら作業をしていた理由がようやくわかった。つぶやかざるをえない。様々なものが頭からあふれ出てくる。

☆

一週間が過ぎた。

昼休み、田尻は意を決して席から立ち上がった。結局一学期の間席替えをしていないので中村は隣席のままだ。

「ねえ、中村」

中村は相変わらず昔のゲーム雑誌を読んでいた。今見ているページにも、やはり見覚えのあるゲームが載っている。中村は誌面から顔を上げた。

「なんだ？」

中村の表情は読み取れない。怒っているようには見えないが、喜んでもいない。無理に読み取るうとするなら、そこには「無関心」があるように見える。

田尻は言葉を絞り出した。

「ちよっと、見てもらいたいものあるんだけど、放課後いいかな」

「ああ」

中村はこともなげに答えた。

「中村は気にくわないかもしれないんだけど、どうしても……」

「いや」中村はその言葉を途中で遮った。「そういうことは、見てから考える。余計な解説はいらない」

田尻は言葉を続けられなかった。

☆

放課後の視聴覚教室に二人で入ったのは久しぶりだった。

様子を眺めようとする横井を無理矢理職員室に返して、田尻はいつも通りNetBeansを立ち上げた。深呼吸をしてからプログラム実行をするF5のキーをゆっくり押す。

ちよっとの間を置いてタイトル画面が出た。タイトルにはインターネット経由で検索した画像を元に見栄えのするグラフィックを使っている。中村は眉をひそめた。

「あのね、結局、僕に出来るのはこれくらいだったんだ」

田尻は中村の顔を見ることが出来ずに語る。

「ちよっと、遊んでみてよ」

田尻は中村に席を譲った。中村はパソコンの前の椅子に座ると、慣れた様子でキーボードのホームポジション——左手の人差し指をF、右手の人差し指をGに置いた。

「操作は？」

やろうぜ！

「Zキーで弾、Xキーで爆弾。爆弾は画面中の弾を消すの。移動はカーソルキーでやって」
使ったスタートのためのキー。期待通りに画面が変わる。

ゲームが始まった。前作に比べると圧倒的にぎこちない動きだが、田尻にはこれが限界だった。中村は徐々に操作をしながらゲームを進めていく。借り物のグラフィックがたくさん現れ消える。中村が得意としていたエフェクトなどは結局一つも入っていない。田尻にはエフェクトのプログラムの意味がそもそも理解できなかった。

中村は何度かゲームオーバーになりながらゲームの内容に踏みいつていった。田尻が期待した動き、期待してもいなかった動き、残っている明らかなバグなど、一挙一動にどきどきする。

「ちよつとソースいいか？」

中村がカーソルキーから指を離して田尻の方を見た。田尻は言葉を発することも出来ずに首を縦に何度も大きく振った。

「酷いソースだな」

中村はNetBeansに映されたソースを一瞥しては口の端をゆがめて苦笑した。あわてて田尻が答える。

「ごめん。ほんとは中村のプログラムあんまり壊したくなかったんだけど。僕にはどうしてもうまくできなくて」

中村は田尻の言い訳をほとんど聞かずにソースを見ながら何事かぶつぶつぶやき始めた。田尻にはプログラムの読みづらさを呪っているようにも、自分の心をまとめているよ

うにも聞こえる。そもそも、田尻にはつぶやく理由が今ならわかる。

「そうか。なるほど」

中村がつぶやくのをやめてはつきりと言った。

「ここ、変えていいか？」

「もう、どんどん変えちゃって」

中村は傍らの鞆からレポート用紙と鉛筆を取り出した。数式の中身を一端紙に書き写してからしばらく計算してソースを書き換える。ゲームを立ち上げると明らかにキャラクターの動作が変わる。

「本当はこうしたいんだな？」

「そう！」 田尻にはそれまで書き割りだった画面上のキャラクターが命を持ったかのように感じた。「どうしてそれが判るの!？」

「判るさ」

中村は田尻の顔を見た。怒っているようには見えない。

「これは、田尻は楽しいか？」

「当たり前だよ！」 田尻は叫んだ。「ゲームってさ、ゲームの見かけしてるからゲームじゃないんだよ。ゲームはゲームだから楽しいんだよ」

中村は久しぶりの田尻の熱弁を見上げる。田尻はすでに椅子から立ち上がっている。

「シューティングってもっと幼稚なものかと思ってたんだけど、そうじゃないってやっとなったんだよ。適当に作れば楽しくなるんじゃないかって、楽しいものを作れば楽しいんだって」

やろうぜ！

ほぼ何も言っていないことに気づいて慌てて口ごもる。頭をかきながら再び椅子に座る。中村の前のパソコンには修正したあとの動きのままゲームが継続していた。

「でもね、もつというとはんとはそうじゃなくて……」

「ちよつと待て」中村は数式を書いていたレポート用紙をめくった。罫線だけのレポート用紙の最上部に鉛筆をあてがう。「一つじゃないんだろ？」

「うん。そう。あの、実はね……」

田尻は様々なものが口から、身振りからあふれていくのを感じた。

☆

「結局解散しなかったんだな」

翌日、先に視聴覚教室に来た田尻にかけた声の主は誰だかすぐに判った。

「はい。活動は続けます」

田尻は立ち上がって、扉の元に経っている中山にはつきりと答えた。

「今は掃除に行ってますが、すぐもう一人来ると思います。幽霊会員ではないですから」

「そうか」

中山はパソコンの画面を見た。直前までやっていたゲーム本体の画面が映されたままになっっている。

「それはどうするんだ？」

「ゲーム、ですか？」

「ああ」中山はウィンドウを凝視した。老眼で見づらいのかもしれない。「作品だ」

「これは、作り直します。二人で完成をイメージするために作ったもので、このまま

では売れません」

「売るのがか」

「はい」田尻は答えてしまっただけから後悔した。厳格な中山のことだから活動を否定する可能性すらある。「あの、でもですね、儲けようとかそういうわけではなくて……」

「制作予算はどうなってる？」

「え？」

田尻は予想外の質問にとっさに答えられなかった。

「売るのがならメディアが必要だろう。場所を借りるのにも資金がいるはずだ」

「あ、それはですね」田尻は混乱しながら答える。「即売会に出すんですが、即売会に出るお金は学校からは出せないのです、僕と中村で手分けして、CDはうちにあつたのを使つて……」

「予算を管理しろ」

中山はきつぱりと言った。

「活動を手弁当でやるのでも予算は管理しろ。責任が出来る」

「あ、はい」

手弁当の言葉の意味がわからない。即売会ではパンを買って食べた気がする。

「おまえ達は社会に触れているんだ。もう甘えは許されない」

「は、はあ」

「判ったな」

それだけ言うと中山は答えを待たずに帰って行った。ちょうど入れ違いに中村が入って

やろうぜ！

くる。

「どうしたんだ、中山先生」

「わかんない」

田尻は敵つい顔を思い出した。何か言われたような気もするが、何を言われたのかよくわからない。

☆

「ゲーム側のインフォメーションを派手にしようよ」

「そうだな……どこまでやっても大丈夫かちよつとテストしよう」

「画面にこう、ばばーんと出たらしいじゃん。『呐喊！』とか」

「なんか、変な漢字に限って知ってるな、田尻」

☆

「グラフィック欲しいな」

「そうそう、横井先生に描いてもらえないかな。凄いんだよ、先生」

「ほう？」

「あら、どうしたの？ 二人で悩んじゃって」

「こう、この間みたいに絵描いてくれませんか」

「ダメ。ゼツタイ」

☆

「綺麗だね、この弾幕」

「ああ。これはサイクロイドだな。出来ればカオティックに行きたいんだけど、なかなか

うまく縁に載らなくて……」

「中村、宇宙語喋ってるよ！」

☆

「うん、これならいける！」

田尻は口の端に笑みを浮かべながら敵の猛攻をくぐり抜けていた。ゲーム後半のデバツグはもう中村には手が出せない。

しばらく一進一退の攻防が続く。そして勝利。画面には大きな爆発と小さな煙が所狭しと並んだ上で特殊な形を作り上げる。

画面が一端黒に落ち着いたあと、狙い澄ましたタイミングでフリー素材を元に加工したエンディングのグラフィックが流れた。

「よし！ こうじゃなくちゃ！」

田尻は自分で調整したタイミング通りの効果にほくそ笑んだ。中村はキーボードに置いた手を休めて田尻の姿を見ていた。

「いいな、このゲーム」

中村は二人だけしか出てこないスタッフロールを眺めながらつぶやく。

「うん、凄いいよね。ゲームって、楽しいよね」

フリー素材だらけのエンディングは実際に作った部分はほとんど無い。ゲーム本体のルールやプログラムに比べると手のかかっている部分も少ない。なのに二人はその画面と音楽に感動していた。

音楽が最後までたどり着いた。ウインドウの中には「The End」の文字が出ている。

やろうぜ！

「今度こそ勝てるな！」

「勝てる……かもしれないが」中村はウィンドウから目が離せない。「もう、ここまで来たら売り上げなんかどうでもいい気がする」

「何言ってるんだよ！」

中村は握り拳で力説した。

「お金じゃなくて本数！ 一人しかやってくれないんじゃこのゲーム、余りにもったいないだろ！」

「ああ」中村は田尻を見た。「そうだな。うん。そうだ。もったいない」

「横井先生もいってたじゃん、努力、友情、そして勝利って！」

「……そうだったか？」

☆

暗くなつた職員室。横井の机には書きかけのプリントとともに、半裸の少年二人が軽く抱き合っているイラストが乗っていた。

片方は眼鏡、片方はハチマキ。

二人は見つめ合っている。



NONSTOP



From · N

番棚葵

Illustration: 伊藤由希

あらすじ

自分が住む町・N市を好かない隆也は、ある日来夢に相談を持ちかけられる。それはN市の名物を考えて欲しいというものだ。気が乗らない隆也をよそに、名物作成はいつしかラーメン屋との競争にまで発展する。何とか名物ラーメンを作り勝利する二人だが、役所には名物として認めてもらえなかった。

谷川来夢



地元をこよなく愛する少女。隆也の幼なじみ。元気はいいが、思慮は浅い。

新井隆也



地元嫌気がさしている少年。進学校に通っている。意外と流されやすい。

第二話 小さな恋のシユライン

自分がいるこの場所は、今のところ何の変化も示さない。ただ静かにゆっくりと、ぬるま湯のような時間が過ぎていく。

少年はそのことに辟易とし、そして少女は――

「燃えるような恋をしよう！」

「お前はいきなり何を言ってるんだ？」

学校から帰ってくるなり、突然部屋に飛び込んできて――制服姿だ――そんなことをのたまう幼なじみを見やり、新井隆也は慥然とつぶやいた。

一見クールに装っているが、実は内心ドキドキしている。前述のセリフを放ってきたのは、年頃の娘だからである。女の子に「恋をしよう」と言われて落ち着いていられる、男子高校生は少ない。

その幼なじみの娘、ショートカットに小柄な体型と若干お子様風味の外見を持つ谷川来夢は、その容姿に似合うくりくりとした大きな目を、上目遣いがちに隆也に向けると、

「……というフリーズを考えたんだけど、どうかな？」

「フリーズかよ」

隆也は安堵して、椅子の背もたれに身体を預けた。勉強の途中だったのか、机には参考書やノートが広げられている。部屋の中は理路整然と片付けられていて、几帳面な彼の性格がうかがわれた。

隆也は一息ついてから、少しずれた眼鏡を押し上げると、

「古いだろう」

ダメ出しをする。

「ええー」

「そもそも、何のフリーズなんだよ？ また名物作りとか言うんじゃないだろうな」

「うん」

隆也の期待をうらぎるように、あっさりと来夢はうなずいた。とびきりの笑顔で言葉を続ける。

「今度こそ、N市に人を呼べるような名物を見つけたんだよ！ これなら集客間違いなしなんだよ！ でも、そのためのアイデアが足りなくて……隆くん、手伝って？」

「またか……」

隆也はうんざりとした表情で、つぶやいた。

彼らが住む町、N市は小さな地方都市である。海と山に囲まれ、住宅のほとんどは畑と同居。市内にある駅はJRのローカル線で特急が止まらない（通勤特急はかろうじて止まる）ことから、その規模たるや推して知るべしである。

隆也としては、この住みにくい故郷にあまり愛着が持てず、いつかは上京するなり何なりして町を出て行くのが夢だった。私立の進学校に入って勉強しているのも、そのためだ。しかし、お隣さんにして幼なじみの来夢は、N市をこよなく愛していた。それが高じてか、前回、隆也に名物作りを依頼してきたのである。結局失敗に終わったが。

「お前、前のラーメンで懲りてなかったのかよ」

「失敗は成功のもとだよ。人生、ポジティブに生きなきゃ」

「俺はネガティブでも構わない。ともかく、お断りだ」

そう言つて、隆也は勉強机に向き直った。参考書を広げようとする。その手を、しつかと来夢が押さえた。

「お願い、隆くん。手伝つてよ」

「ダメだ。前は流されたが、今回はそうはいかないぞ。俺は名物作りになんて興味ないんだからな」

「でも、隆くんがいると心強いんだよ。隆くん頭いいんだしさ」

ゆっさ、ゆっさ、とゆさぶってくる。子供みたいな挙動で鬱陶しいはずなのだが、なぜか隆也にとつて心地いい。いかんいかん、と頭を振り、

「ひ、一人でやつてる。俺は、絶対に、手伝わないからな」

「ふえん、そんなあ」

「泣きそうな声出しても、ダメだつて……」

「そこをなんとか」

そして十数分後。

「……今回だけだからな」

「わあい、隆くん大好き！」

心から嬉しそうな来夢の声に。前と同じく流されたことを恥じながら、どこか安堵している自分に気づく隆也であった。

前回は名物を一から作って欲しいという、来夢の無茶振りからスタートしたが、今回はあらかじめ目をつけているものがあるのだという。

「それが、ここだよ」

「ここってお前、戸川神社じゃないか」

案内された場所を見て、隆也は驚いた声を出した。

戸川神社とは、隆也たちの住む住宅街近くにある神社の一つで、お世辞にも大きいとは言えない。祭神は稚産靈命^{わかむすひのみこと}。主に作物の収穫や、子孫繁栄などに御利益がある神だと、隆也は記憶している。

正月はそれなりに詣で客でにぎわうが、それ以外にはあまり人も立ち寄らない。祭も年に一回か二回行われるくらいの、さびれた神社であった。

「これのどこが、名物になるんだよ？」

そうつぶやいて、小学校のグラウンドの半分程度の境内を見回す隆也。ざっと見た感じでは、賽銭箱が置いてある本殿、お守りなどの授与所を兼ねた小さな社務所、絵馬を奉納する絵馬掛、手水場、そして背後には先ほどこぐってきた鳥居と、ごく普通の神社の造りになっている。

掃除は行き届いているのか、ゴミは落ちていない。そこには感心するが、いかんせん、全体的に寂寥としたオーラが漂いすぎだ。今は夕方でも初夏なので日は高い。なのに、境内はどこか灰色の影に覆われ、音もないために鳥の鳴く声はつきりと聞こえる。

まあ、行事がない日は、どこの神社もこのようなものかもしれないが。これではN市どころか、戸川神社そのものに客が集まることはないだろう。

「八坂さんとか、太宰府とかならわかるけど、こんな小さな神社じゃ話にならないんじゃないのか？」

ところが来夢は自信満々に、指を振ってみせた。

「それが、いい情報を手に入れたんだよ。この神主の娘さんが、小学生の時に私達と同じクラスの子だったの。名前は設楽華乃って言うんだけど」

「ああ、そんな奴いたな。神社の娘だったのか」

確か小学五年生の時に、クラスの隅でひっそりとしているような女の子がいたと、隆也は思い出した。その子の名字が設楽だったのは覚えている。

ふと、来夢がこちらを、じつ、と見てきているのに気づいた。

「隆くんって、小学校の時クラスメートにはあまり関心なさそうだったのに、華乃ちゃんのこととは覚えてるんだ……ひよつとして、初恋だったとか？」

突拍子もないことを言われて、隆也は咳き込みそうになる。

「そんなわけないだろ。何かそいつの影が薄すぎて、かえって記憶に残ってるんだよ」

「あ、そう。それならいいんだけど。実は華乃ちゃんって美人だからねえ」

「美人って、俺がそんな言葉に釣られるとでも……って、え？」

隆也はふと首を傾げた。来夢の「それならいい」に引つかかったのである。どういと言うのだろうか。

しかし彼にそれを考える暇はなかった。来夢が急に歩き出したからである。授与所の方に向かって。

「隆くん、こっちだよ」

「ああもう」

相も変わらず笑顔を浮かべている来夢に、やっぱりこいつの考えていることはわからないな、と思いつつ、隆也は続いた。

来夢は授与所に近づくと、その窓を、コンコン、とノックする。

がらつ、と開けて、中から黒髪をたばね、眼鏡をかけた少女が姿を現した。

「ご用でしょうか……あ、来夢ちゃん」

「華乃ちゃん、こんにちわ。お昼の話の続きに来たよ。それから、こっちは隆くん……新井隆也くん。小学校の時、一緒のクラスだったの覚えてない？」

「えつと……あ、ええ。覚えてます……？」

その言葉のニュアンスは、どう聞いても「忘れてます」なのだが、しかし隆也は気にしなかった。それよりも、華乃の格好に目を奪われていたのである。

「巫女？」

指をさされて華乃はとまどったが、やがて自分の着ている紅白の着物のことを言っているのだとわかると、少し内気な愛想笑いを浮かべて言った。

「ええ、神社の娘なので」

ああ、そうか。と、隆也は妙に納得した。

来夢の話によれば、彼女と華乃は小学校の頃から、中学、高校と同じで、何回か同じくラスになったことがある。つまり、隆也と同じく幼なじみなのだという。

ただし、隆也は華乃とさほど面識がない。小学校の時の一回だけだ。当時は男子は女子とあまり親しく話さなかったし、中学、高校は、来夢と華乃は公立だ。中等部から進学校に入学している隆也には、華乃との接点がなかった。

(まあ、本当に地味だったしな、こいつ)

社務所にて。中に通された隆也は、華乃の方を見つめながらそんなことを考えた。今でもその地味さには変わりないように見える彼女だが、なるほど、来夢の言った通り素材はなかなかのものである。

目は細くて大人びていて、すつと通った鼻梁と引き締まった口元、そしてすつきりとした顔つきと、全体的に大人びた印象を受けた。スタイルも悪くない。巫女衣装の上からでも、それはわかる。あとは髪型と眼鏡さえいじれば、モデルの仕事もできそうだった。

そこまで考えて、今回の目的は華乃の寸評ではなかったことをやっと思いつく。

隆也は来夢に町おこしの名物について聞こうとしたが、華乃が口を開くのが早かった。「それで来夢ちゃん、本当なの？ この神社を名物にするって」

「うん。だって、縁結びの伝説があるんでしょう？ きつと注目が集まるよ」

「縁結びの伝説？」

隆也が目丸くした。約十五年この町に住んでいるが、そんな伝承は聞いたことがない。

それが伝わったのか、華乃は苦笑すると、

「伝説なんて、来夢ちゃんがオーバーに言ってるだけです。実際はこの神社で絵馬に恋愛成就の願いを書くと、それがよく効くという言い伝えがあるだけで。昭和の中期くらいまでは、ここで絵馬を書く女性も多かったらしいですけど」

「ふうん。それにしちゃ、今は全然そういう話を聞かないけどな」

「絵馬に願いたい事なんて、今日び誰もしないでしょう。私が生まれた頃にはすでに、そういうことをする人はいなくなりました。私も、最近になっておじいちゃんからその話を聞くまでは、知らなかったくらいですから」

そしてその話を、偶然高校で同じクラスになった来夢にしたところ、彼女は目を輝かせたのだという。

「恋愛成就に効く絵馬ってレトロで、逆にロマンがあると思わない？ 今はそういうのテレビとかでも注目されてるし、ひよっとしたら名物になるかもって思ったんだよ」

「けど、言っちゃ悪いけどこんな小さな神社だぜ？ 注目が集まるか？」

「小さいからこそ、かえって信憑性があると思うんだよ。これが大々的に宣伝しているような大きい神社だと、何か嘘くさいし」

一理あるな、と隆也は思った。来夢にしては、結構頭を使っている。

大体、恋愛というものは、まだ隆也には理解し難いが、小説・映画・テレビドラマ・演劇……etc、あらゆるジャンルで必ずといっていいほど取り上げられる題材だ。それほど人間の人生に、密接的に関わっていると言える。

だからうまくすれば、この神社も脚光を浴びて、若者達の恋愛祈願の聖地となるだろう。

ただし、あくまで「うまくすれば」の話だが。

「で、具体的にどうやるんだよ」

「え？」

「この神社の絵馬が恋愛成就に効くっていう情報、どうやって広めて、さらに信じさせるんだ？　そもそもこの町の中ですら、知っている人は少なそうなのに」

「うっ、それは……隆くんが何か知恵を貸してくれるかなあ、って」

「やっぱりか」

まあ、何となくそんな予感はしていたが。隆也は息を吐くと、頭をぼりぼりとかいた。そもそも気乗りしない上に、昔の迷信——九分九厘そうだろう——を現代の人間に信じさせる策を思いつけなんて、無茶振りにもほどがある。

（さてと、どうやって来夢を諦めさせるかな）

彼がそう考え始めた時、華乃が横から口を挟んだ。

「あの、来夢ちゃん。別にここを名物にしなくても、いいんじゃないかな」

「えっ？」

「だってほら、新井君が言った通り小さいし、それに寂れてるし。今から名物的な神社にするのは、難しいと思うんだけど。他の神社にした方が……」

おずおずと、提案する彼女に、しかし来夢は小さな胸を張って答えた。

「大丈夫だよ、華乃ちゃん。隆くんは頭いいから、きつと名案を思いついてくれるよ」

「……他人任せかよ」

「それに、私はこの神社が好きだもん。絶対に有名にしてみせるから、期待していて、ね？」

「う、うん」

張り切る来夢に、華乃はうなずいた。自信なさげな表情で。

○

翌日。学校から帰ってきた来夢は、さっそく隆也の部屋に訪れた。ちなみに田舎町なので、勝手に家に入っても怒られない——というほどでもないのだが、来夢は小さい頃から馴染みなので、新井家への自由な出入りが許されている。

「さあ、早速作戦会議だよ」

「そうは言ってもなあ」

大張り切りで拳を突き出す来夢を、隆也は疲れたように見た。昨日から一応、戸川神社のことを広める手段を考えてみたが、あまり名案が浮かんでこない。

そもそもマイナーすぎるのだ。この町内には神社がもう二つほどあり、普通の人間は祭事の際、そのどちらかを利用するのが常套だった。戸川神社の存在そのものが、知られていないのである。両親にもそれとなく相談してみたが、二人とも同じ意見だった。

「そういうわけでだな、どうせなら違う方の神社を宣伝するのが早いと思うぞ」

と言ってみたが、来夢は頑固であった。

「ダメだよ、それじゃ。私はあの戸川神社の方が好きだもん」

「お前の好みかよ」

つぶやいてみたが、そもそも発端はN市を愛する来夢のわがままである。ある意味筋が

通った意見と言えなくもない。それに、自分も地元を毛嫌いして、いずれ出ていこうとしているのだから、人のことは言えなかった。

代わりに、昨日から気になっていたことを尋ねてみる。

「どうしてお前、そこまで戸川神社にこだわるんだ？」

「だって、小さい頃からうちはおそこで初詣したり、七五三したり、お父さんの厄除けもしてもらったんだよ。愛着があるんだよ。それに」

ここが肝心とばかりに、言葉に力をこめる。

「友達の家の神社だもん。応援したくもなるよ。私本当はね、名物を考える始める前から、あそこがもつと有名になつたらいいのについて思ってたんだ」

「……なるほどね」

その気持ちはわからなくもなかったので、隆也はうなずいた。そう、友達というものは無条件で応援したくなるのである。ちょうど自分が今、そうしているように。

「しかしなあ、あの神社をアピールするのはかなり骨が折れそうだよ。まずは地元の人間に浸透させる方法から考えないと。それと、恋愛の祈願に最適だつていう証拠も必要だな。俺達が口で言つたところで、信じてもらえる可能性は低そうだよ」

「うーん」

「誰か実際に、恋愛祈願成就しました、つていう人がいれば別だけどな。昭和中期までだつて言つてたし、そんな人はもう結構な年齢だろう。この町にいるかどうかわからない上に、いたところで昔話を語ってるんじゃないよなあ」

あまりにもマイナスポイントを挙げすぎたせいでだろうか、来夢は「むむむ」とうなつて

黙り込んでしまった。

さすがに、何かフォローを入れた方がいいかな。隆也はそう考えて、頭をひねってみたものの何も出てこない。本当に、あの神社を有名にするのは難しいのだ。

「せめて、俺達と同世代くらいで、あそこで縁結びに成功しましたっていう実績を持つ人間がいればな」

そうつぶやいた瞬間。

来夢は「あ、そうか」とつぶやいて顔を上げた。隆也の手を握ると、

「隆くん、賢い。それだよそれ」

「なんだ、そういう人間に心当たりでもあるのか？」

「ううん。でも、いい方法を思いついたの」

そう言つて無邪気に笑う来夢に。なぜか、隆也は不吉なものを感じるのであった。

妙な噂が立ち始めたのは、それから三日ほど経つてからであった。

最初は何かの間違いかと思った。そういう邪推をされたことは、過去に何回かある。しかしその大半は、面白半分に隆也をからかうためのもので、当人もあまり真剣に言っているふうではなかった。

しかし——来夢の家とは逆方向の隣家に、回覧板を回しに行った時、隆也ははつきとその家の奥さんに聞かれた。年齢は四十を過ぎたくらい、少し横に大きい婦人である。

「ちよつと隆也君。噂に聞いたけど、本当？」

「何がですか？」

「隣の来夢ちゃんとき合ってるって！ 本人から聞いたわよ。隅に置けないわねえ」

やだもう、と片手を頬にあてがう奥方に、隆也は回覧板を無言で押しつけると、そのまま逆隣の家へと猛ダツシユした。

呼び鈴を連打して、返事を待つのももどかしくインターフォンに叫ぶ。

「こらあつ、来夢っ！ 出てこいやあつ！」

「あ、いらつしやい、隆くん」

扉を開け、悪びれもせず笑顔を見せる来夢の肩をつかむと、そのまま玄関へと押し込む。できるだけ顔にすこみを効かせて、言葉を放った。

「お前、どういうことだ。俺とお前がつき合ってるってデマ流して。どうも最近、ご近所からひそひそとした声と、妙に優しい視線を感じると思ったら！」

「待って、隆くん、落ち着いて」

がくがくと揺さぶられながら、慌てて来夢が何か弁解しようとしている。それで自分が思っていたより興奮していたことに気づき、隆也は手の動きを止めた。

来夢は、ほっ、と一息をつくと、少し申し訳なさそうな表情を作った。

「いやあのね、あれのためなんだよ。戸川神社の縁結びの絵馬」

「その絵馬と、俺達がつき合っているという嘘に何の関係があるんだ？」

「ほら、隆くんも言っていたじゃない。実績があれば、アピールできるって。だから私が隆くんに告白に成功したことにして、それをあの絵馬のおかげだって吹聴したの。近所のおばさんに言えば、小さな町だからすぐに噂は広まるんじゃないかって」

「ああ、なるほど……って、そんなことで納得できるかあつ！」

隆也は頭に血を上らせ、再び来夢の肩をつかんだ。

「大体なんだ！ どうして当事者である俺に何の断りもないんだよ！ 勝手にそういう嘘をつくな、馬鹿！」

「だ、だって、絶対に隆くん承諾してくれないって思ったし」
「当たり前だろっ！」

叫びながら、本当に自分が却下するかどうか自信が持てない隆也ではあった。形はどうあれ、彼女がいるということは一種のステータスになるし。

（いやいや待って待って、相手は来夢だぞ。そんなの絶対にありえないって）

慌てて自分に言い聞かせてから、ふと、問題が何も解決していないことに気づく。

「とにかくだな。今からでも遅くない、あれは全部嘘だったって釈明を……」
「ダメ！」

思ったよりも強く来夢が反対したので、隆也は驚いた。いつものふんわりした表情は一転、どこか思い詰めたような顔をしている。

かと思えば、すぐに我に返ったらしく、頭をかきながら言葉を続けた。

「ほ、ほら。アピールするために嘘を流したって言っちゃったら、戸川神社の評判が逆に落ちちゃうし。お願い、隆くん。ここは話を合わせて。ちゃんと後で別れたことにしてもいいから！」

「そ、そうは言ってもだな」

強く反対するつもりだったが、意志に反して隆也の声は勢い弱いものとなった。瞳をうるませている来夢を見ると、何も言えなくなる。なぜだろう、このままでもいいよう

な気がしてきた。

（ま、まあ、こいつも友達のために頑張っているわけだしな。俺が彼氏なんて、本意じゃあるまいし）

立場はお互い様だ。そう割り切ることにした。

「……しようがない。その代わり神社を名物にする計画が終わったら、噂をまいた人には真相を明かして、こつそりと謝ること。わかったな」

「うん、ありがとう！」

心底から嬉しそうに、来夢はうなずいた。

○

思ったよりも、隆也に被害は出なかった。

狭い地域である。誰と誰がくっついたらしい、など、ゴシップ話は日常茶飯事なのだ。隆也と来夢は小さい頃から仲がいいわけだし、二人がくっついたところで誰も騒ぎ立てたりはしなかった。高校も違うから、クラスメートがからかってくることもない。

小さい頃から彼らを知っている友人が、ごくたまに確認に来て「ふうん」とつぶやく。その程度の噂にしかならなかったのだ。

しかし、噂についている尾びれに関しては、その目新しさから皆の注目を集めていた。すなわち、戸川神社の縁結びの絵馬についての話である。

絵馬の効力は、最初は眉唾程度に噂されていたのだが、次第にその絵馬を知っている人

間——すなわち古い世代の人間が証言するようになり、その噂は信憑性を帯び、少なくとも色恋沙汰に悩む若者の間では、まことしやかにこう囁かれるようになった。

「戸川神社の絵馬は、本当に効くらしい」

来夢の作戦は、功を奏したのである。若い人間のうちの何人かは、実際に絵馬を奉納するようになるまで至った。

そして、噂を流してから大体二週間後。

「どう、華乃ちゃん？」

「ああ、来夢ちゃん」

夕方、来夢と隆也は戸川神社の社務所に訪れていた。目的はもちろん、神社の現状を知るためである。

来夢は上機嫌で笑いながら、授与所の窓ごしに今までの作戦、すなわち噂について華乃に説明した。そして得意そうに尋ねる。

「どうかな。参拝客、少しは増えた？」

華乃もつられたように笑うと、「うん」と答えた。

「絵馬を奉納しに来る人が、ぐんと増えたよ。昔と比べると、奇跡みたい」

「そう、それはよかった！」

そして来夢は、隆也の顔を見て得意そうに笑った。これは認めるしかないなど、隆也も微笑笑を浮かべてうなづく。

と、そこに華乃が横やりを入れてきた。

「でも来夢ちゃん、ちょっと焦ったよ」

「え、何が？」

「来夢ちゃんの絵馬を見に来ようとするとする人が多くて。どこですか、って聞かれて。そんなものあるわけないから、その都度ごまかしてただけで、そのうちごまかしきれなくなつて。仕方ないから私が作ったんだよ」

社務所から出てきて、華乃は絵馬掛の端を指した。確かにそこに、来夢のものとは思えないほど達筆な文字で「新井隆也くんに告白できますように」と書かれている。

「お」

隆也はその場でしゃがみこみたい衝動に駆られた。まさか、こんなところで自分の名前が衆目にさらされる羽目になるとは。恥ずかしいにもほどがある。

「くそ、どう責任をとってくれるんだ……来夢？」

来夢はしゃがみこんでいた。顔を覆つて、耳まで真っ赤にしながら。

「何やってるんだ、お前？」

「何って、だって、その、こんなの見せられるなんて……予想外で」

いつもの快活な彼女にふさわしくなくらい、しおらしい声でつぶやいた。理由は不明だが、その仕草が可愛らしかったので、隆也は思わず息を飲み込んでしまう。

そんな二人をほほえましそうに華乃は見ていたが、やがて思い出したように尋ねてきた。

「ところで、あの、来夢ちゃん」

「はい？」

「この神社、本当に名物にするつもり？」

「うん、そうだけど」

その言葉に、隆也もうなずいた。彼自身としてはあまり乗り気ではなかったが、ここま
で恥ずかしい思いをした以上は、何がなんでも目的を達成したい。

華乃は「そう」と答えたきりだった。あまり実感がわいていないのかもしれない。そん
な彼女を励ますように、来夢が手を握る。

「名物になつて参拝客がいつぱい来たら、ここもつと賑やかになるよ。他の神社にも負
けないくらいになるんだから。楽しみにしていね」

「うん。ありがとう、来夢ちゃん」

そう言つて、やつと華乃も笑つた。

(うん……?)

その笑みにどこか違和感を感じて、隆也は眉をひそめた。

それからしばらくは、戸川神社もある程度参拝客が来るようになっていた。が、事態は
来夢の思う通りには動かなかつたようだ。

少し経つたある日の夕方、彼女は隆也の家に飛び込んできたのである。

「大変だよ、隆くん！」

「どうしたんだ？」

勉強の息抜きに小説を読んでいた隆也は、来夢の顔を見て少し呆然とした。血相が変わつ
ている。息が切れたのは、よほど慌てたからだろうか。

彼女は自分の後ろに指をさすと——方角ではなく、外と言いたいのだろう——叫ぶ。

「さつき、近所のおばさんから聞いたんだけど、私達は別につき合っていないって噂が流れているみたい！」

「え？」

それはいつたい、どういうことだ。隆也は内心首を傾げた。どうしてそんな噂が流れたのだろうか。いや、内容は事実なのだから、自分達が流した嘘が否定されるようになった、と言った方が正しいのか。

そして、すぐに問題に思い当たった。自分と来夢が恋愛関係になっていないと明言されれば、戸川神社の絵馬も嘘っぱちということになる。神社としては、これはまずいことになるのだろうか。

そんな時である。玄関の呼び鈴が鳴った。リビングに降りて隆也が応対してみると、鈴木、平野という名字が返ってきた。聞き覚えがある。

「あれ、お前ら」

ドアを開けて、不思議そうに隆也はつぶやいた。小学校六年生の時、一緒にクラスだった女の子が二人立っていた。一応ご近所さんの関係ではあるが、来夢と違って家が一キロメートルほど離れている。田舎ならではの距離だ。

「こんにちは、お久しぶり。新井君」

「来夢の家に行ったら、こっちにいろって聞いたんだけど」

「あれ、よっちゃんに平野さん」

隆也の後ろから、来夢がきよんとした声を出した。口ぶりからして、平野某嬢とはさほど親密ではないが、鈴木によっちゃんとは仲がいいらしい。

その鈴木の方が、来夢に声をかけた。

「いたいた、来夢。ちよつと聞きたいことがあつてさ」

「聞きたいこと？」

「うん。いやね、平野っちが片想いの恋にもだえ苦しんでいるのよ」

「ちよ、よつちゃん！ そんな変な言い方しないで！」

「何よ、本当のことでしょう」

そう言つて二人は互いをこづき合つた。仲が良くて結構だが、話が進まない。

「で、聞きたいことつて？」

来夢が再度尋ねると、ああそうだった、と鈴木嬢は額を叩いた。

「噂に聞いたんだけどさ、あんたらつき合つてるんでしょ？」

「え、あ、うん」

「それつて、戸川神社の絵馬のおかげつて本当？」

これは平野嬢の質問だ。どこか必死にも見える。横から鈴木女史が解説を入れた。

「もしも本当なら、平野っちにも絵馬を奨めようと思つて。でも、最近また変な噂流れてさあ、あんたら別につき合つてないつて言つてるじゃん。だったら、神社の絵馬の話も嘘つてことになるよね？」

そして、どこか鋭い目つきで二人を交互に見る。

危惧していたことが起きた、と隆也は思った。このままでは自分達の関係はともかくとして、戸川神社の絵馬が疑われてしまう。

「縁結びの絵馬なんて、正直眉唾かかつて思つたけど、あんたらがそれをきっかけにした

のなら、別に信じてみてもいいかなと思ってたのよ。だから事実関係ははっきりしておきたいわけ。正直な話どう？ 本当につき合ってるの？」

「と、当然だよ」

「本当に？」

「えーっと、その」

来夢は根が正直なので、そろそろぼろが出ようとしている。もう、後はこいつに押しつけて自分は引っ込もうか。隆也がそんな薄情なことを考えた、その時。

「もしつき合ってるなら、証拠にキスしてみせてよ」

「え？」

「それくらいできるでしょう。恋人同士ならさ」

「で、できるよ！」

「おい！」

敢然と言い放った来夢に、隆也はツツコミを入れそうになった。しかし彼女はこちらを向いてくると、

「隆くん、やろう」

「や、やるって、なにを」

「だから、その……キス」

恥ずかしそうに言ってから、数秒間の躊躇を経て。来夢は思い切ったように、すっ、と目を閉じた。おお、と外野から感嘆の声が漏れた気がするが、隆也にすれば嫌な汗が出る光景でしかない。

彼は考えた。ここで芝居をしなければ、嘘は完全に暴露され、戸川神社には参拝客は来なくなるだろう。ということは、選択肢は一つしかないのだ。つまり、このまま来夢とキスを――

「できるかあっ！」

若い彼はそう叫ぶと、玄関ですばやく靴を履き、家から飛び出した。

「あ、ちよつと！ 隆くんっ？」

「あーあ、やっぱりねえ。なに、何かの罰ゲームだったの、二人とも？」

「結局絵馬は、関係ないのね……残念」

後ろで女性三人のそんな声が聞こえたが、彼はその時すでにある可能性を思いついていて、それどころではなかった。

（可能性もなくそも、最初からこれしかなかったと思うが）

しかし、理由がわからない。だから彼は、外に出たと同時にそこへ向かうことにした。

どこへ向かうのか？ 決まっている。

自分達がつき合っているという嘘、それを否定する噂を流した犯人のもとにである。

○

五時になっても日が落ちない。本格的な夏が近づいている証拠だろう。

気の早い蝉が鳴いている中、隆也は目的の人物の元へとたどり着いた。彼女は黙々と箒を動かし、境内の掃除をしていた。

設楽華乃である。巫女服を着た彼女は隆也に気づくと、「あら」と小首を傾げた。

「新井君、一人ですか？ 来夢ちゃんは？」

「来夢には聞かせない方がいいだろう？ そういう話をしにきたんだ」

その言葉に、華乃は顔をこわばらせた。

次の瞬間には全てを悟ったか、神妙な顔つきでつぶやく。

「……そう、新井君にはわかったんですね」

「ああ。俺と来夢がつき合っていないという噂を流したのは、お前だな。設楽」

「ええ」

華乃はか細い声で答え、小さくうなずいた。両者の間に、沈黙が降りる。蝉の声が妙に騒がしい。

こうしていても埒があかないので、隆也は言葉が続けることにした。

「俺と来夢がつき合っていないという事実を知っていたのは、俺達を除けばお前だけだった。それに、来夢が色々この神社を名物にしようとしても、微妙に嬉しそうじゃなかったし。だから、お前じゃないかなと思ったんだが……どうしても理由がわからない」

「理由？」

「だってそうだろう。この神社が賑わう方が、お前にとっても得なんじゃないか？ 人がいっぱい集まって、華やかになってさ」

「……それがイヤだったんです」

その言葉の意味を、最初隆也は理解しかねた。しばらくしてからヒントが合い、「どういうことだ？」と尋ねる。

顔を伏せて、華乃は答えた。

「私、小さい頃からこの神社の手伝いしてました。最初は静かすぎて寂しくて正直、あまり好きじゃなかった。でも、そのうちこの神社の空気がかけがえのないものに思えてきました。静かで、でも落ち着いていて、優しい感じのする……そんな空気が」

そして、微笑しながら付け加える。

「田舎のひなびた神社ってことなんですけど、私はそれが好きだったんです」

「……………」

「だから、本当は神社のことを取り上げたりして欲しくなかった。騒々しくて華やかな戸川神社なんて、想像もつかないし、そうなるのが怖かったんですよ。でもね、来夢ちゃんがあれば張り切ってるのを見ると、私のこと考えてくれてるんだなって思ってた。水を差すのは申し訳ない気がして、本当のことが言えなくて」

だが、実際に客がここに来るようになって、神社は変わりつつあった。だから華乃は、それを戻したくて、改めて噂を流したのだ。

ふと、彼女は顔を上げた。ぼんやりと、そびえ立っている桜の木を見る。

「私って、自分勝手ですね……………」

「どうして、そう思うんだ」

「だって、自分の都合で神社を独占しようとしていたんですもの。私にそんな権利はないのに。本当は神社が賑わった方が、宮司やってるお父さんも喜ぶはずですよ。けど、私はそれがイヤだった。だから、わざわざ来てくれている参拝客の人を、失望させるような噂まで流して、追い払った」

それが自分勝手になくて、何なのだろうか。言外に彼女はそう言っていた。

（まあ、確かに。参拝客の何人かも、がっかりしただろうしな。そういう事情なら、最初からそう俺達に言えばよかったんだ。気が弱くてできなかったんだらうけど）

隆也としても、そこには多少身勝手さを感じる。しかしあくまでそこだけだ。それ以外の部分に関して、彼は正直な感想を述べた。

「それでも俺は、設楽は偉いと思うけどな」

「え？」

華乃がきよとんとこちらを見てくる。隆也は肩をすくめると、

「だって、自分の育った場所のこと、ちゃんと好きになっっているんだから。わがままも、そのためだろ？ その辺、さすが来夢の友達だよ」

「……………」

「俺さ、中学から進学校に入っただろ。あれ、この地元を捨てるためなんだ」

「え……そうなんですか？」

「ああ。静かで寂しいこの田舎のひなびた町が、俺は大嫌いなんだよ」

自分の言葉に、少し複雑そうな笑みを浮かべる。

「だけどお前は、自分の住むこの神社のこと好きになれたんだろ。だから全部が許されるってわけじゃないかもしれないが、少なくとも単純に逃げだそうしている俺よりはマシだ。そこは自信持っていれば」

これは心からの言葉だった。この時隆也は、華乃を羨ましいと思っていたのだ。

最初は嫌っていた場所を、好きになることができた華乃を。自分には、たぶんできない。

「そう、でしょうか」

「そうそう。大体今回のことは、俺達が勝手に詐欺まがいに行ろうとしたことなんだから、実質的にはそっちが被害者だ。怒ってもいいくらいだよ」

茶化すように言うのと、やっと華乃は笑った。ごくかすかだが、確かに。

と、その表情が一転。また暗くなる。忙しい奴だな、と隆也が思う前で、彼女はため息と共に言葉を吐きだした。

「でも、来夢ちゃんには何て言えばいいか……私、あの子の好意を無駄にしちゃって」

「そのまま言えよ」

「え？」

「自分の気持ちをそのまま言えば十分だ。何なら隠していてもいいが、これ以上神社を目立たせたくないなら、言っておいた方がいい」

あいつ、意外としつこいからな。隆也はぶつぶつとつぶやいた。

華乃は目を瞬かせる。

「だ、だけど。来夢ちゃん、あれだけ名物を作るって張り切ってたのに。それを、そんな、私のわがままなんかで……」

「確かにあいつ、妙に町おこしにこだわってるよな。俺だって、幼なじみってだけで巻き込まれて、振り回されてるんだし」

うんうん、と隆也はうなずくと、自信を持って言い切った。

「だけど、あいつなら大丈夫だ」

「え、華乃ちゃん、神社が名物になるのイヤだったのっ？」

「う、うん」

驚く来夢の前で、華乃は申し訳なさそうにうなだれた。

隆也に諭された彼女はその足で、新井家で留守番をしている来夢にすべてを告白してきたのだ。幸い、あの二人組はもう帰っていた。

「来夢ちゃん。私、勝手なことして……」

華乃が謝罪しようとする、その前に。来夢は腕を組んで、思案げに眉を寄せた。

「あー、それじゃ違う名物考えないとね」

「え？」

「華乃ちゃん、ごめんね。私、何だか迷惑かけたみたいで。もう戸川神社を名物にしようとか、考えないから」

「……いいの？ あんなに張り切ってたのに、あっさりあきらめて」

おずおずと尋ねる華乃に、来夢はにこやかに笑った。

「当然だよ。友達がイヤだって言ってるんだから、あきらめるに決まってるよ」

「あ……」

「でも、神社の応援はするよ。私、あの神社大好きだし、華乃ちゃんのことも大好きだからね」

そのまぶしい笑顔に、彼女は嬉しくて顔を伏せた。

「な、だから言っただろ？ 大丈夫だって」

一緒に歩いてきていた隆也が、隣から口を挟む。こくり、とうなずいた。そう、来夢は

友達のことを考えてくれる娘だったのだ。自分のことしか考えていなかった我が身が、少し恥ずかしくなる

(……来夢ちゃんと友達で、本当によかった)

華乃は心の底からそう思った。そして、彼女の背中を押してくれた隆也に、心の中で感謝した。

ふと、ここに来る途中、彼が言った言葉が華乃の頭に蘇る。

『設楽も来夢を大切に思っているだろうけど、来夢も設楽のことを大事に思っていて行動していたんだからな。あいつに無茶振りされて振り回されているのは、俺だけなんだ』

その時の彼は、どこか得意そうで、どこか寂しそうでもあった。

たぶん、自分は来夢に大事に思われてないな、と考えたのだろう。

少しおかしくなつて、華乃は、くすり、と笑みを漏らした。隆也の気持ちだが、何となくわかってきたのである。そして、来夢の気持ちも。

洋服のポケットから――さすがにここまで巫女服で来るわけにはいかなかった――あるものを取り出すと、

「新井くん、これ。私を助けてくれたお礼です」

「ん？」

手のひらに渡されたそれを、しげしげと隆也は見た。お守りだ。意味がわからない。

華乃は微笑を浮かべると、彼の耳元で囁いた。

「恋愛成就のお守り。少しは、御利益があると思います」

「はあ？」

「大丈夫です。来夢ちゃんは私を大事にしてくれたけど、大事にして欲しい人はちゃんと別にいるみたいだから。頑張ってください。それと……ありがとう」

そして素早く身体を離して、来夢に近づく。

「来夢ちゃん、本当にありがとう。またいつでも神社に来てね」

「うん。初詣には絶対に行くよ」

「うーん……今は初夏だから、それまでにもっと来て欲しいかな」

「あ、そうだね。じゃあ、町おこしの祈願かけに行くよ」

その言葉に、「必ず来てね」と笑顔で応え、華乃は去っていった。

彼女の顔から、先ほどまでの憂いの色は、完全に消えていた。

○

「あーあ、名物探しは振り出しに戻っちゃったなあ」

新井家の玄関先で、華乃を見送った後、ぼつり、と来夢はつぶやいた。その背中はずいぶん寂しそうに見える。友達のことを思っただけで身を引いたものの、未練は残るのだろう。

(こいつにしちゃ、頭使ってたしな)

しょうがない、労ってやるか。そう隆也が考えた時。

「さてと」

不意に来夢が、くるりと隆也を見た。にこにこしながら、彼の方へと歩み寄っていく。

「隆くん、何もらっていたの？ 見せて、見せて」

「えっ？」

「ほら、華乃ちゃんから何か手渡されてたじゃない。見せてよ」

「いや、これは」

隆也は焦った。見せられるはずがない。戸川神社を愛用している来夢のことだ、お守りを見ただけで、内容が何かぴんと来るだろう。

「ひよっとしてお菓子？」

「いや違う」

「じゃあ、見せてくれてもいいじゃない」

「そんなこと言われても……てか、『じゃあ』ってなんだ！ 別に俺は、菓子に対して異常な執着持つてる食いしん坊キャラとかじゃないだろうっ！」

叫ぶだけ叫んでから、「とにかく、夕飯時だからもう帰れ」と、手を振る。来夢は口をとがらせると、

「はあい、わかりましたよう」

いじけてみせて、隣の自分の家へと背中を向ける。と、顔だけこちらを向けて、穏やかな声で言った。

「あのね、隆くん」

「なんだ？」

「……ううん、何でもない。それじゃね」

そして玄関のドアを開けて、中へと入る。その一瞬、彼女が笑みを浮かべていたことに、隆也は気づいた。

(まさか来夢の奴、お守りのことに気づいたんじや)

そう思い当たって、少し気恥ずかしくなった。そして考える。なら、あの笑みはいつた
いどういう意味なのだろう？

いや。どうせ、また一緒に名物を考えてくれとか、そう言いたかっただけに違いない。
隆也はとりあえずそう思いこみ、自分を納得させることにしたのであった。



NONSTOP



響け、 私たちの歌声

広野未沙

Illustration: うらら

あらすじ

受験当日の事故で不本意ながら滑り止めの優華女学院に通うことになってしまった有香。学校に行くのも憂鬱なある日、クラスメイトのひかりに合唱部に誘われる。最初は断ろうと思っていた有香だけれど、外部進学を希望する菜々子の存在を知り、合唱部に入り自分の居場所を探すことを決意する。



土田菜々子
(つちだななこ)

優華女学院合唱部部長。高三。成績優秀で教師の信頼も厚い。さばさばしている。

酒井有香
(さかいゆか)

高一。受験日当日の事故により優華女学院に通うことに。平凡な家庭で育った平凡な女子高生。

友枝ひかり
(ともえだひかり)

有香のクラスメイト。純粋培養のお嬢様。誰もが認める美少女。合唱部。

第二話 ひかりの秘密

最近、ひかりの様子がおかしい。それは、有香の気のせいかもしれないけれど。

酒井有香が優華女学院高等部の合唱部に入って、二ヶ月半が過ぎようとしている。最初は戸惑うこともあったけれど、随分慣れてきたと思う。

部活のあと、有香は、合唱部に誘ってくれた友枝ひかりと駅まで一緒に帰るようになっていた。他愛もない話をしながら友人と帰るのは、楽しい。

純粹培養お嬢様のひかりと、ごくごく平凡な庶民の有香。この組み合わせは、周囲にとつて意外だったらしい。随分驚かれたものだが、最近ではこうして一緒にいるのが当たり前になっていく。

「あのね、有香ちゃん。えっと……」

いつも通りの調子で話しかけてきたひかりだが、そのあとが続かなかった。妙に歯切れが悪い。

「どうしたの？ 友枝さん」

ひかりは、思ったことはわりとすぐに口に出す方だ。そのひかりの言葉が途切れるのは珍しい。有香は話を促そうと試みる。けれど、ひかりはゆっくりと首を振った。

「ううん。そういえばさ、有香ちゃん、そろそろ合唱祭だね」

(なんか怪しい)

ひかりが本当に話したかったのは、別のことではないだろうか。そんな気がする。

ただ、ひかりの言うことは事実だったので、有香はその話題に乗った。

県の合唱協会に加盟する団体が一堂に会するという合唱祭まであと少し。合唱初心者の有香にとっては、初めてのステージだ。練習にも自然と熱が入る。

「今からすつごい緊張する」

「有香ちゃんにとって、初めてのステージだもんね」

にっこりと笑うひかりは、屈託がない。さっきのためらいが、まるで有香の気のせいだったようにすら思える。

(やっぱりあたしが考えすぎなのかなあ……)

でも、ひかりがおかしいのは先ほどばかりではない。

そう。ここ一週間くらい、ひかりはたまに不自然に話題をそらすことがあるような気がするのだ。さっきみたいに、何かを言いかけて、結局やめる。そういうくせのある子なら、何とも思わないけれど、ひかりは違う。だから、気になる。

(まあ、考えないようになしよう)

きつと、ひかりにはひかりの事情があるのだろう。少なくとも、ひかりは有香に普通に接してくれている。それに、いつもおかしいわけじゃない。

きつと、有香が考えすぎなのだ。今は合唱祭のことを考えるべき。有香は、自分にそう言い聞かせる。

* * *

(き、緊張するー！)

有香は、ぼくぼくする心臓の辺りをおさえた。だからといって、緊張がほぐれる訳じゃない。舞台袖からちらりと見える舞台に立っているのは、県庁所在地にある高校の合唱部。綺麗なハーモニーを響かせている。次は、いよいよ有香の所属する優華女学院高等部の合唱部の番だ。

今日は、いよいよ合唱祭の本番だ。

まさか、自分がこんな形で舞台に立つことがあるとは思わなかった。今年の会場であるN市のホールは、校内行事などでよく演劇などを見に来たことがあり、なじみも深い。

高校から合唱を始めた有香にとって、今日が初舞台。

そんな大げさなものじゃない。そう他の部員たちは言っていたけれど、有香にはとてもそうとは思えない。出番を控えた今、有香の緊張は極限に達している。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よ」

有香を見かねたのか、部長の土田菜々子が囁いてきた。菜々子は普段通りに落ち着いている。いや、周りを見渡せば、みんな普段と変わらず、リラックスしているように見える。「そうだよ。有香ちゃん。別にコンクールってわけじゃないんだし、気楽に行こう？」

ひかりが励ましてくれる。

「それはわかっているんだけどね」

「これはただの発表会なんだから。といっても、酒井さんは初舞台だから、緊張してもしようがないと思うわ」

そう言ったのは、顧問の相澤先生だった。三十代半ばの国語教師である相澤先生は、自らも優華女学院の卒業生で、合唱部のOBだという。

伸びやかな声と共に、力強い伴奏が聞こえる。そろそろ歌が終わるのだろう。すぐに拍手が聞こえてきた。舞台から生徒たちが去っていく足音が聞こえる。

「じゃあ、行くよ」

菜々子の表情が引き締まる。有香も覚悟を決めることにした。

「プログラムナンバー十四番。優華女学院高等部合唱部」

学生のアナウンスが聞こえる。先頭に立つ菜々子が歩き出した。有香はその後ろをついていく。

薄暗い舞台袖とは打って変わって、舞台の上は光に満ちている。参加者やその保護者で客はほぼ満員。それを意識してしまったら、さらに緊張が高まった。

部員六人が並び終わると、指揮の相澤先生がやってくる。会場に向かって一礼すると、有香たちの方を向いた。一番ピアノに近い場所にいるひかりが、ピアノで三つの音を鳴らした。有香はしっかりとその音を覚える。

いよいよだ。先生が指揮棒を持った手を挙げる。息を吸う。

最初の曲は、おぼろ月夜。有香が初めて部活を見学しに行ったときに歌った歌。ピアノ

伴奏はなく、純粹に声だけで聞かせるようになっていた。

優華女学院の合唱部ではアカペラの曲を歌うことが多い。人数が少なくて伴奏にまで手が回らないからだという。以前、外部の人間に頼んだこともあったけれど、いろいろ面倒でやめてしまったとか。

合唱にはピアノがつきものだと思っていた有香は、最初は驚いた。でも、純粹に声だけの響きもよいな、と最近では思っている。

有香は必死に自分のパートを歌う。響きがよい。そう菜々子が表現していたホールに、合唱部の歌声が響く。第二音楽室での練習のときよりも、歌声が広がっていく感じがする。気持ちいい。

ソプラノとメゾソプラノ、そしてアルト。三つのパートが重なって、会場中に響き渡る。
(なんだか楽しい)

いつの間にか、有香は歌うことに夢中になっていた。

「有香ちゃん。どうだった？」

歌い終わって、舞台袖にはけると、ぴよこんとひかりが隣に並んできた。ふわりと長い髪が宙に舞う。小柄なひかりは、有香を見上げるような形になる。

「緊張したけど、でも、楽しかった」

「それはよかった」

前を歩いていた副部長の月岡若菜が振り返る。

「酒井、舞台袖で、めっちゃ緊張してたもんね」

「仕方ないじゃないですか。私、初めてなんですから」

新入生は有香とひかりの二人のみ。けれどひかりは中学でも合唱をやっていた。となると、実質的にこの部で初心者是有香だけなのだ。

緊張の糸がほどけた部員たちは、おしゃべりをしながらホールへと向かう。発表時間以外は、ホールで他の団体の演奏を聴くことになっている。

有香たちは、ロビーにたどり着いた。演奏中は、出入りが禁止されているので、一校分はホールの外で待たなければならない。

「中央高校は、間に合いそうだね」

ひかりいわく、中央高校の演奏は一聴の価値あり、なのだという。

有香は笑顔を浮かべて相づちを打ったが、内心は複雑だった。

中央高校。有香の第一志望だった学校。受験当日に事故にあつた有香は受験することができず、滑り止めだったこの優華女学院に入学することになってしまった。入学当初は、中央高校への想いが捨てきれず、学校になかなかなじめなかつたくらいだ。

優華女学院での自分の居場所を作りたくて入った合唱部。だいぶ学校にも、部活にも慣れてきたように思える。部員が少ないせいか、先輩たちを含めてもとても仲がよい。わだかまりも少しずつ消えてきた、はずだ。

けれど、まだ、中央高校の制服を見るのは、少し辛い。

「そろそろかな」

ホールに入れない人間の為に用意されているモニタには、近くの市にある高校の合唱部がうつっている。部員は十人ちよつと。それでも広いステージの上にあたつと、少し寂しく

思える。きつと、有香たちのときは、もっと閑散として見えたのだろう。

拍手が聞こえるのと共に、係の生徒が扉を開ける。有香たちはホールに入った。

「プログラムナンバー七番。市立中央高校合唱部」

プログラムによると、中央高校の部員は三十人。決して多い数ではないと言うが、有香たちの五倍である。混声合唱であり、男女比はだいたい三対二くらいだった。

合唱が盛んとは言い難いこの県で、珍しく全国大会の出場経験がある団体。

有香の憧れた制服に身を包んだ生徒たちが、舞台へと上がる。遅れて入ってきた初老の男性指揮者が深々と頭を下げる。

歌う曲は、ひかりの解説によると、合唱では有名な作曲家の比較的新しい曲らしい。ややひねくれたメロディラインだが、そこが「歌いがいがある」と人気なのだという。

力強いピアノの伴奏が始まる。

(いい演奏つて友枝さんが言っていたんだから、しっかり聴かなきゃ)

視線を落としたくなる有香は、自分を鼓舞して顔を上げた。

歌が始まる。最初は、ソプラノだけから始まった。

(……すっごう)

有香は舞台に釘付けになった。制服とか、そんなものにこだわっている場合じゃない。

どんだん重なっていくパート。重厚なハーモニー。透き通るような、でも芯の通った女声を、深みのある男声が下でしっかりと支えている。初めて聞くメロディが、がっんと有香の耳に飛び込んでくる。

合唱初心者だから、うまいとか善し悪しとかはよくわからない。ただ、この歌をもっと

聴いていたい。わき上がってくるその気持ちだけは確かだ。

「ねえ、有香ちゃん。今度、うちで勉強会しない？」

「え？」

ひかりがそんなことを言い出したのは、音楽祭が終わり、現地解散直後のことだった。ホールの駐車場には、バスが何台か止まっている。四時過ぎ。まだまだ日は長い。

ひかりは、今日は用事があるという話で、ここまで車で迎えに来てもらうのだという。ひかりの迎えが来るまで、有香は一緒に付き合っていた。このホールから家までは近いので、少しくらい帰りが遅くなってもかまわない。

「ほら、そろそろ期末テスト近いでしょ？」

ひかりの言うとおり、期末テストは一週間後に迫っていた。明日からは部活の活動停止期間に入る。顧問の相澤先生も、別れ際、次の部活は二週間後、と言っていた。

部活がない。

中学のときは、単純に嬉しかった。テスト勉強をしなくちゃいけないのはわかっているけれど、いつもより早く家に帰れる、という事実が心を弾ませた。部活は部活で楽しかったけれど、それとこれとは、話が別なのだ。

でも、今は少し寂しい。

それは、有香が少しずつ部活に慣れていくからだろうか。

合唱部が居場所になりつつあるからだろうか。

人数が六人と少ないこともあり、合唱部はみんな仲がいい。初心者の有香にとって、合

唱の少し突っ込んだ話題になると聞き役に徹するしかなくなるけれど、それでも、不思議と疎外感はないのだ。

「だから、たまにはこういうのもいいんじゃないかなって」

「それはいいけど、その、友枝さん家です？」

まさか、ひかりに家に誘われることがあると思っていなかった有香は、目を丸くした。

正真正銘庶民の有香と違い、ひかりはお金持ちのお嬢様だ。父親は地元企業の大社長で、しかもこの辺りの大地主で有名な塚本家とも血縁がある。お嬢様学校と呼ばれている優華女学院でも、一二を争う正真正銘のお嬢様。

そんなひかりの家だ。きっと、有香には想像もつかないほど大きいのだろう。実際、そんな話を、中学時代からひかりを知るクラスメイトから聞いたことがある。

「どうかな？ 私、数学苦手だから、有香ちゃんに教えてほしいんだ。駄目？」

やや上目遣いでひかりが有香を見つめる。ただでさえ愛らしい容姿のひかりに、そんな顔でお願いされて、断れるはずがない。末っ子の有香は、妹がいたらこんな感じなのだろうか、とたまに思う。

「いいよ。どうせ、勉強はしなくちゃいけないし」

「やった。約束ね」

ぎゅっとひかりが有香に飛びついてきた。最近気づいたことだけれど、ひかりはややスキンシップ過剰なところがあると思う。少ししてひかりが離れる。

「いっつもお兄ちゃんに教えてもらってるんだけど、お兄ちゃん、すぐ怒るんだよね。私だって好きで理解できないわけじゃないのに」

ひかりの兄は、近くにある昇星学院高等部の三年生だと聞いたことがある。昇星といえば、この辺りはもちろん、県でもずば抜けた進学校。わざわざ県外から入学してくる生徒もいるほどだ。きつと、頭がすごくいいのだろう。

そんな頭脳明晰と思われる兄に代わって自分でいいのか、とか。

その前に、友枝家の豪邸（推測）に自分みたいな庶民が訪ねていいのか、とか。いろいろ思うことはあるけれど。

「いつなら都合いい？」

満面の笑みを浮かべて、予定を立てようとしているひかりの顔を見ると、まいっか、と思えてくる。

次の土曜日に友枝家を訪ねることで話がまとまった。ひかりが、絶対土曜日がいい、と主張したのだ。有香も、日曜は用事があつたけれど土曜日ならあいていたので、すんなりと受け入れる。

「ありがとう。有香ちゃん」

友枝家の車が迎えにやってきた。家まで送る、というひかりからの申し出を固辞して、有香は帰路につく。

最初の交差点で信号待ちをしているとき、有香はふと思いついた。

（どうせだったら、ショッピングモール寄ろうかな）

家とは逆方向になってしまふけれど、どちらにしろ、そんなに距離があるわけじゃない。お小遣い前で少し財布は淋しいけれど、このまま家に帰っても特にすることがあるわけでもない。来週の日曜日、母親と一緒に行くことになっているけれど、その前にほしいもの

をチェックするのでもいいだろう。

そう決めた有香は、家とは逆方向に歩き始めた。

ショッピングモールは、たくさんのお客様で賑わっていた。家族連れやら若いカップルやら。もちろん、有香のように一人で買い物に来ているひともいる。休日だというのに、制服姿の高校生も珍しくない。

有香は、ぶらぶらと洋服を中心に見て回った。ほしいと思う服を、頭の中のリストに書き込むことも忘れない。店に並ぶ夏服は、どれか一着に絞りきるのが難しいほど好みのものが多い。一緒にシユシユも買ってもらおうかな。そんなことを考えながら、ウインドウショッピングを楽しむ。

(あれ……?)

有香は雑貨屋の前で足を止めた。制服姿のひかりがいる。どうやら何か小物を見繕っているらしい。

(用事って、ショッピングモールに寄ることだったのかな)

ひかりは、詳しい内容は教えてくれなかったのだ。有香も突っ込むことじゃないと聞かなかったのだけだ。

あたしのことも誘ってくれればよかったのに。そんなことを考えてから、有香は、すぐにひかりが何も言わなかった理由を悟った。

——ひかりの隣には、男性が立っていた。年はひかりよりも少し上。制服姿のひかりとは違い、ファッション雑誌から抜け出てきたような格好をしている。残念ながら、顔はよ

く見えない。

彼とのやりとりでひかりの表情がくるくると変わる。随分楽しそうに、そして親しげに見えた。

どくん、と有香の心臓が鳴る。

(もしかして……彼?)

最近ひかりの歯切れが悪かったのは、このことを言い出そうとしていたからだろうか。別に変な遠慮することなんてないのに。そりゃ、確かに有香に彼氏はいないけれど、友人の幸せをねたむほど、心は狭くない。

自覚はなかったのだけれど、どうやら有香は立ち尽くしていたようだ。

「あ。有香ちゃん」

ひかりがこちらに気づいたらしい。しまった、と有香は思う。さっさと去るべきだった。そう後悔しても遅い。

ひかりは、少し困った顔をする。少し考えたあと、こちらへやってきた。彼氏はいいのだろうか。

「えっと、有香ちゃん、どうしたの？」

「え？ あ、ちょっと、暇だったから寄り道。友枝さんは、デート？」

「へ？」

ひかりは、有香の言葉に大きな目をさらに大きく見開いた。有香の言葉の意味がわからない、とでも言いたげな顔だったが、すぐに有香の言わんとしたことに気づいたらしい。

「ううん。違う違う。誤解しないでほしいんだけど、あれは、お兄ちゃんだよ！」

ひかりは、ぶんぶんと手を振った。有香はきよんとする。よく顔まで見ていなかった。
「……そうなの？」

「うん。そうだよ。ちょっとお兄ちゃんに買い物に付き合ってもらったの」
「そうなんだ」

「どうやら、有香の考えすぎだったらしい。何となく有香はほっとする。
「何を見ていたの？」

有香は、あまり兄と一緒に買い物をするのがなかったから、何気なくひかりに尋ねてみた。しかし、何故かひかりは動揺する。

「え？ えつと、あの、その、いろいろ見てたんだ。特にこれってものはないんだけど」
「そうなの？」

「うん。うん。そうなの」

ひかりはうんうんとうなづく。

やはりひかりは、何かを隠しているのではないだろうか。有香はそう思ったけれど、ひかりの兄を待たせ続けるのも悪い。口には出さないまま、ひかりと別れた。

* * *

土曜日。駅前で十二時に待ち合わせ。お昼はあらかじめ食べてくる。それが約束だった。ひかりの家は、やや郊外にあるので、迎えに来てもらうことになった。自転車で行くよ、という有香の提案はひかりにすぐさま却下されてしまった。

駅前は、そこそこ賑わっている。どこの学校もテスト前なのか、制服や、校名の入ったジャージを着ている生徒は少ない。

十二時ぴつたり。見慣れた車が、有香の前に停まった。

(まさか、あたしがこの車に乗ることになるとは思わなかったなあ)

「有香ちゃん！」

私服のひかりが車から飛び出してくる。考えてみれば、私服のひかりを見るのは、今日が初めてかもしれない。白い前あきのワンピース。有香から見れば少女趣味なデザインだけれど、ふわふわとした雰囲気のみかりには、よく似合っている。

有香は、というと、いつもならTシャツにジーンズという格好が多いのだが、さすがに地元の名家を訪ねる、ということでも珍しくスカートなんかをはいてみた。手には勉強道具の入った鞆の他に、親に持たされたお土産が入っている。有香でも滅多に食べられない有名店のプリンだ。親がわざわざ昨日ショッピングモールまで買いに行ったのを知っている。

「さあ、乗って乗って」

せかされるようにして、有香は車に乗り込む。もともと、黒塗りの高級車は非常に目立ち、駅前でも注目の的だったから、ある意味助かったとも言える。

「今日、すつごく楽しみにしてたんだ」

ひかりの言葉は、とても素直なものだ。ひかりは隠し事が出来ないタイプだろう。

そういうえば、ショッピングモールで逢って以来、何かを言いかけてやめることはなくなつたように思える。やっぱり、あれは、有香の気のせいだったのかもしれない。

車がゆっくりと発進する。当たり前の話だが、酒井家の乗用車とは乗り心地が全然違う。ゆったりとした車内。音もとても静かだ。

「今日は、両親、用事でいいんだ」

ひかりのその言葉を聞いて、有香は少しほっとした。少しだけ気が楽になる。有香の両親が一番心配していたのは、「相手のご家族に粗相のないこと」だったから。両親が不在となれば、「粗相」をする可能性も減るだろう。

「だから、家にいるのは下のお兄ちゃんくらいかな」

下のお兄ちゃん、というのが昇星に通っている兄だろう。

友枝義昭。ひかりの二番目の兄。高校三年生。ひそかに優華女学院の生徒から人気が高いのだという。クラスメイトが驚くくらい詳しく知っていた。

「下のお兄ちゃんって、この前ショッピングモールで一緒にいた人？」

「あ、うん。そうだよ」

有香の問いに、ひかりが何故か少し動揺を見せる。

(どうしたんだろう?)

けれど、有香は特に突っ込むことはしなかった。

市街地から外れるに従って、徐々に緑が多くなっていく。同じ市内とはいえ、ひかりの家がある方にはあまり行かなかったことがない。駅の近くにあるマンション住まいの有香は、だいたい駅前で用事が足りるからだ。

「そろそろだよ」

ひかりの言葉に、有香は気を引き締めた。

(想像以上だわ)

有香は「友枝」の表札のかかった門の前で、思わず立ち止まった。石で出来た塀がぐるりと取り囲む。ちらりと見えるのは、平屋建ての屋根。瑞々しい緑の葉をつけた樹木。

「どうしたの？」

不思議そうにひかりが振り返る。まさか家のスケールに驚いていた、なんてことは言えるわけもなく、有香は「なんでもないよ」と歩き出した。

門をくぐると、手入れの行き届いた日本庭園が広がっている。マンション住まいの有香にとって、庭という存在そのものが新鮮だった。

(服装、慎重に選んでよかったかも)

少なくとも、ジーンズで来るような場所じゃないと思う。そして、自転車でくることを押し切らなくて良かった、と心底安堵した。

友枝家は、古く大きな、いかにも旧家然とした日本家屋だった。高校生の有香の目から見ても、隅々まで手入れが行き届いているのがわかる。

ひかりが入り口の引き戸を開ける。

「ようこそ。友枝家へー!」

石が敷かれた玄関。飴色の木の床が続いている。有香は慎重に靴を脱ぐ。

両親は不在、とのこと、特別誰かが出迎えに立っているようなことはなかった。有香はそのことにはっとする。

「私の部屋はこっち」

ひかりがすたすたと歩いていく。有香はそのあとを慌ててついていった。

廊下からは中庭が見える。バランスよく緑が茂り、中央には小さな池があった。きっと、高級な鯉が泳いでいるに違いない。

「お兄ちゃん」

ふいに、前を歩くひかりが足を止めた。近くの部屋から、人が出てきたのだ。

「あ。ひかりか」

バリトンの響きの良い声。たぶん、兄の義昭なのだろう。

自宅だから当たり前なのかもしれないが、義昭はTシャツにジーパンというラフな格好をしていた。そして——なるほど、人気があるのもうなずける。

甘く整った顔立ちは、よく見ればひかりに似ている。どちらかといえば女顔だが、中性的と言うほどではない。身長は百八十くらいはあるだろう。すらりとしている。黒い髪の毛は綺麗に整えられていた。通っている高校名を知っているからだろうか。どこか知的な雰囲気醸し出されているように思える。

「彼女が噂のお友達か？」

そう言って、義昭はじつと有香に視線を向ける。

顔に何かついていているだろうか。有香は居心地の悪さを感じる。特別な服装をしているわけではないはずだ。

どうやら、ひかりも義昭が有香を観察していることに気づいたらしい。苦言を呈する。

「ちよっとお兄ちゃん。不躰なことしないで」

「悪い悪い。お前が友だち連れてくるなんて珍しいから」

義昭の視線が離れる。有香はほっと息をつきたくなった。

「ごめんね。有香ちゃん。お兄ちゃんが失礼で。とりあえず紹介するね。私の下の兄の義昭です」

「どうも。君が、酒井有香さんなんだね」

いきなり義昭の口からフルネームが出てきて有香は困惑した。有香ちゃん。そうひかりは呼んだけれど、苗字はまだ口にしていない。

「どうして苗字まで？　つて不思議な顔してるね。簡単だよ。ひかりがいつも君のことを話していたから、どんな子かなあってずっと興味があつたんだ。この前なんか、俺に……」

義昭はあっけなく種明かしをする。

「お兄ちゃん！」

妹の抗議に、面倒くさそうに兄は手を振った。

「はいはい。悪かったね。そういえば、酒井さんは、ひかりと同じ合唱部なんだって？　いい意味で、予想通りかな」

(どういう意味だろう)

自分では、ひかりの友だちにはあまりいないタイプだと有香は思う。

「まあ、ひかりは末っ子でわがままかもしれないけど、基本的にはいい子だから仲良くしてやってね」

義昭が口角を上げる。有香はどういう反応をしていいのか、少し困った。はあ、と小さくうなづく。

「ちょっとお兄ちゃん。そんな余計なことまで言わなくていいから」

「別に余計なことじゃないぞ。俺はかわいい妹のことを思つて……」

「あー。もう、余計なこと言わないで！ お兄ちゃん、さっさと部屋に戻る！ 第一、何しにわざわざ出てきたの？」

「妹は、俺をトイレにも行かせてくれないのか？」

「うわあ。最低！ 有香ちゃんの前で変なこと言わないでよ。とにかく、戻つて」

ひかりは、一生懸命義昭を追い返すために、彼の背中をぐいっと押した。

「わかつたわかつた」

笑い声を上げながら、義昭は自室に戻っていく。最後に、有香の顔を見てこういった。

「ゆっくりしていつてね。酒井さん」

(だいぶ予想と違うひとみたい……)

第一印象で感じた知的な雰囲気は吹き飛んでしまった。けれども。

悪い人ではなさそうだ。

「もう」

兄が消えた扉を見つめて、ひかりは憤然としている。

「面白いお兄さんだね」

有香が声をかけると、ひかりが振り返った。まだ兄に対する怒りは残っているらしい。表情でわかる。

「面白くないよ。まったく。有香ちゃん。本当にごめんね」

「別に謝る必要ないよ。不快な思いとか、全然していないから」

有香が笑ってみせても、まだひかりは気が収まらないらしい。けれど、いつまでもここで立っているのも得策ではないと感じたのだろう。ふう、と長く息を吐き出した。

「ありがとう。有香ちゃん。私の部屋は、すぐだから」

ひかりの部屋は、綺麗に片付けられていた。ひかりから受ける印象より、白を基調とした甘くて女の子らしい部屋を勝手に想像していたのだけれど、どちらかというとい洗いや部屋だった。和室ということもあるかもしれない。女の子らしいものと言えば、棚に飾ってある古いディスプレイくらい。

シンプルな本棚と学習机。余計なものはいない部屋だ。本棚には、小説に混じって音楽に関連する本があった。背の高い薄い本は、きっと楽譜だろう。

勉強するために用意したのか、茶色のテーブルが部屋の中央に置いてある。家族四人が食事できるくらいの広さはあった。向かい合うように薄桃色の座布団が二つ、置いてある。そのうち一つに、有香は座った。ひかりは、有香のお土産のプリンを冷蔵庫に入れてくる、と部屋を出て行った。たぶん、すぐに戻ってくるだろう。

考えてみれば、友だちの家に行く、という行為も久しぶりだ。小学校の頃とかは、近所の友だちの家に遊びにいったりしたものだけれど、中学に入ると部活が忙しくなると、そんな機会はぐんと減った。中三になって受験生になれば、なおさらだ。

「おまたせ。有香ちゃん。早速やろうか」

ひかりは部屋に戻ってくると、弾みをつけて、有香の向かい側の座布団に座った。もちろん、そのために有香はここまでやってきたのだ。

まず始めに数学に取りかかることにした。元々、ひかりの「数学を教えてほしい」というのが今回の勉強会の趣旨だ。有香も異論はない。学校で配られた問題集を開く。

お互い、最初は自力でとくことにした。しばらくの内は、紙の上をシャープペンが走る音が部屋に響く。

「数学って、どうしてあるんだろう」

ちょうど有香が三問ほど問題を解き終えたところで、ひかりが音を上げる。

「そう思わない有香ちゃん。足し算引き算とかが大切なのはわかるのよ。お金の計算とかで必要だし。でも、二次関数とかって、一体、将来何の役に立つの？」

そう言うひかりの問題集は、一問目でとまっていた。いくつか数式を書いては消し、書いては消しをした跡がある。

その気持ちはわからないでもない。たぶん、有香たちには想像も付かない分野で役立つているのだろう。けれど、大多数の人間が、将来二次関数を使うか、と言われたら首をひねる。

「有香ちゃんは数学好きだよね？ どうして？」

ひかりは真剣な顔で問いかけてくる。

「答えが一つだから、かな。難しいって思った問題でも、解法をひらめいて、すつと解けたときに嬉しいというか」

「そういうもの？ 私の場合、まず公式を覚えるところから始めないとなあ」

はあ、と大きくひかりがため息をつく。

そのとき。

「あけるよ」

義昭の声があると同時に、ふすまがあげられる。

「お兄ちゃん！」

ひかりが声を上げる。少し非難めいた口調。抗議だろう。

「なんで、わざわざ来るの？」

「お客さんにお茶のいっぱいでも出さないといけないと思ったんだが、文句あるか？」

義昭の言うとおりに、彼の持つお盆には、麦茶の入ったコップが三つ載せられていた。

——三つ？

「何で三つあるの？」

ひかりも同じ事を不思議に思ったらしい。怪訝な顔をする。

義昭はにやりと笑った。

「二人とも今日は試験勉強をしているんだろう？ 俺はいい講師になると思うけど？」

「えー。お兄ちゃんに教えてもらいたくないから、有香ちゃんにわざわざ来てもらったのに」

ひかりはさんざん文句を言ったけれど、「酒井さんに教えてもらうのはいいけれど、だったら酒井さんはいつ勉強をするの？」の義昭の言葉に結局は黙り込んだ。

「座布団は用意してないからね！」

妹の負け惜しみに兄は苦笑すると、空いている場所に座る。

「最初から期待してないよ。ほら、さっさと勉強再開」

自称した通り、義昭はよい講師だった。

実際の処、有香にとっても義昭の存在は有り難かった。

数学はわりと好きだとはいえ、歯が立たない問題もある。そんなとき、義昭はさらりと射を射たアドバイスをくれるのだ。さすが、昇星の生徒だけはある。

思いの外、有香も学習を進めることができた。ひかりの方も、それは同じらしい。

「疲れたー」

ひかりがシャープペンシルを置いたとき、すでに時計は三時を回っていた。

「そろそろ休憩にする？」

有香の提案に、ひかりは大きくうなづく。

「そうしよう！ あ。有香ちゃんの持つてきてくれたプリン食べようよ。麦茶も入れ直してくるね！」

そう決めると、ひかりの行動は早かった。コップは三つとも空に等しかった。それらをお盆に載せて、部屋を出て行く。

「と、友枝さん」

有香が引き留める間もなかった。

(……)

ちらり、と有香は近くに座る義昭を盗み見る。

義昭と二人きりになってしまった。どうすればいいのだろう。会話が続くとは思えない。休憩を提案した手前、再び問題集に没頭するのはどうなんだろう。

有香が迷っていると、義昭の方から話しかけてきた。

「酒井さん。ひかりとは、どうして仲良くなったの？」

「え？」

思いがけない質問に、有香は驚く。

「気になってたんだよね。ひかりが友だちのことをこんなに話すのは珍しいからさ。俺だけじゃなくて、家族全員気になってるんだ」

「そうなんですか？」

「そうだよ。こうやって家に友だちをつれてくるのも、初めてじゃないかな。中学時代、何回か、学校行事の打ち合わせで団体さんがやってくることはあったけれど。ひかり、人の好き嫌いが激しいからね」

「全然そうは思えないですけど」

ひかりは、クラスメイトとも仲良くやっている。誰とでも屈託なく話しているように有香には見えた。

「別に嫌いだからって露骨に態度に出す訳じゃないからね。もしかしたら、本人も気づいていないかもしれないな。ただ、一線を引いているのは確かだよ」

友枝家のお嬢様には、子供を利用して近づこうとする大人も少なからずいたのだという。損得の混じった人間関係に幼い頃からさらされていたからだろう。そう義昭は冷静に分析した。

「で、最初の質問に戻っていいかな。ひかりとは、どうして仲良くなったの？」

「えっと、友枝さん——ひかりちゃんに、合唱部に誘われたんです」

義昭も「友枝さん」だ。そう気づいた有香は、名前を言い直した。本人がいないからだろうか。意外とすらりと口から出てくる。

「へえ」

「あたしが、外部から入学して、まだ入る部活を決めてなかったから」

本当は、見学に一回付き合っつて、それで終わるつもりだった。けれども。

その「付き合い」を有香なりに真摯に行つたのが、ひかりは気に入つたらしい。

そのときは、当たり前のことだと思つていただけれど。でも、友枝家のお嬢様にとつては、そうでなかったのかもしれない。義昭の話聞いた今、有香はそう思う。

「最初に入るつもりはなかったんですけど、でも、いろいろ考えて、やってみようかと思つて思いました。今は、ひかりちゃんに感謝してます。彼女がいなかったら、あたしは、合唱部には入らなかつたと思うから」

合唱部。意外と居心地のいい場所。有香に学校にくる楽しみを作ってくれた。

みんなで声を合わせるのも、最近は楽しくなつてきている。

先週の初舞台を、有香はきつと忘れないだろう。

広がつていく歌声。重なるハーモニー。

「そうか」

妹の話を聞く兄の目は、とても優しくかつた。有香の心臓がほんの少し、はねる。

「それは、俺も嬉しいな。何しろ、ひかりが俺に……」

そう言えば、さつきも義昭は何かを言いかけた。一体、何なんだろう。

そのとき、ふすまが開いた。義昭の言葉は、そこで途切れてしまう。

「持つてきたよ。プリン」

「あ、ありがとう」

驚いた有香の声は、少し裏返ってしまった。

(さっきの話、聴かれてないよね)

聴かれて困るようなやましいことを話していたわけではないけれど、それでもやっぱり恥ずかしい。本人の前で、「感謝してる」なんてきつと恥ずかしくて言えない。

「お兄ちゃん。私がいけない間、有香ちゃんに変なこと吹き込んでないでしょうね」

有香の様子がおかしいと思ったのか、ひかりが兄を軽く睨む。

「人聞きが悪いな。むしろほめてたのに」

「なんか、そっちの方がたち悪い気がする。余計なことも言っていないよね？」

「言っていない言っていない。もう少しく口がすべるところだったけど」

じろりと兄をにらみつけてから、ひかりは持ってきたプリンを有香と義昭に配る。宣言通り、麦茶も新たにたがれていた。

「きちんとコップは洗ったから、大丈夫だよ」

おやつタイムが始まる。

「そういえば、期末テストが終わると、そろそろ夏休みだね」

プリンを食べながら、ひかりが言う。高くて滅多に食べられないプリンは、有香の舌の上で柔らかくとろける。

「合宿、楽しみだね」

「合宿なんてあるの？」

「あるよ。菜々子さんから聞いてない？ ほら、少年自然の家あるじゃない？ あそこで毎年やってるんだって。中学のときは、合宿なんてなかったから、楽しみ」

合宿、か。一日中歌三昧になるのだろうか。それも悪くないな、と思えてくる。

「それに、アンコンの曲の練習も始まるし。どんな曲歌うのかなあ」

アンサンブルコンテストを略してアンコンと呼んでいる。ひかりの言うとおり、どんな新しい曲が待っているのか、とても楽しみだ。

居場所を作るために入った合唱部だけれど、いつの間にか、歌うこと自体が楽しくなっている。いや、楽しかったからこそ、入るつもりになったのだろう。

「あまり二人の邪魔をしても悪いし、俺はそろそろ自分の部屋に戻ろうかな」

二人がプリンを食べ終わるタイミングを見計らったように、義昭が立ち上がる。

「プリンのごみは俺が片付けておくよ」

そう言っつて、義昭はてきばきとテーブルの上を片付け始めた。あつという間に去ってしまふ。

「もう。お兄ちゃん。ほんと、何しに来たんだろう。プリン食べに来たのかな」

ぱたりとしまったふすまを見て、ひかりが唇をとがらせた。

「勉強、教えてくれたじゃない。すぐく助かったよ」

「それはそうかもしれないけど」

「それに、――友枝さんのことが心配だったんだよ」

「そうかなあ」

ひかりはまだ釈然としない顔をしている。

「ま、お兄ちゃんのこといちいち考えていても仕方ないか。勉強しよう。有香ちゃん」

気づいたら、日が長い季節だというのに、そろそろ日も暮れようとしていた。

「そろそろ、終わりにしようか。あまり遅くなっても申し訳ないし」

すでに部屋の電気はつけている。ノートの字が暗くて見にくいと、部屋の電気をつけたのは、少し前のことだ。

「そうだね。遅くなると、有香ちゃん家の人も心配するよね」

ひかりが名残惜しそうに言う。

「じゃあ、私、運転手さんに声かけてくるね！」

ひかりは、部屋を出て行った。友枝家には、専属の運転手がいるのだ。しかも、一人だけではないらしい。

一人部屋に残された有香は、ノートや筆記具を鞆に片付けた。

ほうつと息をつく。充実した一日だった。

ぱたぱたと足音が聞こえてくる。運転手さんは無事に掴まったのだろう。

「有香ちゃん。仕度終わった？　すぐに車出すって」

予想通り、ひかりが顔を出す。

「うん。終わったよ」

「そう。あ」

ぼん、とひかりは手を叩いた。

「ちよつと待っててね」

ぱたぱたと机に駆け寄る。

(どうしたんだろう)

忘れ物は特にはないはずだ。何かを貸しているわけでもない。

首をひねっていると、ひかりが引き出しの中から何かを取り出した。

「有香ちゃん」

ひかりに名前を呼ばれる。どこかひかりは嬉しそうだ。

「何？」

「あのね。これ」

ずいっと出されたのは、ラベンダー色の袋だった。白いリボンが結ばれている。明らかにプレゼント用のラッピング。

「少し早いけど、誕生日プレゼント」

「——え？」

有香の視線が、プレゼントからひかりへと移動する。

ひかりは得意気に笑った。

「明日、誕生日でしょう？ だから。本当は、当日に渡したかったんだけど、どうしても外せない用事があった。だから、今日で申し訳ないんだけど」

「ううん」

有香は首を振った。まさか、ひかりが自分の誕生日を覚えていてくれるとは思っていなかった。合唱部に入部したところ、話題で少し出てきただけだったから。

「前にちよつとだけ誕生日について話したでしょ？ 私、人の誕生日覚えるの得意なんだ」

「ありがとう」

有香は、震える手でひかりからプレゼントを受け取る。

「この前ね、ショッピングモールで会ったでしょう？ 実は、あのとき、お兄ちゃんに協力してもらって、選んだの。何度か有香ちゃんに好きなものとか聞こうと思ったんだけど、さりげなく聞き出すのがすごく難しくって、結局私の好みで選んじやった。大変だったんだー。ここまで秘密にするの」

これで、ひかりの様子がたまに不審だった謎が解けた。有香はそう思った。単純に、ひかりは有香の誕生日プレゼントを秘密裏に用意したかっただけなのだ。

「あけてみて？」

ひかりの目が期待に満ちている。きつと、有香の反応が楽しみなのだろう。

有香は素直に白いリボンに手をかけた。

「かわいい！」

出てきたのは、音符をモチーフにしたデザインのマグカップだった。白地に黒いモチーフが散っている。取っ手も音符を模してあった。

「本当にいいの？」

「うん。喜んでもらえて、私も嬉しい」

友だちと誕生日プレゼントを交換したことは何度もある。

けれど——こんなに嬉しいのは初めてかもしれない。きつと、不意打ちだったからだろう。

「ありがとう。——ひかりちゃん」

初めて、ひかりを名前前で呼んでみた。不思議なほど、すらりと口から名前がこぼれる。有香は、おそろおそろひかりの反応を確かめる。

ひかりは、少しだけ目を丸くして、ゆっくりと破顔する。

「これからもよろしくね。有香ちゃん。ちなみに、私の誕生日は十月二十七日だから覚えておいてね！」

「覚えてくよ」

そして、このカップに負けないくらい、いいものを贈るんだ。有香はそう決意する。

「楽しみにしててね。ひかりちゃん」

NONSTOP



平行線 ジンドローム

水島朱音

Illustration: 正午あきら

あらすじ

澤村葉月は中学校の卒業式の日、片思いの相手・塚本日向に告白する。しかし彼は「一年以内に僕を見つけることができたなら返事を教える」という謎の言葉を残して、その日を境に姿を消してしまったのだった。

塚本日向

飄々として掴みどころがない少年。
地元の分家出身。

澤村葉月

ポジティブでさっぱりとした性格。
日向のことが好き。



青田宗輔

葉月の中学時代からの友人。
野球部所属。

鶯萌々

葉月の中学時代からの友人。
友達思いだが少々短気。

第二話 頑固者の解答

入学して初めての定期試験が終わり、慣れ始めた制服もそろそろ夏服へと移行する。そんな初夏。

澤村葉月さわむら はづきは、放課後のざわつく教室の中、一人で携帯電話をいじっていた。

「葉月ー。まだ帰らないの？ クレープ食べに行かない？」

入学して一ヶ月半、友人もそれなりにできて、学校が終わった後はこんな風に遊びに誘われることもある。

けれど、今日の葉月には先約があった。

「ごめん、ちょっと用事あるんだ」

「あつ、そうなんだー。また今度行こうね！」

「うん、ありがとう」

嫌な顔をすることもなく、手を振って教室を出て行ったクラスメイトと入れ替わりに、小柄な女子生徒が教室に入ってくる。

「葉月！ お待たせー！」

すぐに葉月の席まで駆けてきたのは、葉月の中学時代からの友人、鶯^{うぐいすも}萌々だ。

「ホームルーム長引いてさー」

「おー。おつかれー」

葉月は携帯電話を閉じると、上着のポケットにしまった。

今日は、帰りに萌々を遊ぶ約束をしていたのだ。

「で、どこ行くの？」

「んー？ あかね、梨^り香^かや望^{のぞ}末^みとさ、遊ぶ約束してて」

「へえ？」

萌々が挙げたのは、市内の違う高校に進学した友達だ。この市には、葉月たちが通う市立中央高校の他に、優^{ゆう}華^か女学院という私立学校の高等部がある。彼女たちは、その私立の方に通っていた。

「昨日メールしてて、久しぶりに会いたいねえって話になって」

「それで今日？ 唐突だなあ」

「だってすぐに会える距離じゃん」

「まあ、ねえ」

そんなことを話しながら、二人で教室を出る。周りには、お喋りに興じる生徒や部活に急ぐ生徒など、さまざまな喧騒が溢れている。

「それに、色々聞きたいこともあるしね」

「？ 聞きたいこと？」

「うん、だって優華っていったら――」

萌々が何か言いかけたその時、ちょうど階段の踊り場に差し掛かった二人は、階段を駆け上がってきた人物とぶつかりそうになった。

「きゃっ！」

「わっ！ ごめ——って、なんだお前らか」

反射的に閉じた瞼を開くと、相手はよく知った少年だった。

「なんだ、宗輔そうすけじゃん」

背の高い、髪をスポーツ刈りにしている彼の名は、青田あおた宗輔。葉月と萌々の、中学時代からの友人である。

「宗輔、部活は？」

中学の頃から野球部に所属していた彼は、高校でも同じ部活を選んだ。高校から帰宅部になった葉月たちとは違い、毎日部活に熱を入れていようだが。

「教室に忘れ物したんだよ。取りに戻るトコ」

だから急いでいたのか、と心の中で納得する。早く戻らないと、部活が始まってしまっのだろう。

「がんばれー」

「おう！」

ひと言短く告げると、宗輔はまた走りだした。

「先生に見つかったら怒られるかもね」

遠くなる足音を聞きながら、萌々が笑う。元気だなあ、と葉月も笑みを零した後、先ほどの萌々の言葉を思い出す。

「そういや、さつき言いかけてたの、何？」

「さつき？」

「梨香たちに聞きたいことがあるのかなんとか」

「ああ、そうそう」

萌々は思い出した、というように頷いた後、何かを企んでいるような、小悪魔的な笑みを浮かべた。

「優華って、昇星しょうせいと仲いいでしょ？」

そう言つて上目でこちらを見てくる萌々に、

(あ、なるほどね……)

彼女の考えていることが大体わかり、妙に納得したのだった。

昇星学院は、私立の男子校である。優華女学院と昇星学院は深い交流があり、優華女学院の生徒は、昇星学院の生徒と結婚することが多いという。

一方で、この二つの学校は公立の中央高校とはほとんど交流がない。つまり。

「昇星でカッコイイ人がいたら、紹介してほしいってわけ」

萌々の口からその言葉が飛び出したとたん、葉月も、そして向かい側に座る梨香も望未も、やっぱりね、といった表情を隠すことなく顔に浮かべた。

ショッピングモールの中にある喫茶店。四人はそれぞれ違う飲み物と、小さなパンやケ-

キを注文して、隅の席に陣取っていた。

「だって、中高に通ってたら昇星の人と知り合う機会なんて滅多にないんだもん」

「あー……そりゃ、まあ、ねえ……」

「でも、私たちだってまだ入学したばかりだし……昇星の知り合いなんて、ほとんどいないよ」

「えー、そうなの？」

「なんだあ、と残念そうに眉を下げる萌々。しかしすぐに、

「まあいいや。久々に二人に会えたことだし」

と笑顔になった。

「良い人は、また見つかったら紹介してね」

しかし、やはりその辺はちゃっかりしているようだった。

そんな萌々に対し、梨香がくすくすとおかしそうに笑った。

「相変わらずだなあ、萌々は」

「そりゃ、二ヶ月やそこらで大きく変わったりしないよー」

「うん、そうなんだけどさ」

葉月には、梨香の言いたいことが何となくわかるような気がした。

公立の中央高校と、私立の二校は、はっきり言って仲があまり良くない。全員が全員ではないけれど、中央高校の生徒は昇星学院や優華女学院の生徒を「気取っている」という風に見ているし、反対に向こう側だってこちらを「田舎者」と見下している節がある。

しかし、梨香も望末も、そんな様子は全く見せることなく、中学校を卒業した頃のまま

の気楽さで葉月や萌々と話しているし、萌々だって二人に対してそうだ。もちろん、葉月も。

中学校から、高校へ。進学して、変わったものも多いが、変わらないものもこうして存在する。

そのことに、安堵する。

そんなことをぼんやりと考えていると、葉月の脳裏にふとある人物の顔が浮かび上がった。

「あ……っ」

小さく声を上げた葉月に、三人の視線が集中した。

「あのさ……昇星の一年生と会う機会とか、あったんだよね？」

「え？ うん、入学してすぐに合同で新歓やったし、その後も何かと一緒にイベントしてるよ」

もしかししたら、と僅かな期待に胸が高鳴る。

「あのさ……その中に、日向ひなたいなかった？」

葉月がその名を出すと、梨香と望未がきょとんと目を丸くする一方で、萌々が眉をしかめた。

「日向って……塚本つかもとくんだよ？ ううん、見なかったよ」

「そっか……」

僅かながらも期待しただけに、落胆に肩を落とす。

「え、塚本くんって昇星に行ったの？ 知らなかった」

「……わかんない」

「わかんないって……進学先、聞いてないの？」

こくり、と頷くと、正面に座る二人は驚いたように顔を見合わせた。

「嘘。葉月が知らないなんて、意外だった」

「だよね……仲良かったのに」

心底不思議そうにしている二人に、葉月が何も言えずにうつむいていると、いきなり足の先に衝撃があった。

「い……っ！」

隣を振り向くと、萌々が素知らぬ顔をして頬杖をついている。

「萌々！ あんた今、足踏んだでしょ！ しかもわざと！」

「うじうじすんなってーの」

不機嫌そうにそう言うことから、萌々は温かいココアに口をつける。もしかして慰めてくれているのだろうか、とも思うが、少し違う気もする。

その後も、萌々は梨香たちに対してはいつも通りだったが、葉月には不機嫌そうな様子を貫き通したままだった。

初夏とはいえ、梨香や望未と別れる頃には、外は薄暗くなっていた。早く帰らないと、晩ご飯に間に合わなくなってしまうかもしれない。

そんなことを考えながらも、葉月は少し先を歩く萌々の様子に気になっていた。萌々は二人と別れてから、一度も口を開かない。

「ねえ。なんでそんなに怒ってるの？」

自分の言動を思い返してみても、何が彼女の気に障ったのか、いまいちわからない。

なので直接聞いてみると、萌々はいきなりぴたりと足を止めた。つられて葉月が立ち止まると、萌々は身を翻し、あつという間に葉月の眼前まで迫った。

「あのね、いつまで引きずってるの！ 塚本くんのこと」

萌々の迫力に一步後ずさった葉月は、その名前にビタリと動きを止めた。それを見て、萌々が呆れたようにため息を吐く。

「卒業してから、もう二ヶ月以上経つんだよ？ 全然、音沙汰ないんでしょ？」

「音沙汰なんて……」

あるわけない、とは言葉に出来なかった。

葉月が、ずっと想いを寄せていた彼に告白したのは、中学校の卒業式の日のことだった。塚本日向。この辺り一帯の地主である塚本家の分家出身で、一年の終わり頃から葉月の友人だった少年だ。

しかし彼は、葉月の想いに答えを返すことなく、その日を境に忽然と姿を消してしまった。「二年以内に僕を見つけて」という、謎の言葉を残して。

正直、なめていた。

日向は引越す予定はないと言っていたし、市内にいるのならば、すぐに見つかるだろうと思っていた。あれは、彼のちよつとした遊び心なのだと。

けれど、甘かった。彼と親しかつた友人に尋ねてみても、誰も日向の進学先を知らないという。

受験に合格し、ようやく買ってもらえた念願の携帯電話。そこに登録しておいた日向のメールアドレスも電話番号も、すでに使えないものとなっていた。

本当に、するりとどこかに消えてしまったのだ。

卒業式から二ヶ月以上が経った今でも、彼の手がかりは依然としてつかめていない。

だから、日向の方から連絡など、あるはずがなかった。葉月が二ヶ月以上捜しても、何も見つからなかったのだから。

葉月が地面に視線を落としていると、萌々が両肩を掴んできた。頭一つ分近く身長差があるので、萌々が下から葉月を覗き込む形になる。

「いい？ 冷静になればわかることだよ。これだけ連絡がつかないなら、きつとこの先もずっと同じ。塚本くんは、見つからない」

見つからない。はつきりと言いつつ切った萌々の言葉が、胸に刺さるようだった。見つからないということは、つまり、日向には二度と会えないということだ。

「それなら、早い段階で諦めた方がいいよ。一年間、ずっと塚本くんのことだけを想って過ごすつもり？ 会えないの？」

萌々の言っていることも、理解できなくはない。彼女が、葉月のために言ってくれているのだということも。

けれど。

葉月は、自分の肩に乗せられた小さな手を、そっと外す。

「……ごめん」

まだ、どうするのが正しいのかなんて、判断はできない。

「もう少し……考えたい」

萌々は、まだ何か言いたげに口を小さく開閉させたが、結局もう一度ため息を吐いただけだった。

「というわけなんだけど、宗輔はどう思いますか。男の視点から意見どうぞ」
「……って言われてもな」

次の日。中庭の芝生で円になるようにして、葉月と萌々、それから宗輔は昼食をとっていた。

葉月と萌々が購買部に出かけたところで偶然宗輔に出くわし、一緒にご飯を食べないかという流れになったのだった。

そこで、昨日梨香と望未に会ったという話題が出て、そのまま自然と葉月と日向の話へと移っていき、萌々が宗輔に意見を求めたというわけである。

宗輔は葉月の方にちらりと視線をやってから、明後日の方向を向いて、考え込むように唸った。

「……まあ、正直」

「うん」

「俺は、萌々の言ってることの方が納得できる」

遠くを見たまま宗輔がそう言うと、途端に萌々はガバつと立ち上がった。

「だよーねー！」

賛同者が得られて嬉しいのだろう。大きな声でそう叫んだ萌々に、一瞬にして視線が集まった。

「萌々……恥ずかしいから、座って」

「やっぱり、葉月の考えの方がおかしいんだよ。おかしいっていうか……固すぎ？ よく言えば一途ってことなのかもしれないけど」

葉月の言葉が聞こえていないのか、スルーしたのか、萌々は立ち上がったまま滔々と話し始める。

そんな彼女を呆れたように見上げていた宗輔が、ふと俯いた。

「……まあ、でも、そうだな。……塚本のことは、忘れた方がいいんじゃないか」

「……忘れる」

「だってさ……言い辛いけど、それってやっぱり……」

そこで宗輔は一旦言葉を途切れさせ、萌々の方を向いた。萌々は、彼が何を言おうとしているのか理解したらしく、こくと一つ頷く。

それを受けて、宗輔は再び口を開いた。

「それってやっぱり、遠まわしにふられた、ってことじゃないのか？」

「……え……」

ふられた。つまり、あれは彼なりの断り方だったということだろうか。

宗輔に言われたことを咀嚼していると、萌々がようやくストンと腰を下ろした。

「私もそう思うよ、葉月。塚本くんは、葉月を傷つけないために、遠まわしな断り方をしたんじゃないかな」

それでは、「一年以内に見つけて」というあの言葉は嘘で、本当はもう、葉月に会うつもりは毛頭ないということなのだろうか。

けれどそれなら、進学先は秘密だとか、引越す予定はないだとか、わざわざそんなことを言ったりするだろうか。

何より。

(……日向って……そんな嘘ついたりする子だったっけ……)

葉月の記憶にある彼は、ふわりふわりとしていて掴みどころがなく、けれど嘘をついたりはしなかった。

少なくとも、葉月が好きになった日向は、そんな子だった。

「……葉月。私や宗輔が、葉月のこと心配して言ってるんだってことは、わかるよね？」

「……うん」

「現実的じゃないよ。新しい恋を見つけるべきだと思う」

萌々の声は、いつもより幾分か低く感じられた。諭すように、まっすぐこちらを見据えている。

彼女の言う通り、萌々も宗輔も、葉月のことを心配しているのだろう。けれど、葉月はまだ二人の言葉に頷くことができない。

だってまだ、彼と会えなくなつてから二ヶ月半しか経っていない。そんなすぐに忘れられるはずがなかった。あんな別れ方をしたなら、尚更。

はつきりとした返事をするできない葉月に、やがて萌々が大きく息をついてから、ぼそりと言った。

「……今日の放課後」

「え？」

「空けといて。三組の子たちと遊ぶから」

それだけ告げると、萌々は急に立ち上がり、パンやジュースのゴミを手早く片付けて校内へと走り去っていった。

残された葉月と宗輔はしばらく呆気にとられていた。やがて宗輔が呟いた、

「相変わらず変なヤツ」

という言葉に、ただ頷くことしかできなかった。

放課後、萌々に言われた通りに何の予定も入れなかった葉月は、昨日と同じように教室で彼女が来るのを待っていた。萌々のクラスまで迎えに行ってもいいのだが、特に来いとは言われていないので、こちらで待っていた方がすれ違う確率が低いと思ったのだ。

(……それにしても遊ぶって……誰となんだろう)

高校に入って新しく出来た友人といえば、大半が同じクラスの生徒だ。けれど、同じ中学出身で別のクラスになってしまった、例えば萌々のような友人とはよく遊んだりする。

だから葉月は、今日もそうだと思っていたのだ。

「葉月―」

教室の扉のところから名前を呼ばれ、聴き慣れたその声に振り向いた葉月は、思わず目が点になる。

彼女の後ろには、男女合わせて五、六人の生徒がいたのだが、葉月が全く知らない生徒ばかりだったのだ。いや、見覚えぐらいはあるのだが、話したことなど一度もなく、名前すらあやふやだった。

どういうことだ、と葉月が椅子に座ったまましていると、萌々が後ろの生徒たちに何か声をかけてから、教室の中に入ってくる。

「あの人たち、誰？」

駆け寄ってきた萌々にすぐに疑問をぶつけると、逆に怪訝そうな顔をされた。

「言ったじゃん。三組の子たちと遊びに行くって」

「でも、全然知らない人ばっかなんだけど」

「私も最近メアドとか交換したばっかだよ。だからほら、なんていうの？ 親睦を深める

会？」

萌々の話を聞いて、なんとなくわかったようなわからないような、そんな微妙な気持ちになったが、まあそういうのもアリかなあ、と自分を納得させる。葉月だって、これをきっかけに友人が増えるのであれば、それは嬉しいことだ。

行ってみるか、と席を立ったところで、萌々が放った言葉に凍りついた。

「それに、この中から葉月の次の相手が見つかるかもしれないしね」

そのひと言で、理解してしまった。萌々をはじめから、そちらが目的だったのだ。

「……萌々」

「何？」

全く悪気なく見上げてくる大きな瞳。実際、彼女に悪気も何もないのだろう。純粋に葉月の『次の相手』が見つければいいと、本当にそう思っている。

けれど。

「あたし、やっぱり行かない」

今度は、萌々が凍りつく番だった。

「……なんで？」

「行きたくない。……ほんと、いいから。そういうの……」

感情的にならないように、手のひらを強く握り締め、俯いた。萌々は、黙ってそこに立っていたが、やがて教室の外で待っている彼らに向かって声を張り上げた。

「ごめん！ 先に行つてて！」

すぐに廊下から、わかつたとの返事が返ってくる。そうして数人の足音と声が遠ざかる

と、萌々は葉月の手を引いて、「来て」と教室から連れ出した。

どこに連れていかれるのかと思えば、萌々は特別教室が多く集まる階、さらにその廊下の隅へと葉月をついてこさせた。要するに、人気のない場所に行きたかったのだろう。

人の声が完全に遠ざかり、萌々はようやく口を開いた。

「……いい、って、何？」

萌々のその言葉を頭の中で何度か反芻してから、先ほどの自分の発言を思い出す。

「……だからさ」

隠す必要もないと思った。ちゃんと、自分の考えを伝えなければ。

「次の相手とか……そういうの、やめて。あたし、まだ……日向のこと、好きなんだよ……」

日向にふられたかもしれないとか、嘘をつかれたかもしれないとか、そんなことは二の次だ。

まだ、日向が好きだ。彼を諦めない理由なんて、それだけで充分だ。

「……私、葉月のことを思ってたんだよ。このまま、可能性の低い恋を続けるよりはって思ってた」

その言葉がひどく押し付けがましく聞こえ、頭に血が上った。人の目が無いというもの、抑制を欠く一つの原因になった。

「それは、萌々が判断することじゃないでしょ！ あたしのはあたしで決めるよ！」

「だから、それが馬鹿だっていうの！ 周りから見てる私や宗輔の方が、ずっと冷静な意見を言ってる！」

「……っ！」

確かに、冷静じゃないかもしれない。未練が残って盲目になっているのかもしれない。それでも、日向への気持ちを否定されたくはなかった。

「馬鹿でもいいよ！ 萌々は余計な口出ししないで！」

完全に、興奮していた。

だから、言い過ぎたことに気がついたのは、見開かれた萌々の目を見た後だ。

「あ……」

動揺して、すぐに謝ることが出来なかった。萌々は自分の制服のスカートをぎゅつと握りしめた後、身を翻して階段を駆け降りていった。

その目の端にうつすらと浮かべられた涙が、葉月の心に罪悪感として強く焼き付いた。

翌日、萌々は葉月のもとに姿を見せなかった。違うクラスだというのが、こんな時に幸いした。どちらかが会いに行こうとしない限り、顔を合わせる確率は低くて済む。

自分の言ったことが間違っているとは思っていない。ちゃんと、考えていることを口にできたと思う。

それでも、最後のひと言は余計だった。あれではまるで、萌々のことが邪魔だと言っているみたいだ。萌々が葉月のことを思っただけで忠言してくれた。それは紛れもない事実なのに。謝らなければならない。けれど、日向に関する自分の意見は、撤回したくない。

(どうしたもんかなあ……)

答えは出ないまま一日が終わり、放課後が訪れる。葉月は自分の席に座ったまま、意味もなく携帯電話をいじっていた。

「よお」

不意に、前の席に誰かがどつかりと腰掛けた。顔を上げると、宗輔だった。

「……部活は？」

「今から行くんだよ。お前、萌々と喧嘩でもした？」

いきなり痛いところをつかれ、ぎくりとする。強張った葉月の表情を見て、やっぱりな、と宗輔はため息を吐いた。

「昼休みに萌々とちらつと話したんだが、どうもピリピリしてたんだよなあ」

「……」

「原因は？ ……やっぱ、塚本のこと？」

こくり、と言葉なく頷く。葉月がそれ以上答えないと、自分より大きな手のひらがぐしやぐしやと頭を乱暴に撫でてきた。

「わ……っ！」

「お前ももうちよつと頭柔らかくしろよなあ」

そういえば、萌々にも「固すぎ」と言われたことを思い出す。自分ではあまり意識したことではなかったが、そんなに頑固なのだろうか。

「もつとちゃんと、あいつの話も聞いてみれば？ ……つと、俺そろそろ行くわ」

腕時計を確認してから、宗輔は席を立った。

「さっさと仲直りしろよ！」

その一言を残して、宗輔は教室から出て行った。

「……できるものなら……とつくにしてくるっての」

宗輔がいなくなり、また一人になった葉月は、手持ち無沙汰に携帯電話のボタンをいじる。意味もなくメニューやメール画面を開いたり閉じたり。それは、癖のようなものだった。

そして、携帯電話に触れていると、日向と出会った時のことを思い出せるから、というのもあった。

日向が貸してくれた携帯電話。当時、まだそれを持っていなくて、使い方がよくわからなかった葉月に、ボタンの操作を教えてくれた。

（……会いたい、なあ……）

日向のことを思い返して、じわりと涙が滲んだ。目をきつく瞑ることで、それをこぼさないように我慢する。

（……駄目だ。こんなところで泣いてたって、何も変わらない）

自分の頬を軽く叩いて、気合を入れる。深呼吸してから、瞼を開いた。

「……よし」

日向を探そう。

萌々と仲直りするためにも、言葉だけでなくちゃんと行動に移さなければいけないと思った。

（……とは言っても）

メールも電話も繋がらない。彼を見たという人もいない。高校の入学式まで休みであるのを良いことに、人通りの多い場所で一日、彼の姿を探したこともあった。それでも、見つからない。

こうなったら本当に、家を探すか。

(でもなんか近づきにくいんだよなあ……塚本は)

本家だとか分家だとか、いかにも厳格そうな響きだ。葉月の偏見だが。

しかし、そうも言っていられない。ここまで徹底的に日向が隠れているのなら、葉月も徹底的に探すしかない。

そう決心したものの、高校生である葉月の情報網なんて、たかが知れている。

(となると)

頼りになるのは、自分の足のみだ。

葉月の作戦は、『塚本』という苗字の家が近くにないか、一軒一軒尋ねて回るという、なんとも地道なものだった。

けれどその地道さが功を奏したのか、夜になる前には『塚本』の親戚だという家に行き着いた。

「ええ、塚本家ならよく知っているけれど……あなたは？」

中年のその女性は、不審そうに眉を顰めた。見ず知らずの女子高生が、いきなり親戚の

家について尋ねにやってきたら、誰だって不審に思うだろう。

「私、塚本日向くんの中学時代の同級生だった、澤村葉月といます。日向くんのことについて、お尋ねしたくて……」

説明した後で、はっと気づく。「塚本」と親戚であるといっても、分家はいくつもあるのだ。その中のどの家の親戚なのかまでは、まだ聞いていない。もしかしたら、日向のことを全く知らないという可能性もある。

どうしよう、と葉月は内心焦ったが、目の前の女性は「ああ」と心当たりがあるかのようには頷いた。

「日向くんね。ええ、知ってるわよ」

光が差したかのようだった。

まさか。こんなすぐに見つかるなんて。近づきにくいだとか言っていないで、もっと早くこうすれば良かった。

そう思っ、葉月は俯けていた顔を上げて女性に目を向けた。

しかし彼女は、申し訳なさそうな、悲しそうな、そんな表情を浮かべていた。

「でも……ごめんなさいね。彼については、何も話すなって……口止めされているの」

「……え？」

「せっかく訪ねてきてくれたのに、ごめんなさい。けれど、これ以上は何も言えないの」
そう言うと、彼女は口をつぐんでしまった。

葉月はそこから動けずに、先ほど目の前の女性から言われた内容を頭の中で反芻していた。

しかし、女性が困ったような表情を浮かべているのに気づくと、一気に目の前の現実を引き戻される。

「……わかりました。……お邪魔して、すみませんでした」

一度、頭を下げると、その家を出た。

ふと辺りを見て、ここがよく知らない住宅地であることを改めて知る。とにかく手当たり次第に家を回っていたいから、普段使わない道にまで入ってきていた。

(……何やってるんだろう、あたし)

友達と喧嘩してまでも、たった一人の少年への想いを諦めることができず、こうして歩きまわつて。その結果得られた情報が、「口止めされている」だなんて。

正直なところ、まさか親戚にまで手を回しているだなんて思わなかった。

急激に疲れがやってきて、葉月は近くの公園に足を踏み入れた。少し、休みたかった。小さな公園だが、ベンチぐらいはある。

ベンチに乗つかつている数枚の葉を手で払い、葉月はそこに腰掛けた。知らず、大きなため息が零れる。

俯くと、自分の長い黒髪がはらりと横顔を覆い隠した。

(……どこにいるのよ……)

手のひらで、顔を覆う。

涙は出ない。ただ、悔しくてたまらなかった。

(そんなに、あたしから逃げたいの?)

葉月だけじゃないかもしれない。何か、他にも隠れなければならないような理由がある

のかもしれない。

それでも、ここまで徹底されると、もう二度と葉月の前に姿を現す気はないのでは、と思えてくる。

『これだけ連絡がつかないなら、きつとこの先もずっと同じ。塚本くんは、見つからない』
萌々の言葉が、脳裏に蘇った。この先も、ずっと同じ。見つからない。

(……もう、会えない?)
ぞつとした。

本当に、このまま二度と会えないのだろうか。

「……っ、こんなとこで何してんのよ……!」

不意に耳に入ってきた声に、驚いて顔を上げた。外はすっかり暗くなっていたが、外灯の明かりでぼんやりと照らされた相手は、すぐに判別できた。

「……萌々?」

僅かに顔を上気させ、髪も少し乱した萌々が、怒ったような表情でこちらに近づいてきた。

「おばさんから、葉月が帰ってこないって連絡があっただよ!」

「え……えっ?」

驚いて、携帯電話を確認してみる。そこには、着信が何件も入っていた。発信元は、自分の家の電話。そして画面の右上に小さく表示されている時計は、いつもの帰宅時間を大幅に過ぎていることを示していた。

「嘘……っ! いつの間にこんな時間……!」

「こんの……」

すう、と大きく息を吸ったかと思うと、

「馬鹿っ！」

近所迷惑を心配してしまうほどの大声で、萌々は怒鳴った。

「何してたか知らないけど、遅くなるなら一言ぐらいおばさんに連絡入れときなさいよね！」

「ご、ごめんなさい……日向の家を……」

思わず口に出してしまってから、はつとした。それは萌々も同じで、それまでの激高を急に引つ込める。

かと思えば、萌々は小さく息を吐き出し、葉月の横に腰掛けた。

「……とりあえず、おばさんに電話しときなよ」

「う、うん……」

言われた通り、電話をかける。

案の定、連絡がつかなかったことを怒られはしたが、萌々とも合流したことを告げると、早く帰ってこいと言われただけだった。

「……お母さんが、萌々にもお礼言つといて、って」

通話を終了する間際に言われたことを伝える。萌々は空を仰いでいた。

「いいよ。今度、葉月に何か奢ってもらおうから」

「あはは……。うん、奢ります」

携帯電話をポケットにしまいながら、葉月はどこことなく温かなものを感じていた。

息を切らして、髪を乱して。きつと、慌てて探してくれたのだろう。この辺りは、萌々だっってほとんど来たことないはずなのに。

(……喧嘩、してたのに)

申し訳ないと思いつつ、嬉しかった。頬が勝手に緩む。

「……ごめんね」

その時、隣からぼつりと謝罪の言葉をかけられた。

驚いてそちらを見たが、萌々は視線を空に向けたままだ。

「……葉月のこと探しながらさ、色々考えてたんだ」

「色々って？」

「……もしかしたら、葉月はずっとこんな気持ちなのかなあ、って」

萌々の言っていることがよくわからず、首を傾げる。それをちらりと横目で見やった萌々は、今度は前かがみになって俯いた。

「……見つからなかったらどうしようとか、ちゃんと無事にいるだろうかとか……葉月を探してる間、ずっと不安でさ。で、思ったんだよね。……葉月もずっと……塚本くんを探しながら、こんな不安と戦ってるのかも、って」

眉を顰めた萌々は、どこか自嘲気味に微笑んだ。

「それでも、葉月は塚本くんのことを好きって言った。……私は、完全に葉月の気持ちをくびびってたなあ」

体を起こした萌々が、まっすぐに葉月を見据える。

「だから、ごめん」

「……萌々」

「正直に言うとなね、後ろめたい気持ちもあつたんだ。……あの日、葉月が塚本くんに告白するように仕向けたのは、私だから」

あの日、というのは中学校の卒業式の日のことだ。確かに、葉月が日向に告白できるようにセッティングしたのは萌々である。

「それが、あまりにも予想外の結果になっちゃったから。……なんか葉月に申し訳なくて、早く忘れられるように、って焦ってた」

それは、初めて聞かされる彼女の思いだった。まさか、萌々がそんな風に考えていたなんて、思つてもみなかった。

「でもさ、そんなの関係なかったね。私が何をしようとしまいと、どっちにしろ葉月は塚本くんのが大好きで、しばらく忘れられないってことには変わらないんだ」

そう言つて、再び萌々は空を仰ぐ。その顔には、晴れやかな笑顔が浮かんでいた。

「だから、応援するよ」

「え……」

「私も……できることなんて、何もないかもだけど。それでも、葉月が塚本くんを見つけないで思いが変わらないんなら……私は、できる限りそれに協力する」

驚いて何も言えずにいると、こちらに顔を向けた萌々が、にっと笑った。それを見て、不意にまた、目頭が熱くなる。

それを隠すように、萌々の肩に顔を押し付けた。

「……あたしの方こそ、ごめんね」

ようやく口にできたその言葉に、胸のつつかえがすうつと消えていく。
萌々の手のひらが、ぼんぼんと頭を優しく叩いてくれた。

すっかり暗くなつた夜道を、二人で歩く。

「そっか……じゃあ、本当に思つた以上に手がかりないんだね……」

今日、日向の親戚という人に聞いた話を萌々にも話すと、彼女は難しい顔をした。

「うん。でも……」

先ほどと状況は何も変わっていない。手がかりは一つも得られていない。

それでも。

「なんとなく、心強い感じがする」

協力すると言ってくれる人がいるだけで、こんなにも気持ちは変わるものなのだ。

萌々は不思議そうに目を瞬かせていたが、やがてにつこりと笑い、励ますように葉月の背中を強く叩いたのだった。

少し痛かったが、葉月にはそれが、何よりも力強いエールに感じられた。

NONSTOP



あたりまえの こと。

水面浮月

Illustration: 新月竜

※『あたりまえのこと。』は作者急病のため休載させて頂きます。



HELP!

ターニング
ポイント

諸星崇

Illustration: 橘ぽん

あらすじ

ヒロキはこれといってやりたいこともない、平凡な高校生。高校入学を機に始めたアルバイト先で、ダンサーを目指すヤヨイと出会う。

曲者ぞろいのバイトの先輩たちにも囲まれて、なんでもないヒロキの毎日が、少しずつ転換点に向かっていく。



ヤヨイ

私立優華女学院高等部の三年生。ダンサー志望で、アルバイトの合間に練習にはげむ。無口で、感情表現が小さい。



ヒロキ

市立中央高校の一年生。高校入学を機に駅前のショッピングモールでアルバイトを始める。ごくごく平凡な少年。

第二話 寄せ集めのフレンドシップ

1 友情トーク

西日の差す駐車場で、彼女はじつと遠くを見つめていた。
「きれいだね」

ささやく声が風に消える。

返事はしなかった。できなかつた。オレンジ色に染まる横顔は、視線だけではすまらず、
声すらも奪う。

「ねえ」

不意に、彼女が振り向いた。真正面から思い切り目が合った。

あわててそらすと、彼女の声がふつと、さびしさをはらんだ。

「わたしたちって、やっぱり友達なのかな？」

「え……？」

どきりと、心臓がはねる。思わず戻した視線に、夕日の光をはじく視線がからみついた。
「ただの友達でしか、ないのかな」

うるんだ目。笑っているのに、泣いているような口元。愁いとは、こんな表情のことを言うのだろうか。

「ヒロキ……」

自分の名前がこんなに甘く、心地よくひびくなんて知らなかった。

目を奪われ、耳を奪われ、口から出る言葉も一つを残して消え去っていく。

「ヤヨイ……」

ゆっくりと、二人の間の距離がなくなっていく。差し出された手をおたがいが取る。まるでそうするのが当然であるかのように、無意識に取る。

「ヒロキ」

「ヤヨイ」

おたがいの目に、おたがいの姿以外は映らない。名前を呼び、見つめ合い。

そして、一気に近づく。

「ヒロキ！」

「ヤヨイ！」

「だあああああーっ!!」

そこまでいったところで、たまらずヒロキは大声を上げ、その場に乱入した。

「こちら。上演の妨げになるようなことはご遠慮ください、お客さん」

「これが黙っていられますか！ やめろー！ わーっ、わーっ！」

イケタニに羽交い絞めにされたまま、ヒロキはやみくもにわめき散らした。

鍛え上げられたイケタニの太い腕を振りほどくことは、情けないが、ヒロキにはできない。自由な口で、どうにかその場をかき乱すしかなかった。

駅前のショッピングモール内にある、メカニックの待機室。殺風景な空間は、客の目にふれる場所ではない。スタップフォンリーの扉をくぐった、その先の一室だ。

そこは高校入学を機に始めた、ヒロキのアルバイト先でもある。イケタニ、ヒトツモリ、カワナ、クスダ、ムロフシという五人の先輩が在籍しており、ヒロキをいろいろと指導してくれている。

ついでに、いろいろとからかってもくれている。

「こういう話じゃないの？」

「全・然・ちがいますよ！」

しれっとした顔で言うムロフシに、ヒロキは全力で言葉を投げつけた。

いっしょに巻き込まれたヤヨイのほうは、ヒロキのとなりで、病院にかつぎ込まれても不思議ではないほど顔を真っ赤に染めている。

どんなにたちの悪い風邪を引いても、ここまではならないだろうというほどだ。もともと無口な性格の彼女だが、もう完全に言葉を失ってしまった。

「ヒロキが言ったんだろ。『友情ってなんですか』って」

「その答えがこれですか！ 誰もオレとヤヨイさんの話だなんて、言っていないじゃないですか！」

むきになればなるほど、五人の先輩たちのニヤニヤ笑いは深まっていく。からかわれて

いるのはわかるのだが、冷静になれない。こういうときの、年上の人たちの結束力はずるいと思う。

たしかにヒロキは、さきほどのような質問をした。だが、それがどうして、ヒロキとヤヨイがいい雰囲気になるという小芝居に変わるのだ。

「いやー、うまいもんスね。クスダさんもヒトツモリさんも」

「関西人やから。ネタ振りされたからには答えんと」

「台本もあつたしね。先生、ナイス台本」

わめくヒロキと小さくなっているヤヨイをよそに、先輩たちは好き勝手に盛り上がっている。そんな中、ヒトツモリに持ち上げられたムロフシが苦笑を返した。

「どこが。ベタベタにもほどがあるでしょ、こんなの」

そう言って、ムロフシは数枚のA4用紙をびらびらと振った。ヒロキとヤヨイをネタにした即興の台本だ。さきほどのヒロキの質問を受けて、ムロフシが十分で作った。

出演は、こういうお祭りごとではすぐに乗ってくるクスダとヒトツモリ。ト書きの部分はムロフシが朗読した。

大ウケだった。

「キスシーンまで持っていきたかったんだけど」

「キ……ッ、ど、どうしてそんなところまで書いてるんですか！」

「青春モノの基本だつて編集さんに言われたんだよ。ないとダメなんだつてさ」

ヒロキの抗議をさらっとかわして、ムロフシは台本にペンを走らせた。ヒロキが大声を上げたところに『限界』と書いている。がまんの限界をメモしたらしい。

(こういう人なのか……)

ヒロキの肩が、力なく落ちた。

館内の機械系の整備と全体清掃、さらに荷運びや巡回も担当するメカニック。男所帯の肉体労働部署で、メンバーはヒロキを含む六人だけだ。みんな体育会系で、活発な男たちの集まりである。

ただ、ムロフシは少し毛色がちがう。N市から何駅か行ったところにある大学に通う彼は、イケタニたち他のメンバーと比べて、だいぶインテリ派寄りだ。身体は細く、一人だけ眼鏡をかけている。口数もそれほど多くない。

一見、まじめそうだし、話してみると、やはりまじめな答えが返ってくる。ヒロキも何度か、学校の課題も教えてもらった。

なんでも作家を志望していて、実際に一冊、すでに出版されているという風変わりな先輩だ。本を書くなど、ヒロキには想像もつかないので、ある意味、メカニックの中では尊敬している人でもあった。

しかし、ヒロキの観察は甘かったようだ。大まじめな顔でずれたことをする。それがムロフシのやり方だと、今回は思い知らされた。

「で、なんだっけ。男女の友情？」

「そんなもん、ウンだぜ。成り立つわけねーよ」

「経験者は語る？ カワナさん」

「語りますね。男と女で友情とかムリムリ。ありえないツス。どうせやるかやらないかの話に」

「だから、そういう話じゃありませんって！」

あっさり下ネタに転がり出すところを、ヒロキはすんでのところで止めた。おしやれで顔立ちもいいカワナはもてる。もてるが、とにかく口さがない。放っておいたらどこまでも下世話な話を続けてしまう。

ヒロキは強引に話をぶった切った。

「ヤヨイさんが今度受けるオーディションでそういうテーマが出たんですよ！ ヤヨイさん、友達いないって言うから！」

「は、はつきり言わないでよっ」

と、今度はヤヨイから抗議の声が飛んできた。

ヤヨイもこのシヨッピングモールでアルバイトをしている高校生だ。ヒロキよりは二つ年上。彼女はメカニックではなく、テナントのファーストフード店の店員をしている。

縁あって、ヤヨイはメカニックと交流があり、ヒロキとも知り合った。学校と学年はちがうが、同じ高校生ということもあって、二人はよく顔を合わせる。

周りとあまりなじまないたちのヤヨイがくれた物言いをするのは、メカニックの面々の前だけだ。

「なに、ヤヨイちゃん、どっか受けるの？」

そのメカニックの面々は、男所帯の悲しさか、ヤヨイのこととなると急に親切になる。

ヒロキの質問はあつという間にからかいの種にしたくせに、ヤヨイが関係すると知ると、途端に笑いを引つ込めた。

ヤヨイのほうもそれで落ち着きを取り戻し、ぼつぼつと口を開く。

「はい。ちょっと興味のある公演があつて。そのオーディションのテーマが『友情』なんです」

ヤヨイはダンサーを目指している。真剣に、だ。バイトの合間に、駐車場の空きスペースで熱心に練習に打ち込んでいたのが、ヒロキとの出会いでもあつた。

そんな彼女は近々、プロの劇団のオーディションを受けてみようとしている。その課題が『友情の表現』なのだそうだ。

最初はヒロキがその話を聞いたのだが、高校生にそんな哲学的なテーマをぶつけられても答えが出ない。

そこで先輩たちに相談してみたのだが、ああいう結果になつたのである。

「友情ねえ、友情。先生、友情つてなんですか」

『友情』。友人間の情愛。友達のよしみ。ちなみに『情愛』。なさけ。いつくしみ。愛情」

電子辞書を開いたムロフシが内容を読み上げる。が、ヒロキにはさっぱりわからない。ヤヨイもとまどっている。

彼女が知りたいのは、そんな言葉の意味ではないだろう。

「先輩たち、友情を感じるこつとてありますか？」

『う〜ん……』

五人がそろつて難しい顔をした。やはり、簡単に言葉にできるものではないらしい。ヒロキとしても、そんな問いかけをされても答えられる自信はない。

と、イケタニがなにかを思いついたようだった。

「友情しぱりトーク大会とか、やってみよっか」

「ああ、ひさしぶりにメシ食う？ いいかもね」

ヒトツモリがそれに同調する。正社員でメカニツクの責任者でもある二人は、シフト表を引っ張り出してなにやら相談を始めた。

「この日なら、全員来るかな」

「ヤヨイちゃん、今度の水曜日ってシフト入ってる？」

ヒトツモリの問いに、ヤヨイは小首をかしげながらうなずいた。

「はい。九時までです」

「じゃ、終わったらここ来てよ。晩飯は食わずにね」

ヤヨイがさらに首をかしげる。不思議そうな顔をしながらも、とりあえず、はいと答えた。

なんのことだろう。ヒロキはイケタニに聞いてみた。

「なにかするんですか？」

明日の天気のように、イケタニは簡単に答えてくれた。

「たいしたことじゃないよ。みんなでメシ食うだけ」

「どこで？」

「ここぞ」

人差し指が、待機室の床を指していた。

「待機室で全員でメシ。たまにやるのよ。みんなで会議したりするとき。そういや、ヒロキの歓迎会がまだだった。それもいっしょにやろう」

『さんせー』

言うまでもないが、待機室は職場だ。休憩中の人間が食事をするのは一向にかまわないが、そうでない者も集めて食事となると、話はちがう。

イケタニは責任者だ。常識的に考えれば、むしろ止める側だろう。

「いいんですか？」

「いいよ、いいよ。そのかわり、誰にも言っちゃダメだよ」

再三の念押しにも、あっさりとした承が出る。誰も反対しない。ヒロキもヤヨイも、目を丸くした。

メカニックの無法ぶりは、高校生二人の想像を超えたところにあつたのだった。

2 アウトロー晩餐会

水曜日の午後九時。メカニックの待機室ではメンバーの六人と、ヤヨイが事務机を囲んで座っていた。

真ん中にはオードブルのつめ合わせが、でんと鎮座している。スープの惣菜売り場ときどき登場する、数人前をつめ込んだ円形の大型容器だ。ふたには「半額」と書かれたシールが貼られている。

他にもからあげやらトンカツやらきんぴらやら、ご飯のおかずのパックがいくつも並び、それぞれの前には紙コップがあつた。飲み物のペットボトルも、何本も置かれている。

さすがにアルコールは禁止だが、それ以外はほぼそろい踏みだ。

机の下には、蒸気を吹き出している調理用の家電製品まであるのだから。

「なんで電気釜なんてあるんですか？」

「食糧事情が悪すぎるからだよ。毎晩、ハンバーガーかコンビニ弁当じゃ減入るだろ。せつかく下にスーパ―があつて、閉店前の値引き価格に一番乗りできるんだぜ？ 有効活用しない」と

ヒトツモリが答えたところで、ちようどご飯が炊けた。

この電気釜はメカニツクの備品だ。今日のために持ってきたものではなく、常時、待機室に置かれている。使いたい者が使い、きちんと洗って元に戻すというルールで、夕飯どきに役立てられている。

ヒロキは使ったことがないが、もともとの持ち主であるヒトツモリや、食費を節約しているクスダ、ムロフシらはよく使っている。ご飯さえあれば、おかずを用意すればいいので、食費がかなり浮くらしい。

米は、なくなったら誰かが買ってくることになっている。ちなみにコーヒー用の電気ポットで作れる即席みそ汁も、米といっしょに戸棚にしまわれている。

弁当を温めるための電子レンジもあるので、メカニツクの環境は至れり尽くせりといったところだ。

「ほーい、じゃあおつかれー」

『おつかれーっす』

イケタニの音頭で、奇妙な夕飯が始まった。

何度も言うが、ここはヒロキのアルバイト先だ。この時間のシフトはイケタニとヒトツモリが担当していて、二人だけ上下つなぎの作業服を着ている。しかし、他は全員、私服だ。ヒロキは、なんだか友達の家に上がり込んでいるような錯覚を覚えた。

「ホントにいいんですか」

「気にするな。部長なんて昔、作業用のバーナーでチャーハン作ってたんだぜ。うちは火は禁止してるから平気平気」

どさくさにまぎれてヒトツモリが上司の悪口を言う。ヒロキは聞かなかったことにした。ただでさえ、規則違反の四文字が頭をちらついて離れないのだ。突っ込んで聞いたら、ますます逃げ場がなくなる気がした。

「さてと。今日のトークは『友情』しぼりだっけ。ヤヨイちゃんに『友情』のなんたるかをわかってもらわないとな。なんか聞いてみたいこととか、ある？」

問われたヤヨイは、からあげをもくもくと食べながら、手で「ごめんなさい」と断った。彼女はヒロキとちがって、この異様な食事風景を受け入れているように見える。むしろ、大人数で食べることが楽しそうだ。

お茶を一口飲んで、ヤヨイはおもむろに口を開く。

「友達って、どんなことするんですか？」
空気が固まった。

「……すげーこと聞くね、ヤヨイちゃん」

「念のためだけど、いるよな、友達。一人ぐらい」
「今までにもおったよね？」

「い、います！、いました！」

まるでヤヨイが今まで友達と接したことがないかのような空気が流れ、ヤヨイのほうがあわてて弁解した。先輩たちがほっと胸をなで下ろす。

ヤヨイは口下手で、友人も少ない。メカニックの先輩たちはそのことをひそかに心配していて、ヒロキにヤヨイの話し相手になってくれるよう言っていた。

先輩たちはみな、ヤヨイより年上だ。高校も卒業してしまつて、それぞれの生活を送っている。ヤヨイがメカニックの面々に心を開いてくれるのはうれしいが、やはり同年代の友人が必要だと、みんなが言っていた。

これでもみんな、ヤヨイやヒロキのことを考えてくれているのだ。

「あの、みなさんって、おたがいに友達だと思つてんです。でも、高校生同士だと、学校で会つたり、遊びに行つたり、想像できるけど、もつと大人の人たちつて、どうなのかなつて、思つて」

あたふたしながら、ヤヨイが言いたかつたことを伝える。そして、言葉が続かなくなつたところで、ぷしゅんと小さくなつてしまった。

先輩たちが苦笑する。肩をつつかれ、ヒロキはとりあえずヤヨイのコップにジュースを注いだ。

「この二人は、パチンコよく行くよ」

ムロフシがイケタニとヒトツモリを指す。つなぎ姿の二人は顔を見合わせた。

「そういえば、モリちゃん。最近、行つてないね」

「そうね。前は毎朝だったのにね」

イケタニとヒトツモリは夜勤のシフトを組むことがある。客の来ない夜中のうちに機械の整備をしようためだ。

ヒロキが入る前は、朝、仕事上がりに二人で連れ立ってパチンコ屋に向かうことが恒例となっていたらしい。

「行く前に牛丼屋で朝飯食っていくの」

「知ってる？ 店員によって丼の味、全然変わるのよ。イケメンの兄ちゃんが一番うまいのは、やっぱりイケメンパワーかな」

「あの兄ちゃん、べつの店に異動しちゃったみたいよ」

「そうなの？ もったいない」

一月ぶんの給料が三時間でふっ飛んだとか、知り合いのおじさんが大勝ちしすぎて黒服の男に連れていかれたとか、ヒロキがマンガの中でしか知らないような話がぼんぼん飛び出す。

語るイケタニとヒトツモリは、心底楽しそうだった。おたがいの呼吸がわかっているため、漫才のようにテンポよく会話が続く。聞いている側も笑い声が絶えない。

「カワナさんとクスダさんは飲み友達かな」

「そうッスね。つか、この間、行ったんスよ。もう、ひどかった！」

「だいじょうぶやって。帰ったから。駅で目え覚ましたりしてへんから」

「俺が連れていかなかったら、たぶん川の中で寝てましたよ」

「マジで!? ウソやん」

話題はカワナとクスダのほうに移った。

酒好きのクスダはたびたび飲み屋にくり出し、カワナがそれにつき合うことが多い。というのも、クスダの酒癖が悪いからだ。クスダは酔っぱらうと前後不覚になり、ところかまわず寝てしまう。

真冬に駅の構内で寝こけて、風邪をひいて欠勤したこともあるらしい。そこでカワナがお目つけ役も兼ねて、いっしょに飲みに行くようになったのだ。

「歩けない状態なのに、もう一軒行こう、もう一軒行こうってうるさくて」

「まだ十一時やったやん。行けるって」

「その後、コンビニの店員のお姉ちゃん、ナンパしたんすよ」

「それはなんとなく覚えてる」

「で、川にはまった」

「それは覚えてへん」

とぼけた顔のクスダがおかしくて、ヒロキは吹き出した。ヤヨイもくすくす笑っているし、イケタニたちは遠慮なく爆笑している。

ひとしきり笑った後、ムロフシが言った。

「こういうバカ話がさくつと出てくるのは、友達の証拠かもね。それだけいろんなこと、いっしょにやってるわけだから」

ヤヨイがこくつとうなずいた。なんとなく、すつきりした顔をしているように見える。

なにか、ヒントになったのかもしれない。その横顔を見ると、今度はヒロキのほうに話が振られてきた。

「ヒロキは、なんかネタないの？」

「いや、そんな無茶な話、ないですよ」

ヒロキはせわしなく首を横に振った。自分が友人たちとすることと言ったら、せいぜいカラオケやゲームセンターに行くことぐらいだ。イケタニたちのような武勇伝はとも持ち合わせていない。

「ヤヨイちゃんは？」

「ないです」

ヤヨイも同じく、首を振る。と、先輩たちはそろって表情をほころばせた。

「んじゃ、これから増やしていくように」

その一言はぼとりと、ヒロキの胸の奥に落ちた。

と、そのとき、内線が鳴った。イケタニが受話器を持ち上げ、耳をかたむける。

「部長が来た!？」

声が上がると同時に、ヒロキとヤヨイ以外の全員が、いつせいにイスを蹴立てて立ち上がった。

それまで談笑していた先輩たちが、一転して真剣な表情に変わる。カワナとムロフシが机を持ち上げて壁に寄せ、ヒトツモリが飲み物と食器をまとめて戸棚に放り込んだ。ご飯は電気釜に移され、おかずはクスタの口の中に消える。

電話を切ったイケタニが扉を開け、顔だけ振り返って言った。

「三分かせぐ」

『了解!』

イケタニが出て行く。ヒロキたちもせかさされて、あわてて立ち上がった。

カワナがイスをひとまとめにして部屋の隅に積み上げる。足元の電気釜は絶妙の力加減で蹴飛ばされ、壁まで滑っていった。待ちかまえていたムロフシが、その上にダンボールの空き箱をかぶせて偽装する。

クスダが工具を床にばらまいた。中央には清掃用の機械の部品を置く。部屋の中はすっかりかたづけられ、まるで今しがた、部品を組み立てたかのような状態だ。

「ヒロキとヤヨイちゃんはこちらだ」

清掃道具の入った大型ロッカーの前で、ヒトツモリが手招きした。中には人が入れそうな空間ができています。

うながされるまま二人は中に入ったが、ヒロキの頭を不安がらすめた。

「見つかったらどうすればいいんですか」
「マネキンのふりしろ」

無茶苦茶なことを言うと、ヒトツモリはそのままロッカーを閉めた。

直後、待機室の扉が開く。

『お疲れ様です！』

ロッカーの中は真つ暗だ。目の前のヤヨイの顔も見えず、音で判断するしかない。耳をすますと、ヒロキの知らない壮年の男性の声が出た。

「なんでこんなに人がいるんだね？」

「研修です。個別に教える時間がないので、勤務時間外ですが、集まってもらいました。ちょうど今、部品を組み立てたところですよ」

ヒトツモリがぬけぬけと言うと、部長は感心したようにうなずいた。ほんの三分前まで

ここでなにをしていたかは、まったくわからないようだ。

「部長、今日はどうしたんですか？」

「いや、近くに来たのでね」

「待機室はいつもどおりですよ。それより店舗のほうを見られますか。防火シャッターの件もご相談させてください」

「ああ、そうだったね」

イケタニとフタツモリが言葉たくみに言いくるめると、部長と思しき声は遠くになっていった。しばらく、部屋の中に沈黙が流れる。やがて、残ったヒトツモリが大きく息をついた。

「ふう、あぶなかった」

立ち込めていた緊張感がゆるみ、ロッカーの中にも伝わってきた。ヒロキもほっと息をつく。ドアを小さくノックすると、ヒトツモリが開けてくれた。

「いやー、急に放り込んで悪かったね」

と、言いかけたヒトツモリが、ぴたっと動きを止める。まじまじとした視線がヒロキに注がれた。カワナにクスダ、ムロフシも同じように見ている。

なんだろうと思つて、ヒロキは四人の視線を追った。

ヒロキが、ヤヨイを壁に押しつけるような体勢になっていた。

「いっ!？」

あわてて飛びのこうとしたが、せまいロッカーの中だ。身じろぎがせいっぱいだった。ヤヨイは硬直してうつむいたまま、早口でつぶやく。

「わ、わたし、マネキンだから」

意味がわからない。とにかくヒロキが出ようとしたとき、一瞬早く、ボタンと音がした。「ちよつとー!」

ふたたび視界が真っ暗になる。ドアを押しても動かない。すぐそこでヒトツモリの声がした。

「いやー、悪い悪い。じゃましないから、ごゆつくり」

「ワケわかんないこと言っていないで、出してくださいよ!」

ヒトツモリがもたれかかっているのだろう。ドアはびくともしない。わめくヒロキの耳に、カワナたちの声が聞こえた。

「じゃ、帰りまーす」

「ヒトツモリさん、結果報告、頼みますよ」

「ヒロキ、ほどほどに」

ヒトツモリを除く三人は、さつさと引き上げてしまった。明らかにおもしろがっている声だった。

結局、ひとしきりヒロキにさわがせて満足したのか、ヒトツモリは満面の笑みを浮かべてロッカーを開けてくれた。

後始末はやっておくからと帰してくれたのだが、ヒロキはいまいち、素直に感謝することができなかった。

3 小学校の放課後

「おはようございます」

「おはよう」

鉄扉を開けると、先に入っていたムロフシがあいさつを返してくれた。

ロッカーからつなぎを出して、手早く着替える。今日の夕方はヒロキとムロフシが担当するシフトだ。

ムロフシは手持ちのノートになにか書き留めていた。

「執筆ですか？」

「うん。ネタ出しだけだね。この間、けっこうおもしろい話が出たから」

先日の待機室での友情トークをまとめているらしい。たしかに、本の中に登場してきそうなエピソードがいろいろあった。

あの日は、ムロフシにとつても有意義な時間だったようだ。

「あれ、参考になった？」

「えらい目にありました」

半眼でヒロキが答えると、ムロフシはさっと視線をそらした。ヒロキはしばらく恨みがましく見ていたが、それ以上責めてもしかたがないので、話題を戻した。

「わかんないですけど、ヤヨイさんはオーディションがんばるって言ってました。そういえば、ムロフシさん、あんまりしゃべってなかったですね」

「僕は友達少ないからね」

あいかわらず、ムロフシはこういうことをさりとってのける。ヒロキが返事に困っている、ムロフシはごめんごめん、と軽く謝った。

「べつにいじめられてたとか、そういうのじゃないよ。高校時代の友達は何人かいる。けど、大学ではそういう人はできなかったから」

ムロフシは地元の出身ではない。大学進学を機に、実家を出て一人暮らしを始めたのだそう。

大学は、高校までとまったくちがうという。講義は学生がそれぞれで選択するので、時間割はバラバラだ。朝の決まった時間に登校し、同じ教室で何十人もクラスメイトと何時間も過ごすような環境ではない。

日によって会う人はちがうし、行き帰りが同じになる人などほとんどいない。

ヒロキは、とりあえず教室に行けば、知った顔が集まっている。しかし、ムロフシはそうではなかった。

「こつちには知り合いが一人もいない上に、僕は人づき合いが下手だから。学校にもそのうち興味がなくなっちゃったし、結局、友達と言える人はできなかった。ここに来るまではね」

時間をもてあましたムロフシはアルバイトを思い立ち、接客をしなくてすむメカニックを選んだ。そして出会ったのが、イケタニたちだった。

メカニックの待機室に来れば、いつもイケタニたちと顔を合わせる。なにより、全員で協力しなければ、少人数のメカニックは仕事にならない。放っておいても、おたがいにコ

コミュニケーションを取るようになる。

一月も経たないうちに、ムロフシはイケタニたちとすっかり打ち解けていたという。

「メカのみんなが、こつちでできた僕の友達だ。名前とだいたい歳のと、あとは人となり。それぐらいしか知らないけど、こうしてわいわいさわいでいられる。なにかあったら話すことができる。なつてしまえば、友達なんて簡単にできるもんだよね」

それを聞いたヒロキの頭に、ふとした疑問が浮かんだ。

「あの、オレ、ムロフシさんの友達ですか？」

「そうだよ。誰かに紹介するときはそう言う」

「年下ですけど」

「関係ないよ。ヒトツモリさんとクスタさんは僕より上だし、カワナさんはいっしょだけど、イケタニくんは下。バラバラだ。けど、誰も気にしない。そんなもんさ」

いまいちピンと来ないヒロキの顔に、ムロフシはどこか納得したようにうなずいた。

「高校生だと、まわりは同じ年で固まつてるから、気になるかもしれないね。でも、高校を出ちゃえば、年齢のちがう人とのつき合いのほうが圧倒的に多い。アルバイトはいい選択だと思うよ。学校じゃできないことができるでしょ？」

今度は、ヒロキのほうで納得してうなずく番だった。

思い返してみると、学校とメカニックとで過ごす時間は、まったくちがうものだ。学校には友達がいる。昨日見たテレビの話や授業の話、テストの話、誰と誰がつき合っているとかいないとか、いろいろなことを話す。

けれど、学校ではあまり身体を動かさないような気がする。そこに、ヒロキはなにか引つ

かかるものを感じた。

メカニクでもいろんな話をする。学校のことも、テレビのことも話題にする。教科書の内容を教えてもらったこともある。

それ以上に、なにかと動き回っている印象が強い。身体で覚えているというか、できごととして覚えていることが多い。

それこそ、この間の夕飯もそうだった。

「ああやってメシ食ってるだけでも、けっこう冒険でした」

「そうだろうね」

笑って、ムロフシはなにかを思いついたように、天井を見上げた。

「今のセリフ、いいな。今度使おう」

ムロフシがペンを走らせ、ノートを閉じた。ちらりと時計を見る。シフトの始業時刻だ。

「駐車場の見回り、行ってきます」

「はいはい。ヒロキも来てくれたし、僕もそろそろ仕事しよう」

ゴミ袋を持って、ヒロキはいつもの非常口から駐車場に向かった。

車の列の間を、吸い殻やら空き缶やらを拾いながら歩く。やがて、端のほうのスペースから、軽快なステップの音が聞こえてきた。

のぞいてみると、イヤホンをつけたヤヨイが一心不乱に踊っていた。しなやかな手足がはね、髪が左右に流れる。そこはヤヨイの世界だ。じゃまにならないよう、ヒロキはヤヨイが動きを止めるのを待った。

ポーズを決めたヤヨイがイヤホンをはずす。そして、ヒロキのほうに気づいた。ヤヨイ

はふっと表情をやわらげる。

「おつかれさま。今から？」

「はい。ゴミ拾いです」

答えながら、ヒロキはヤヨイに歩み寄った。ヤヨイのほうは休憩時間らしい。腕時計を見て、まだ時間があることを確認したようだ。タオルで汗を拭きながら、ヒロキに話しかける。

「この前は、おもしろかったね」

「参考になりました？ ムロフシさんがちよつと気にしてました」

「なったよ。楽しかった」

ヤヨイが微笑みながらつぶやいた言葉が、ヒロキの耳に残った。

「あんなに大さわぎして笑ったの、小学生のときみたい」

ヒロキの中で引つかかっていたことが、すっと落ちた。

(ああ、そうか)

脳裏に記憶がよみがえる。鮮明なものではない。一つのイメージだ。

夕日の中、校庭で下校時間まで走り回り、転げ回った日々。きちんと約束をしたわけでもないのに、決まった遊び場にみんなが集まって、自分たちのルールでかけ回った。

それはヒロキが小学生の頃のこと、ふとした放課後の記憶だった。

「そうですね。小学生の頃のこと、思い出しました。年取って、やってることは変わるけど、感じることは同じなんですわね」

ヒロキはヤヨイに、頭をよぎったことを話してみた。

子どもの頃、友達がどうか、友情がどうか、当然、気にもしなかった。いつしよに遊ぶことが当たり前で、みんなでなにかをするのだと信じていた。

それは、メカニツクの先輩たちの姿に通じるように思う。彼らは手を取り合うこと、同じ空間で話し、さわぎ、笑うことを、当然のようにやっつてのける。

その輪の中に入ったヒロキとヤヨイは、たしかにそこに友情を感じた。言葉にはうまくできないけれど、そこに友情があったことは、確信できる。

友情とは、とてもなつかしいものなのかもしれない。

「そっか。そうだね」

ヤヨイは短く答え、目を伏せた。なにを思い返しているのかわからないが、口元はやわらかい。

きつと、昔はヤヨイも、仲のよかった友達がすぐ近くにいたはずだ。手の届く場所に、友情というものが置かれていたはずだ。

ふれられなくてもよかった。ふれる必要がなかった。

そしてそれは、今も彼女の横に、ヒロキとヤヨイの間に、きつとある。

「ちよつとやってみる。見てくれる？」

「いいですよ」

ヒロキの前で、ヤヨイはオーディションの課題曲に合わせてステップを刻み始めた。正直なところ、ヒロキにはダンスの良し悪しはわからない。

けれど、ヤヨイの屈託のない表情は、とても印象的だと、そう思った。

NONSTOP

ここでは本誌掲載七作のそれぞれについて解説する。

第二号である今回は「友情」をテーマとしていただき、また裏テーマとしての季節は「初夏」をお願いした。

『クローバー』 入江棗

中学三年生の千伽、「気難しい地主の息子」塚本楓、千伽の幼馴染の孝士の三人が育む人間関係を中心に、N市の高速道路問題をちよつとしたスパイスとして絡めつつ描いていくシリーズ。

今回は千伽の実家が直面する万引き問題（もちろん、その一因には高速道路の件がある）をテーマにそれぞれの揺れ動く心と、お互いに「こいつ気にくわねえ」な関係の楓と孝士がどう変わっていくか、をじっくり楽しめる。

『Dear My Life』 貴水玲

母の母校に進学した花を三つの衝撃が襲う。「お嬢様学校」という世界、自分に隠された出生の秘密、そして素敵な男子との出会い――実に「ザ・少女小説」な展開のこのシリーズ。今回は二話目らしく、前回提示されたさまざまな状況に対して、花がいかに立ち向かうか、あるいは立ち向かえずに挫折するか、というところに焦点が置かれる。もちろん、挫折した少女にはヒーローの手が差し伸べられ、勇気ある行動にはささやかな報酬もたらされるわけで、まさに「少女小説」だ。

『やろうぜ!』 土本強

高校一年生の中村と田尻、副担任の横井。前回「やろうぜ!」とばかりにゲーム作りへ走り出して即売会での領布にこぎつけた三人だが、いきなりストップ、というところから今回は始まる。

ある意味当然だが、ただ作るだけだったゲームはまったく手にとってもらえなかったのだ。そこから始まる意見の対立と決別。大人たちの（わりと不器用な類の）姿を見て、新たな決意は生まれるのか――。相変わらずの情熱と、多種多様な小ネタが楽しい作品。

『From・N』 番柵葵

田舎にうんざりしていつか出て行ってやろうと考える隆也と、こんな田舎だからこそ名物を作ってやろうと考える幼馴染の来夢。彼女に引きずられ、隆也は今日も「町おこし」騒動に巻き込まれる。

そんな今回のキーワードは「燃えるような恋をしよう!」というわけで、地元の神社に縁結びのご利益をでっち上げて名物にしよう、というアイディアから始まるドタバタ騒ぎ。もちろん来夢の思いつきだから隆也には皆様ご想像通りのとぼっちりがかかることになるのだが、それだけではなくて、というのが今回の見せ場。ただのハイテンション Comedyには終わらない、甘酸っぱい青春がいつぱいに詰まっている。

『響け、私たちの歌声』 広野未沙

望まずしてお嬢様学校に入ってしまった有香は、クラスメイトのひかりに誘われて合唱

部に入ること。初めての合唱祭もどうにか切り抜けて一安心の有香だったが、なんだかひかりの様子が変だ……というわけで、今回はごくごくささやかな「友情」の物語。大きな事件がなかったって、ちよつとドキドキしたりワクワクするような物事は転がっているものだし、そういうものこそ掛け替えのないものなのだ、と思いついてくれた。

『平行線シンдрーム』 水島朱音

一年以内に僕を見つけることができたなら、返事をする――卒業式の日の葉月の告白に、彼女の思い人である塚本日向が返したのは、そんな謎めいた言葉だった。高校生になった葉月はさつそく彼を探すけれど、なぜか大きくもないN市で日向を見つけることはできない。彼はどこにいつてしまったのか？ そして、葉月は本当に彼を探すべきなのか？

完全にプロログだった第一回を受けて、いよいよ物語が動き出す。青春時代のモヤモヤとした気分、相手を思うからこそそのすれ違っていく気持ちがいっぱいにつまみついて、ふと過去を振り返りたくなる。

『ターニング・ポイント』 諸星崇

平凡な少年ヒロキとダンサーを目指す少女ヤオイの微妙で甘酸っぱい関係と、それをわりと（面白半分）暖かく見守るバイト仲間の面々を描く、ささやかでにぎやかな物語。

ひよんなことから「友情って何だろう」という話になって、シヨッピングモールでメカニックとして働く面々それぞれの「友情」が語られていく。それらはみんな大げさでもドラマチックでもないけれど、そうした平凡の中に本当に美しく心に染み入るものがあ

る、そんなお話。

2011年01月21日 発行

著 者 入江棗／貴水玲／土本強／番棚葵／広野美沙／水島朱音／水面浮月／
諸星崇

企画・監修 榎本秋

発 行 所 株式会社榎本事務所
〒179-0076
東京都練馬区土支田1-29-12 ファミール光が丘102
電話 03-6750-6341

表 紙 伊藤由希 (AMG 出版工房)

イ ラ ス ト Snow、仔樺、伊藤由希、ヒトエ、U35、うらら、正午あきら、新月竜、
橘ぼん
(すべて AMG 出版工房)

協 力 脇功一、三浦奈緒
(アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科)

本マガジンの配布、複製は不許可とする。